三重県埋蔵文化財調査報告１３３－８

火山遺跡・山神遺跡
良福寺跡・高寺南遺跡

１９９６・３

三重県埋蔵文化財センター

鋳型

溶解炉・フイゴ羽口

例　言

1　本書は、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

火山遺跡　　上野市山神字火山
山神遺跡　　上野市沖字山神
良福寺跡　　阿山郡伊賀町大字下柘植字寺後
高寺南遺跡　　名賀郡青山町伊勢路字高寺

2　本書は、平成７年度農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の第８分冊である。

3　調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産部と地元市町村が負担した。

4　調査および整理の体制は下記による。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課
整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課・管理指導課

5　調査にあたっては、地元の方々および各土地改良区、各市町村教育委員会、上野農林事務所、三重県農林水産部農地整備課、同部農村振興課に協力をいただいた。

6　火山遺跡については、五十川伸矢氏（京都大学埋蔵文化財研究センター）・山本彰氏（大阪府教育委員会文化財保護課）・森屋美佐子氏（㈶大阪府文化財調査研究センター）・亀井聡氏（同）・奈加智美氏（同）の、山神遺跡については、上村安生氏（斎宮歴史博物館普及課）のご教示を得た。

7　各遺跡の報文執筆は調査担当者があたり、その氏名を目次および文末に明記した。写真撮影は船越・木野本和之・伊藤裕偉が行い、全体の編集は船越が行った。

8　写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断りのない限り縮尺不同である。

9　本書の方位は、真北を用いた。なお、磁針方位は西偏６度30分（平成元年、国土地理院）である。

10　本書で用いた遺構表示記号は、下記の通りである。

ＳＢ＝掘立柱建物　　ＳＫ＝土坑　　ＳＥ＝井戸　　Ｐｉｔ＝柱、小穴
ＳＨ＝竪穴住居　　ＳＤ＝溝　　ＳＺ＝不明遺構

11　本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

12. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．火山遺跡 ……（船越重伸）… 1
1．位置と環境 …… 1
2．層序と遺構 …… 5
3．遺物 …… 12
4．結語 …… 23

Ⅱ．山神遺跡 ……（船越重伸）… 33
1．位置と環境 …… 33
2．層序と遺構 …… 36
3．遺物 …… 37
4．結語 …… 41

Ⅲ．良福寺跡 ……（西澤裕幸）… 47
1．調査に至る経過 …… 47
2．位置と環境 …… 47
3．遺構 …… 49
4．遺物 …… 49
5．結語 …… 49

Ⅳ．高寺南遺跡 ……（服部芳人）… 53
1．はじめに …… 53
2．層序と遺構 …… 55
3．遺物 …… 57
4．結語 …… 57

挿　図　目　次

Ⅰ．火山遺跡
第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　調査区位置図
第４図　Ａ地区遺構平面図
第５図　Ｂ・Ｃ地区遺構平面図
第６図　ＳＢ２実測図
第７図　ＳＥ４遺物出土状況図
第８図　ＳＫ７実測図
第９図　ＳＫ９実測図
第10図　ＳＫ27・28実測図
第11図　ＳＫ13実測図
第12図　ＳＫ14・ＳＤ24実測図
第13図　ＳＫ29・30出土状況図
第14図　Ａ地区遺構出土遺物実測図(1)
第15図　Ａ地区遺構出土遺物実測図(2)
第16図　Ａ地区鋳造関係出土遺物実測図(1)
第17図　Ａ地区鋳造関係出土遺物実測図(2)
第18図　土符実測図
第19図　Ａ地区包含層出土遺物実測図
第20図　Ｂ・Ｃ地区出土遺物実測図
Ⅱ．山神遺跡
第21図　遺跡位置図
第22図　遺跡地形図
第23図　調査区位置図
第24図　調査区平面図
第25図　北壁土層断面図
第26図　ＳＨ１・２実測図
第27図　出土遺物実測図(1)
第28図　出土遺物実測図(2)
第29図　弥生土器拓影
第30図　出土遺物実測図(3)
Ⅲ．良福寺跡
第31図　遺跡位置図
第32図　遺跡地形図
第33図　調査区位置図
第34図　調査区平面図および東壁土層断面図
第35図　出土遺物実測図
Ⅳ．高寺南遺跡
第36図　遺跡位置図
第37図　遺跡地形図および周辺の遺跡
第38図　調査区位置図
第39図　遺構平面図および西壁土層断面図
第40図　ＳＫ３実測図
第41図　ピット５実測図
第42図　出土遺物実測図

写　真　図　　版　目　次

Ⅰ．火山遺跡

Ａ地区西側全景（北から）
Ａ地区東側全景（北から）
Ｂ地区全景（西から）
Ｃ地区全景（西から）
Ａ地区作業風景
ＳＢ２（北から）
ＳＥ４遺物出土状況（東から）
図版２　ＳＫ13・掘削途中（西から）
ＳＫ13・掘削途中（南から）
ＳＫ13・掘削終了（東から）
ＳＫ13・掘削終了（西から）
ＳＫ７・ＳＫ９（南から）
ＳＫ７・ＳＫ９（東から）
ＳＫ27・ＳＫ28遺物出土状況（北から）
ＳＫ30遺物出土状況（北から）
図版３　出土遺物(1)
図版４　出土遺物(2)
図版５　出土遺物(3)

Ⅱ．山神遺跡図版１

図版６　調査区全景（南から）
調査区全景（北から）
ＳＨ１（南から）　ＳＨ２（西から）
遺物（80）出土状況（西から）
作業風景（南から）出土遺物(1)
図版７　出土遺物(2)

Ⅲ．良福寺跡

図版８　調査区全景（南から）
ＳＤ１（北から）
出土遺物（１：３）

Ⅳ．高寺南遺跡

図版９　東西調査区全景（西から）
南北調査区全景（北から）
出土遺物

表　目　次

Ⅰ．火山遺跡

第　１　表　土符観察表
第　２　表　鋳造関係遺物観察表
第３－１表　出土遺物観察表
第３－２表　出土遺物観察表

Ⅱ．山神遺跡

第４－１表　出土遺物観察表
第４－２表出土遺物観察表
第４－３表出土遺物観察表

Ⅲ．良福寺跡

第５表　出土遺物観察表

Ⅳ．高寺南遺跡

第６表　周辺の遺跡一覧表
第７表　出土遺物観察表

Ⅰ．上野市山神　火山遺跡

1　位置と環境

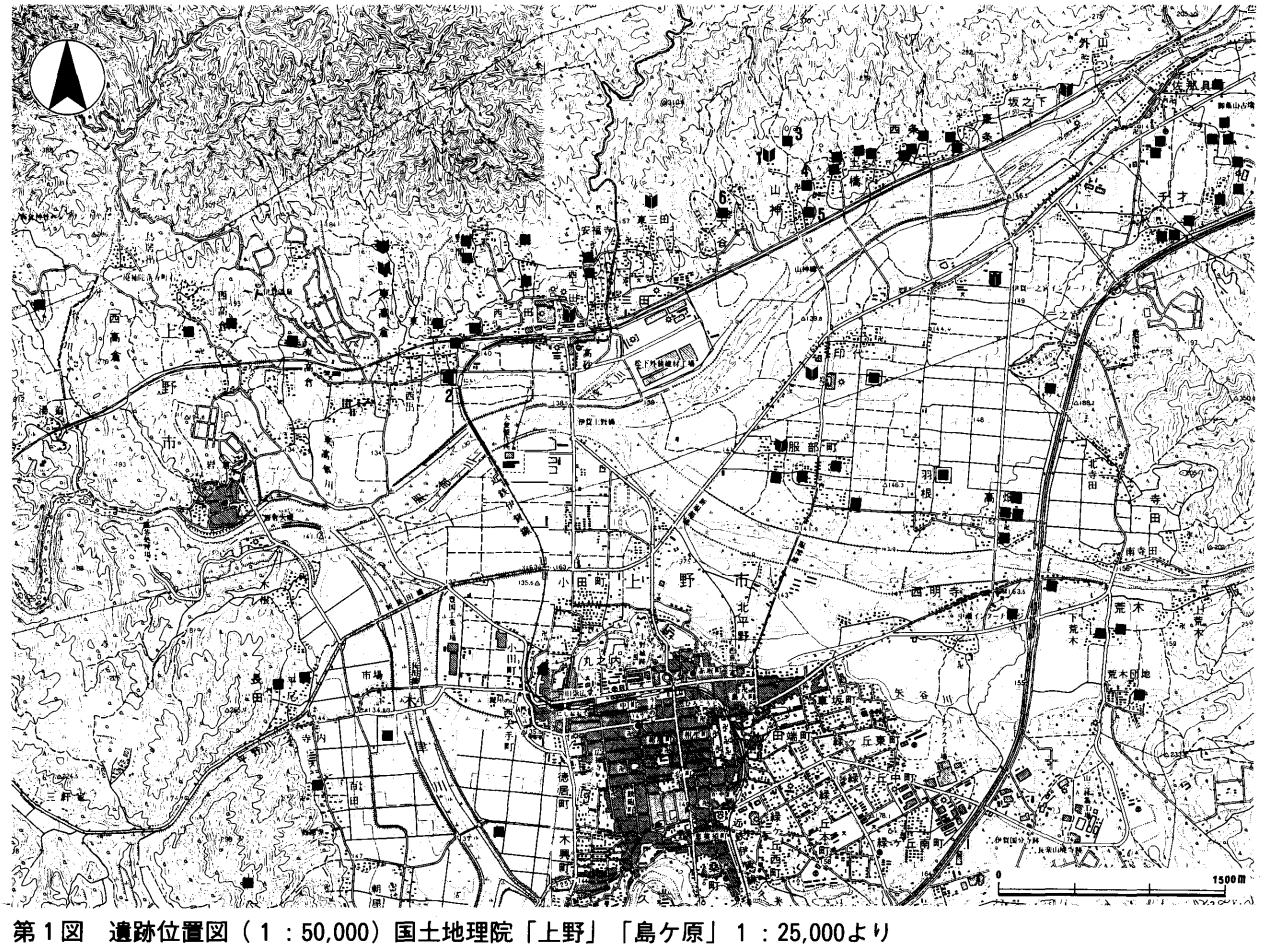
火山遺跡（1）は、柘植川右岸の丘陵に挟まれた開析谷に形成された小規模な扇状地の端部に位置し、行政上は三重県上野市山神字火山である。

上野市北部を流れる柘植川の沿岸部には、県下最大の前方後円墳である御墓山古墳や三角縁唐草文帯三神二獣鏡・変形神獣鏡が出土した山神寄建神社古墳など大小さまざな古墳が点在する。また、古代には伊賀国を統括していた伊賀国庁が現在の上野市佐那具に置かれ、柘植川に沿って旧東海道が通っており、古くから開けていた地域である。

室町時代の伊賀国守護は、建武4（1537）年から文和3（1553）年のわずか十五年間に仁木・千葉・桃井・高・細川氏と計8回も交代[1]したが、以後は仁木氏が守護を務めている。この仁木氏の守護所跡が、上野市東高倉の上山宅跡（2）と推定されているものの、はっきりとしたことはわかっていない。

伊賀国守護としての仁木氏は、その勢力を伊賀国一円に伸ばすことは出来ず、伊賀北部での勢力にとどまったようである。

この時期の伊賀は小領主が分立し、彼ら領主たちは拠点としての城館を多数築いている。その総数は、伊賀国全体で500ヵ所以上にものぼり、『三国地誌』旧阿拝郡内に250ヵ所の名が見える。[2]当遺跡の周辺にも、城屋敷宅跡（3）、奥知氏館跡（4）、城屋



第1図　遺跡位置図（1：50,000）国土地理院「上野」「島ケ原」1：25,000より

■印は中世城館、印は土符出土地

第2図　遺跡地形図（1：6,000）

敷跡（５）、宇津賀大谷氏館跡（６）、菅野氏館跡、鹿島氏館跡、原田氏館跡、高谷氏館跡、宮川氏館跡、松本氏館跡、林氏館跡などがある。特に城屋敷宅跡[3]は、当遺跡の北東に近接しており、鞍部を２ヵ所の切岸に整形した戦国時代の城館跡である。

これらの城館を築いた小領主層たちは、彼ら単独では村落に対して支配力を行使し得ず、最終的には「伊賀惣国一揆」という地域的一揆体制を成立させた[4]。しかし、織田信長による伊賀攻め・「天正伊賀の乱」により崩壊し、伊賀国は大名による一国支配へと移行する。この変化の中で、在地領主層たちは「無足人」という形で大名の支配下に組み込まれていく[5]。

第３図　調査区位置図（１：2,000）

第４図　Ａ地区遺構平面図（１：300）

2　層序と遺構

(1)　層序

Ａ・Ｂ・Ｃ地区ともに現況は水田で、谷筋に位置するために各田面の高低差が著しく、特にＡ・Ｂ地区では４ｍ程度の高低差がみられる。

Ａ地区の基本層序は、北側部分は耕作土、暗灰色砂質土、灰色粘土の順で、50cmで褐色土もしくは淡黄灰色砂質土（遺構基盤層）に達する。南側は耕作土、淡橙灰色土、灰黄色土（包含層）の順で、耕作面から約１ｍで明黄灰色粘質土（遺構基盤層）に達する。Ｂ地区は、北側部分は耕作土、淡褐色土（包含層）の順で、耕作面から90cmで明黄灰色粘質土（遺構基盤層）に達し、南側部分は耕作土、灰黄色土（包含層）の順で、耕作面から30cmで明黄灰色粘質土（遺構基盤層）に達する。Ｃ地区は、耕作土、灰黄色土（包含層）の順で、耕作面から50cmで明黄橙色土（遺構基盤層）に達する。

(2)　遺構

Ａ　Ａ地区の遺構

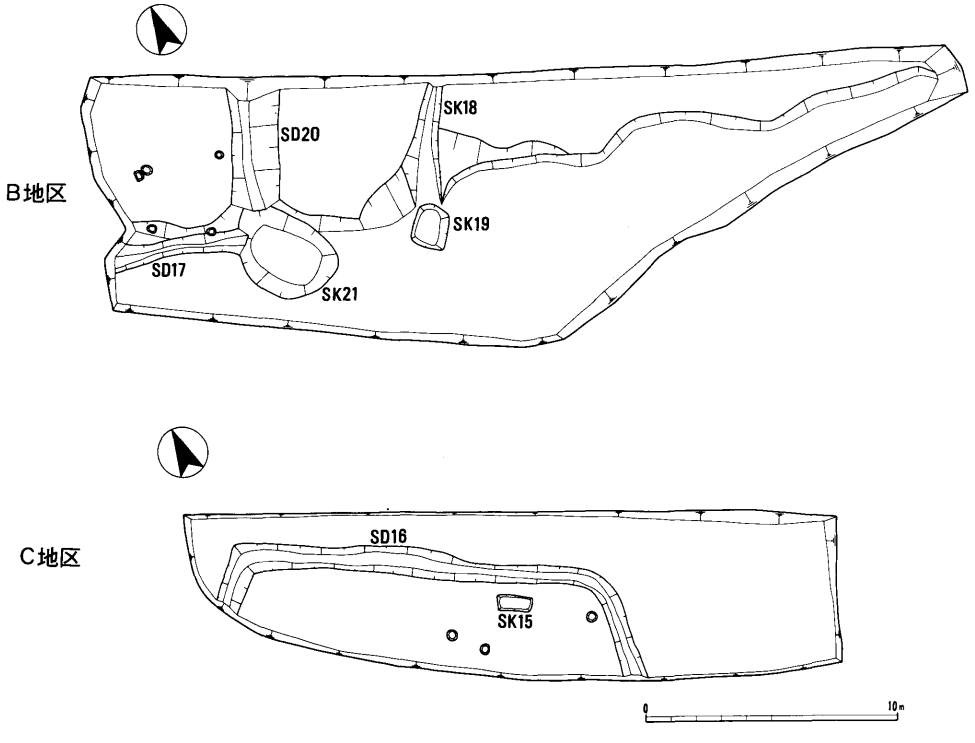
掘立柱建物１棟、井戸１基、溝10条、土坑６基、鋳造関係土坑４基などを検出した。いずれも鎌倉～室町時代を中心とし、一部近世のものも含む。

a　掘立柱建物

ＳＢ２（第６図）　５間×２間の総柱建物である。土師器の小片がわずかしか出土していないため、時期は特定できない。

b　井戸

ＳＥ４（第７図）　調査区北端中央付近で検出した。1.5ｍ×1.1ｍの長方形で、深さ2.7ｍの素掘りの井戸である。出土遺物から近世のものと考えられる。



第５図Ｂ・Ｃ地区遺構平面図（１：300）

c　溝

ＳＤ１　東西方向の溝で、幅0.4～0.8ｍ、深さ約0.2ｍである。土師器と陶器が出土した。

ＳＤ６　東西方向の溝で、幅0.4ｍ、深さ約0.1ｍである。陶器が出土した。

ＳＤ10　東西方向の溝で、幅0.8ｍ、深さ約0.1ｍである。土師器や須恵器、陶器、瓦器のほか、フイゴ羽口が２点出土した。

ＳＤ11　調査区東端を南北に流れる幅0.8ｍ、深さ0.3ｍの溝である。土師器や陶器のほか、鋳型や溶解炉が出土した。

ＳＤ12　幅0.4～１ｍ、深さ約0.1ｍの溝である。陶器や青磁のほか、フイゴ羽口が出土した。

ＳＤ22　南北方向の溝で、幅0.5ｍ、深さ約0.2ｍである。土師器や陶器、瓦器が出土した。

ＳＤ23　東西方向の溝で、幅約0.4ｍ、深さ約0.1ｍである。土師器が出土した。

ＳＤ24（第12図）　南北方向の溝で、幅0.5～0.8ｍ、深さ約0.2ｍの溝である。この溝からは、土師器、須恵器、瓦器のほか、鋳造関係土製品や用途不明の円形の石製品が出土した。

d　土坑

ＳＫ３　不整形な土坑である。土師器や須恵器が出土した。

ＳＫ５　長径1.2ｍ、短径１ｍ、深さ0.3ｍの楕円形の土坑である。土師器や陶器のほか、鋳造関係土製品の破片が出土した。

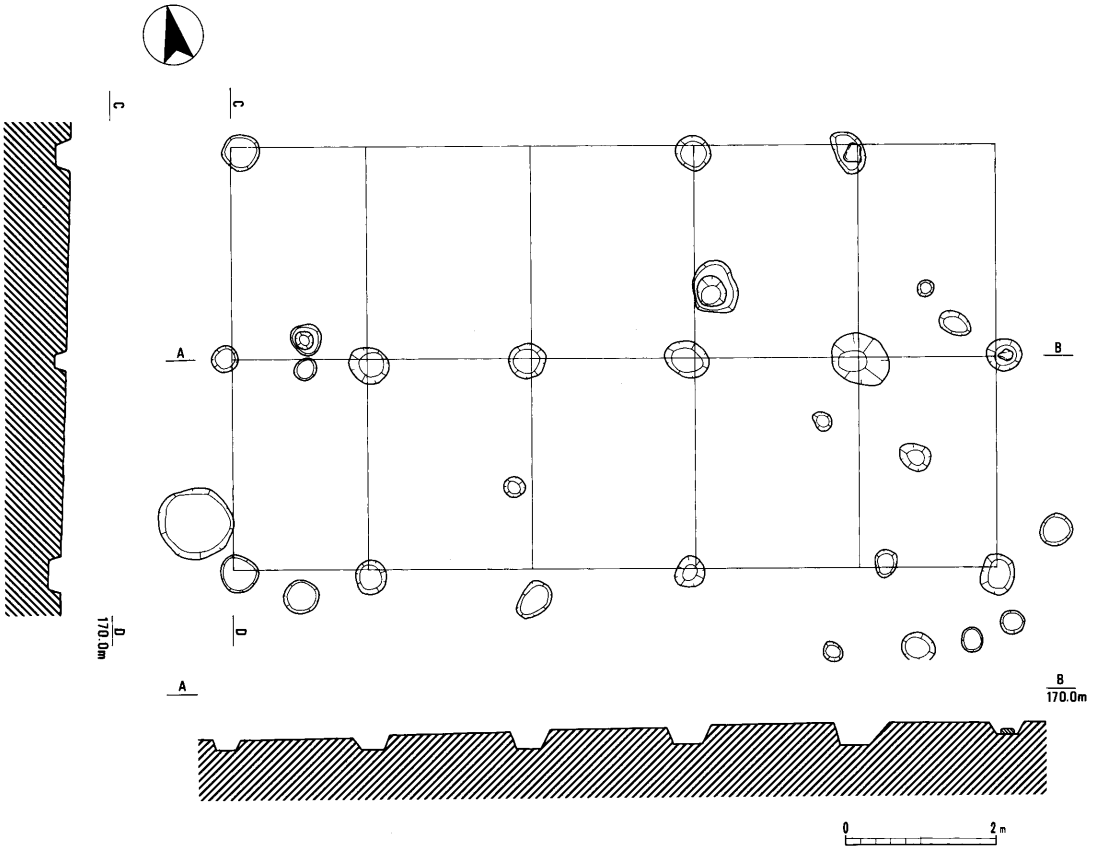
ＳＫ８　1.2ｍ×１ｍ、深さ0.2ｍの方形の土坑である。土師器や黒色土器、瓦器が出土した。

ＳＫ25　一辺が2.5ｍの方形の土坑である。土師器や陶磁器、瓦器が出土した。

ＳＫ26　幅0.8ｍのＬ字状の土坑である。土師器や瓦器が出土した。

ＳＫ27（第10図）　長径0.6ｍ、短径0.4ｍ、深さは約0.2ｍの楕円形状の土坑である。

ＳＫ28（第10図）　一辺約0.7ｍ、深さ約0.4ｍの方



第６図　ＳＢ２実測図（１：100）

形の土坑である。三叉状土製品が出土した。

ＳＫ29（第13図）　長径0.5ｍ、短径0.3ｍ、深さ0.1ｍの土坑で、土師器皿が１点出土した。

ＳＫ30（第13図）　直径約0.5ｍ、深さ0.3ｍの土坑で、土師器皿が６点出土した。

e　鋳造関係土坑

ＳＫ７（第８図）・ＳＫ９（第９図）　土師器、陶磁器などのほか、鋳造関係土製品や土符、鉱滓、炭などが出土しており、廃棄土坑と考えられる。

ＳＫ７は、長径5.6ｍ、短径4.8ｍ以上の楕円形の土坑で、溶解炉と鋳型、フイゴ羽口、三叉状土製品、炭などが出土した。

ＳＫ９は、5.2ｍ×4.6ｍの長方形の土坑で、フイゴ羽口のほか、鉱滓が多く出土した。ＳＫ９内には大小さまざまな石があったが、その配列に規則性は見られないので、遺構に伴うものではないと考えられる。

ＳＫ13（第11図）　調査区中央付近で検出した鋳造土坑である。中央部分は規模2.1ｍ×2.5ｍで、ほぼ正方形をしており、深さは約0.9ｍである。ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、掛木の痕跡などは認められなかった。さらに西辺部分は半円形に広がり、一段浅くなっている。製品を取り出す際に利用されたものと考えられる。東側には２ｍ×3.5ｍの方形部分がつながっているが、性格は不明である。土坑内からは、土師器、灰釉陶器のほか、鋳型や鉱滓が出土した。

土坑内には、両面にドーナツ状の褐色の帯が認められる石と、径1.3ｍ程度の巨石が落ち込んでいたが、いずれも遺構に伴うものではない。ただし、前者は鋳造に関係するものと思われる。

ＳＫ14（第12図）　不整形な土坑で、ＳＫ13の南側に近接している。陶器や瓦器、瓦、銅銭などのほか、鋳型や鉱滓が出土しており、ＳＫ13に付随する施設の可能性が考えられる。

Ｂ　Ｂ地区の遺構

a　溝

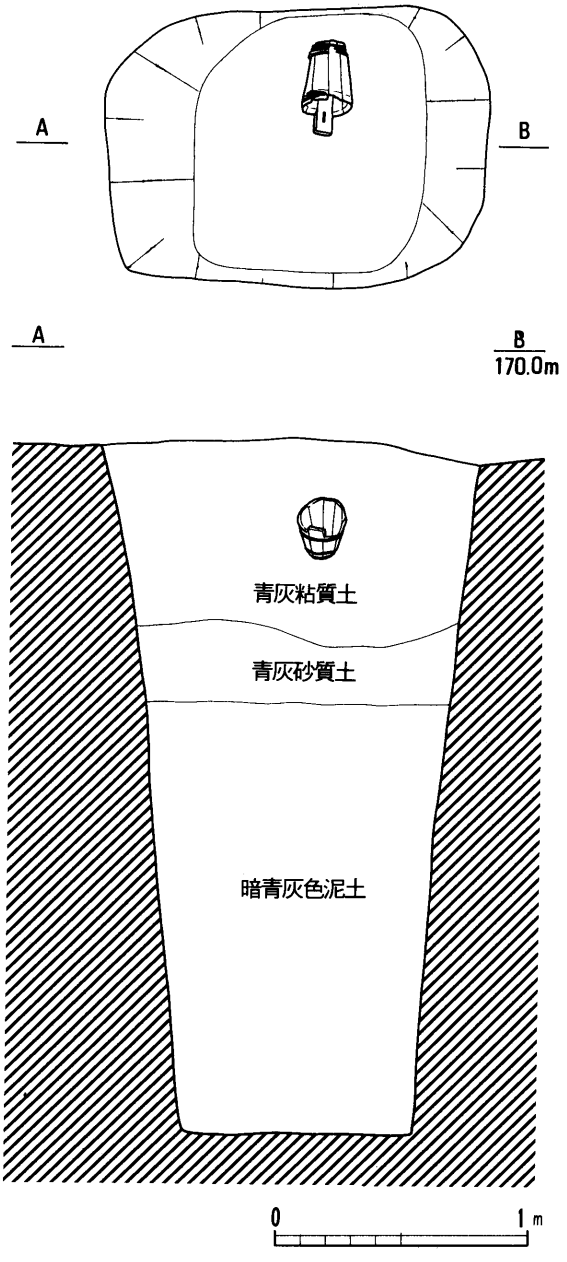
ＳＤ17　幅１ｍ、深さ約0.1～0.2ｍの東西方向の溝である。土師器や須恵器、陶器、瓦器が出土した。

ＳＤ18　幅１ｍ、深さ約0.1～0.2ｍの南北方向の溝である。土師器や須恵器、瓦器が出土した。

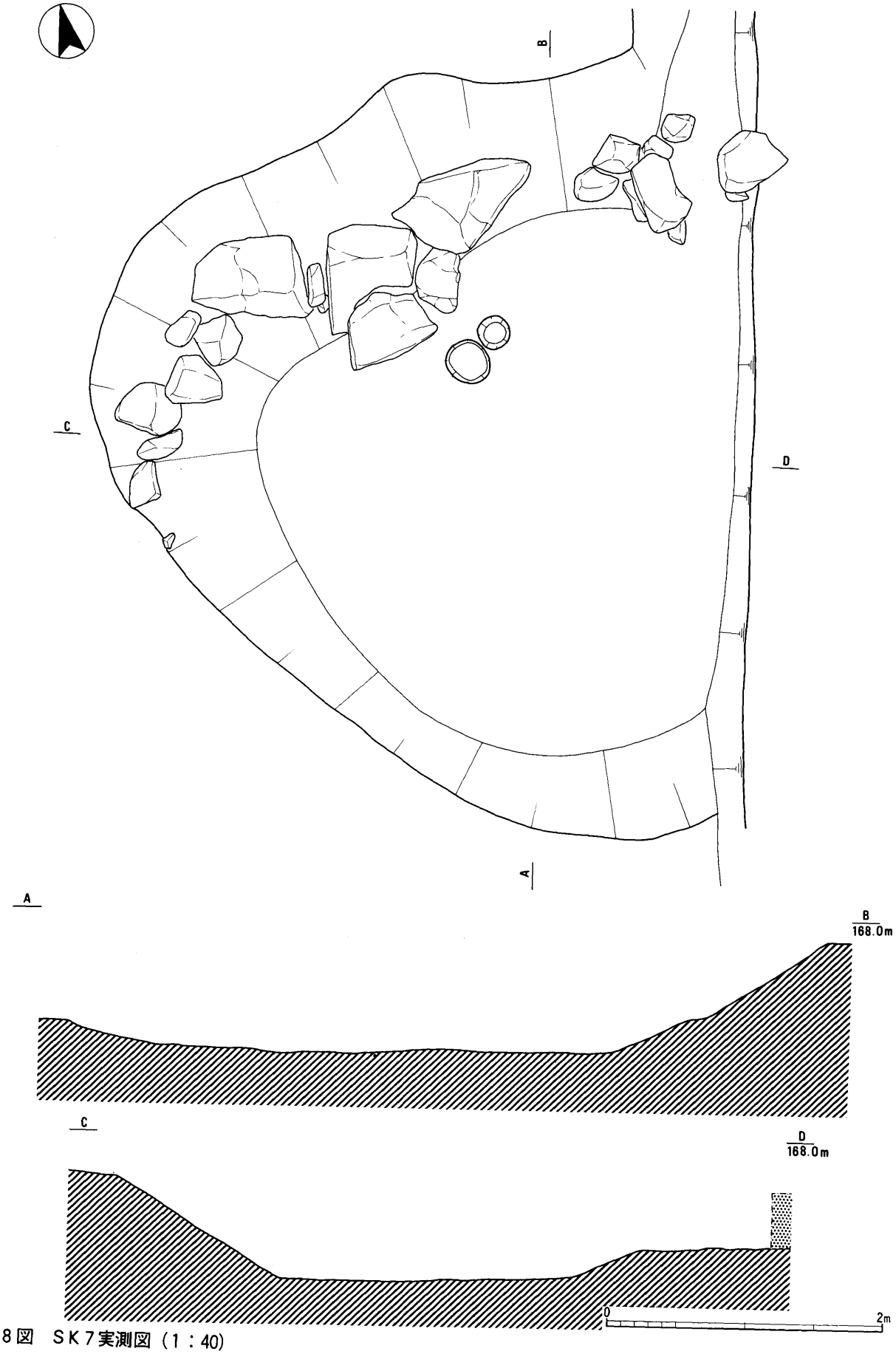
ＳＤ20　幅は２ｍ、深さ約0.1～0.2ｍの南北方向の溝である。土師器や須恵器、瓦器が出土した。

b　土坑

ＳＫ19　1.5ｍ×２ｍの長方形で、深さは0.3ｍであ



第７図　ＳＥ４遺物出土状況図（１：30）



第８図　ＳＫ７実測図（１：40）

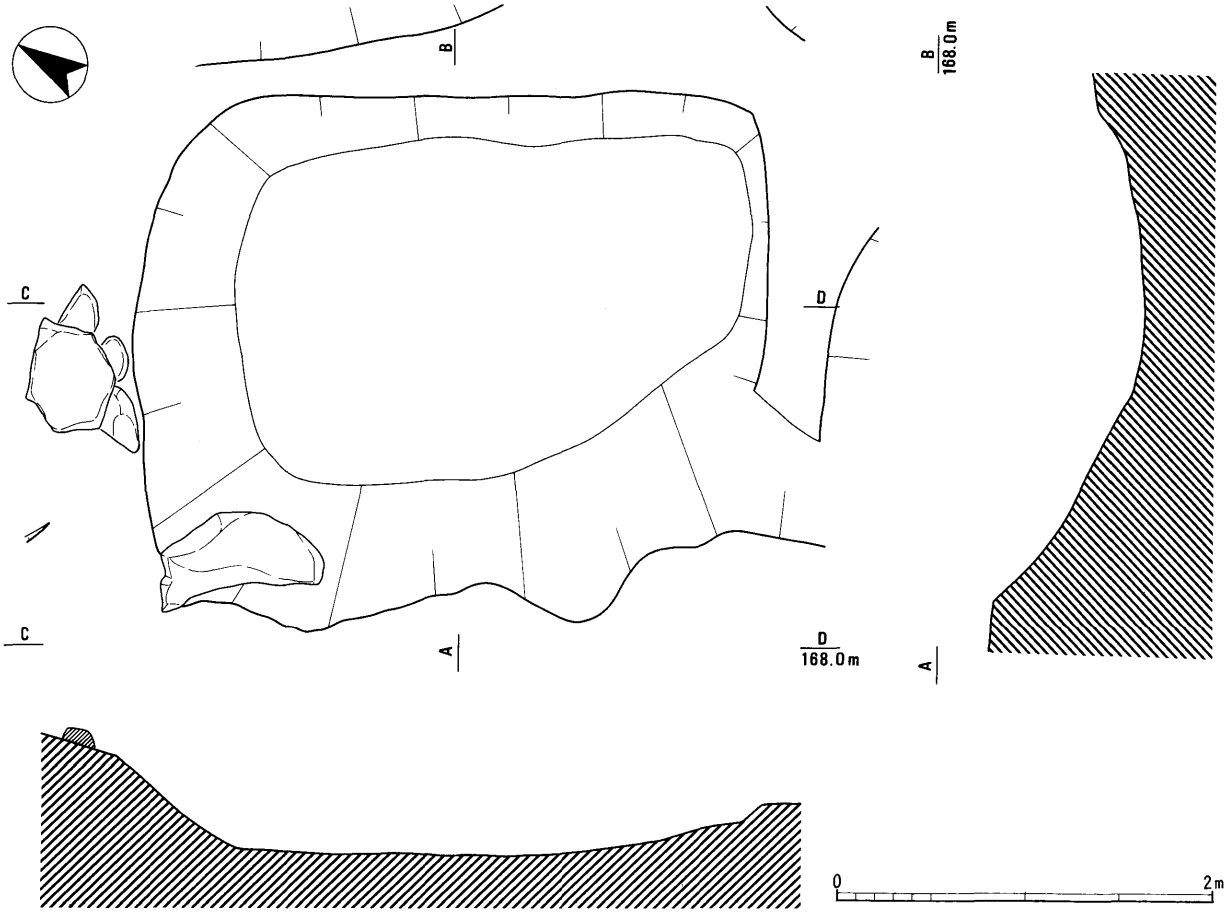
る。土師器や瓦器のほか、鋳造関係土製品が出土した。

ＳＫ21　短径３ｍ、長径４ｍの楕円形で、深さは約0.3ｍである。土師器と陶器が出土した。

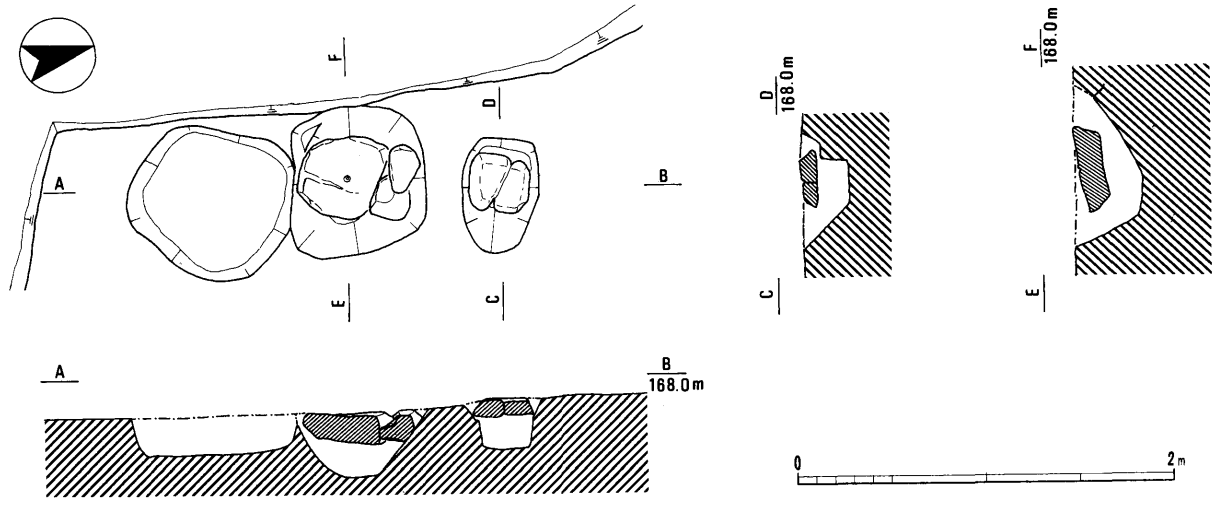
Ｃ　Ｃ地区の遺構

ａ　溝

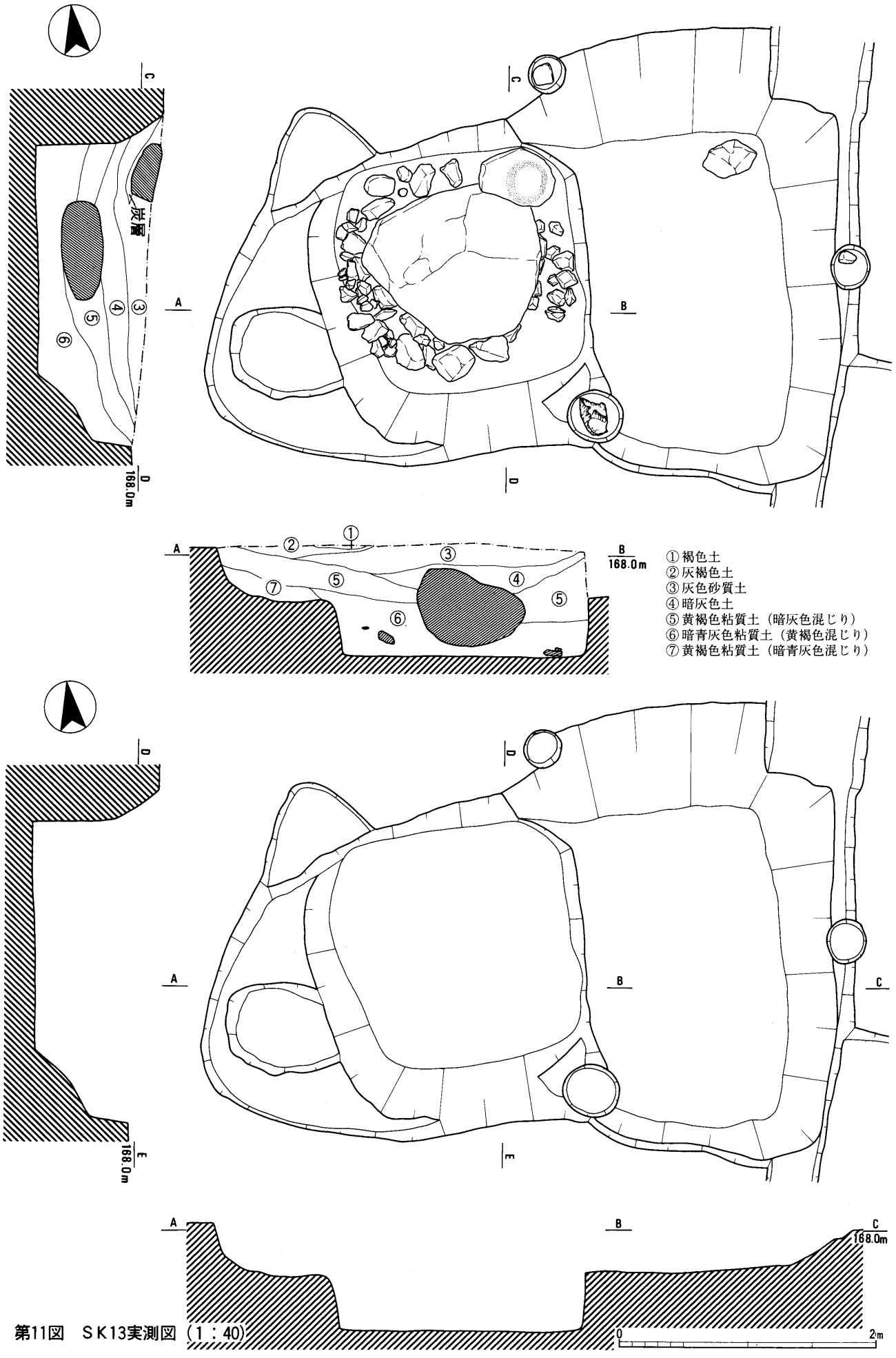
ＳＤ16　幅約１ｍ、深さ約0.2ｍの溝である。コの字状に検出したが、両端部はさらに南側に延びるも



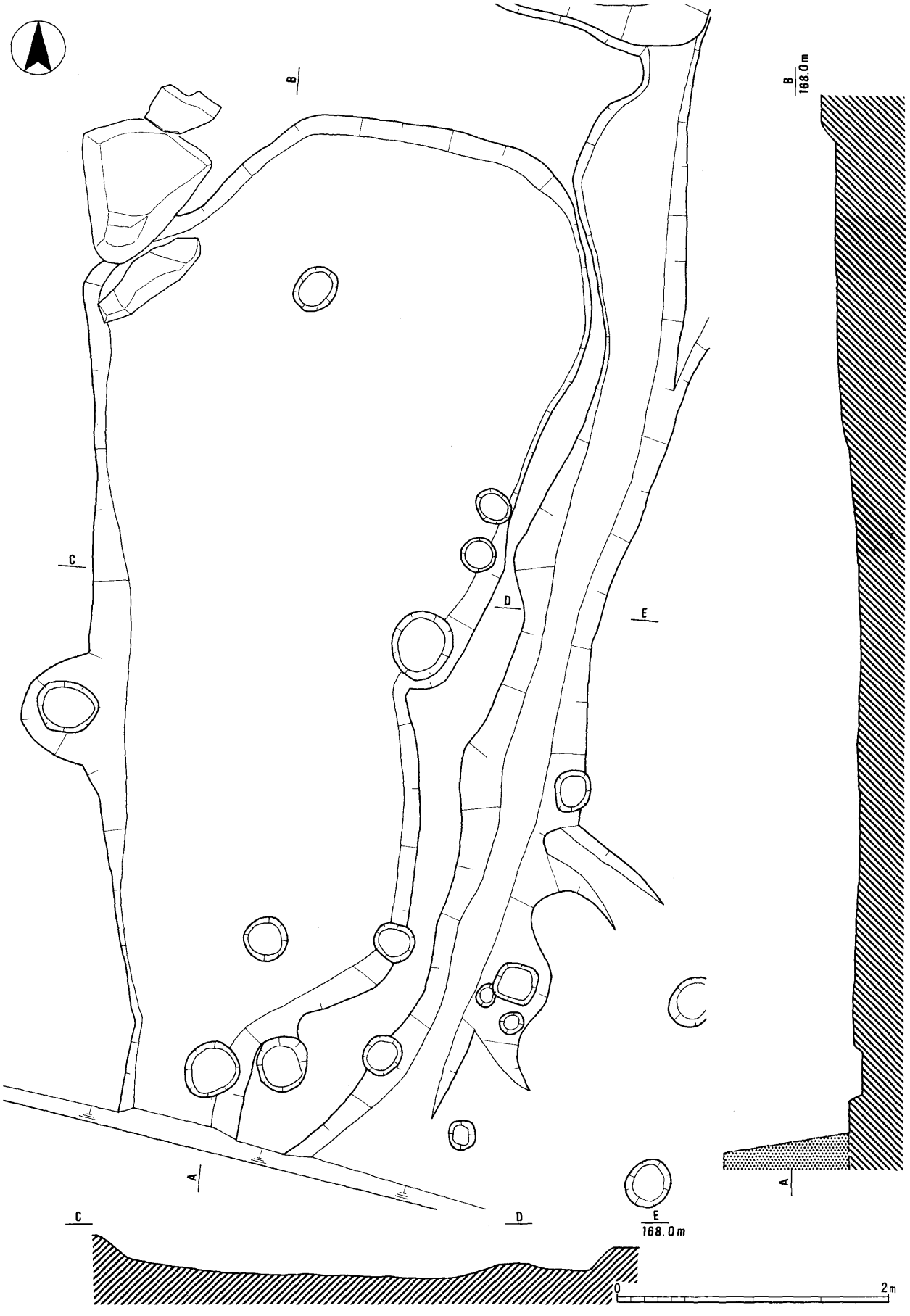
第９図　ＳＫ９実測図（１：40）



第10図　ＳＫ27・28実測図（１：40）



第11図　ＳＫ13実測図（1：40）

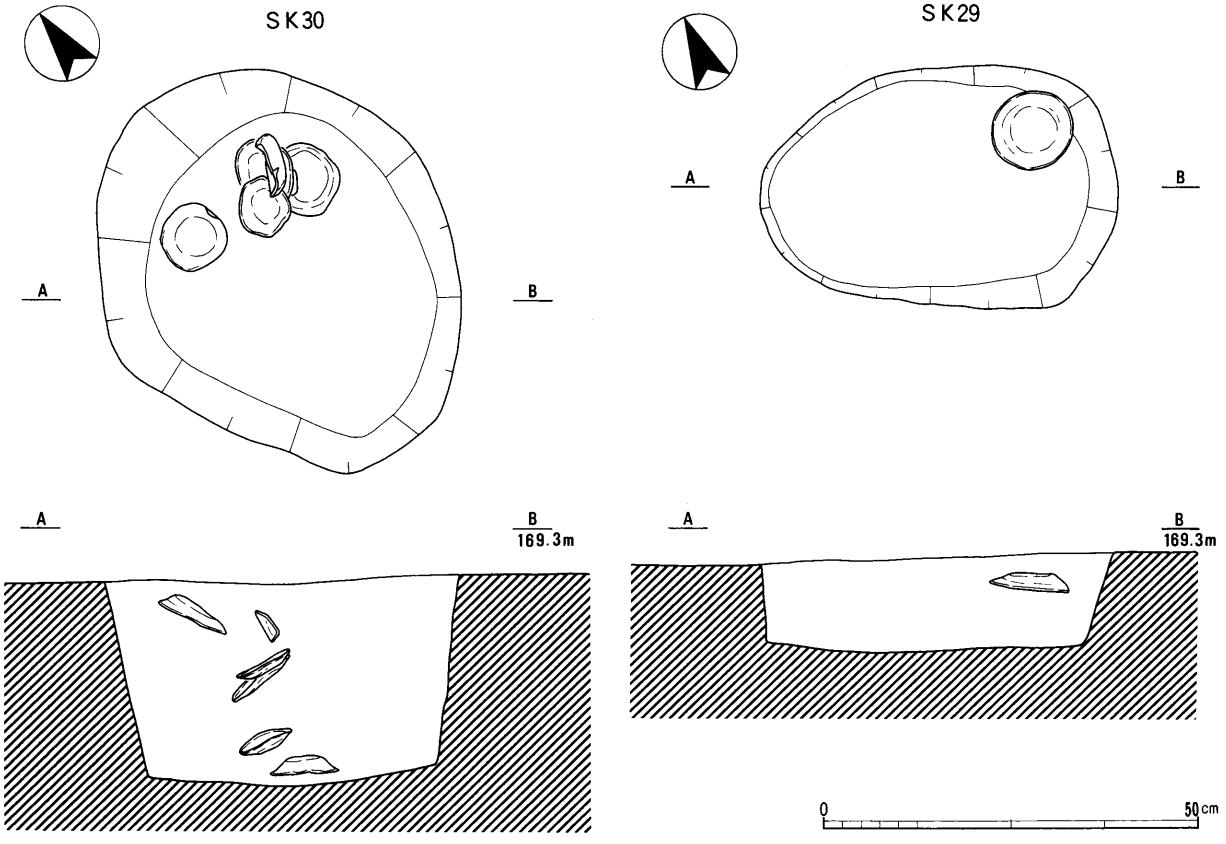


第12図　ＳＫ14・ＳＤ24実測図（１：40）

のと思われる。土師器や須恵器、陶器のほか、フイゴ羽口、鉱滓が出土した。

b　土坑

ＳＫ15　1.5ｍ×0.7ｍの長方形で、深さは約0.1ｍである。土師器、陶磁器が出土しており、埋土には、炭が混入していた。



第13図　ＳＫ29・30遺物出土状況図（１：10）

3　遺　　物

(1)　Ａ地区出土の遺物

Ａ地区の遺物は、古墳時代から室町時代にかけての土師器、黒色土器、陶器、輸入陶磁器、瓦器などのほか、鋳造関係遺物、土符が出土している。特に、ＳＫ７やＳＫ９からは、鋳造関係遺物がまとまって出土した。

Ａ　遺構出土遺物

a　ＳＤ１出土遺物

折口中皿（１）　口縁部は外反せず、内側に小突起がある。

b　ＳＥ４出土遺物

桶（43）　上層部分から出土した木製品である。上部外径19.5cm、底部外径15cm、高さ26cmである。上部１本、下部３本の竹製のタガでとめられている。底板外面には「㊋」の焼き印が押されている。

c　ＳＫ７出土遺物

土師器皿（２・３）　３は、口縁端部を尖りぎみに丸くおさめ、底部器壁は１cmと厚い。

壷（５）　口縁部は強く外反し、口縁端部を丸くおさめる。信楽産と思われる。

甕（６）　内湾する体部にＮ字状の口縁部がつき、口縁端部外面は肥厚する。信楽産と思われる。
鉢（７）　体部は直線的に開き、口縁部は直立する。口縁端部は内傾する面をもつ。信楽産と思われる。
火舎（４）　肩部から底部にかけての破片で、四重の□に×を組み合わせた文様のスタンプが押されており、その下に凸線がめぐっている。
白磁（８・９）　８は、白磁皿である。底部は削出高台で、高台の３ヵ所以上に弧状の抉り込みを入れている。内面には重ね焼きの目跡が２ヵ所残っている。15世紀代のものと考えられる。９は、玉縁状口縁をもつ椀である。
空風輪（45）　積組式五輪塔の空風輪である。花崗岩製で高さ約24cmである。幅は、空輪部14.3cm、風輪部15.6cmである。出枘部は、高さ1.4cm、幅約５cmである。

ｄ　ＳＫ９出土遺物

土師器皿（10）　口縁部はやや外反し、底部中央が内側にへこむ。
平椀（11・12）　12は、体部はやや丸味を帯びている。高台は削出高台で、幅が広く高台内および高台脇の削り込みは浅い。内面には、まばらに釉がかかる。

ｅ　ＳＤ10出土遺物

天目茶椀（13）　底部径4.5cm。高台高は約１cmで、高台内側はロクロナデしており、貼付高台と思われる。外面の釉は、高台付近まで垂れている。古瀬戸中Ｉ期のものである。[6]

ｆ　ＳＤ11出土遺物

鉢（15）　体部は直線的に開き、口縁部は内弯する。口縁端部を平坦に仕上げている。信楽産と思われる。
擂鉢（16）　擂目は1.3cm幅に５本あり、底部内面には炭化物が付着している。信楽産と思われる。

ｇ　ＳＤ12出土遺物

青磁椀（14）　径7.5cmの底部片で、龍泉窯系と思われる。高台は高く、断面四角である。深緑色の釉が厚くかかっており、施文の有無は不明である。高台の内側の釉は、中央部を残して掻き取られている。明代のものである。

ｈ　ＳＫ13出土遺物

土師器皿（17～19）　18は弓状の断面をもち、内面の上半分に炭化物が付着している。19は、底部内面と口縁部外面上部に沈線がみられる。
施釉陶器（20）　高台は貼付高台で、高台内には糸切り痕が残る。14世紀代のものと思われる。

ｉ　ＳＫ14出土遺物

銅銭（42）　北宋銭の「元豊通宝」（初鋳1078年）である。直径約2.5cm、厚さ２mm程度である。

ｊ　ＳＤ23出土遺物

土師器皿（21）　弓状の断面をもち、外面には黒斑がみられる。

ｋ　ＳＤ24出土遺物

石製品（44）　環状の石製品で、表面は研磨されており、中央付近を両側から穿孔している。片面にはススが付着している。用途は不明である。

ｌ　ＳＫ25出土遺物

土師器皿（22・23）　22は、底部が平坦で器高が低い。23は丸味のある底部をもち、口縁端部は外反する。
白磁椀（24）　玉縁状口縁をもつ。乳白色の釉がかかる。

ｍ　ＳＫ27出土遺物

五輪塔（46）　五輪塔の台座部分と思われる。31.5cm×30.5cmの方形である。

ｎ　ＳＫ28出土遺物

火輪（47）　花崗岩製で、幅約27.5cm、高さ14cmである。出枘部は、径約15cm、深さ約７cmである。

ｏ　ＳＫ30出土遺物

土師器皿（25～30）　口径8.2～10.2cm、器高1.55～2.5cmである。26～30の体部には稜が認められる。28の口縁部外面には黒斑がみられる。

ｐ　ＳＫ31出土遺物

土師器皿（31）　口縁部は外反ぎみに開き、口縁端部を丸くおさめる。外面には、薄くススが付着している。

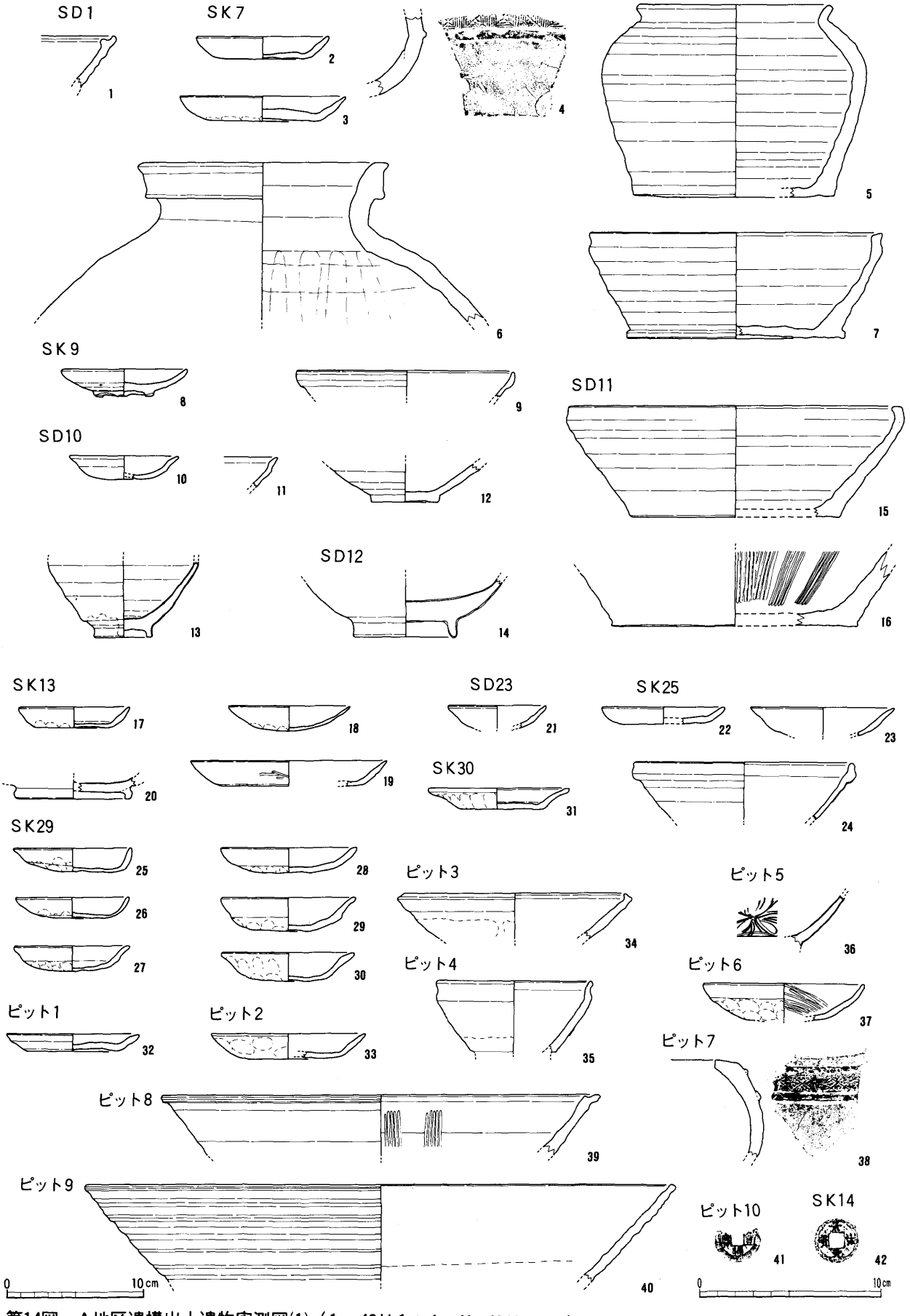
Ｂ　ピット出土遺物

ａ　ピット１出土遺物

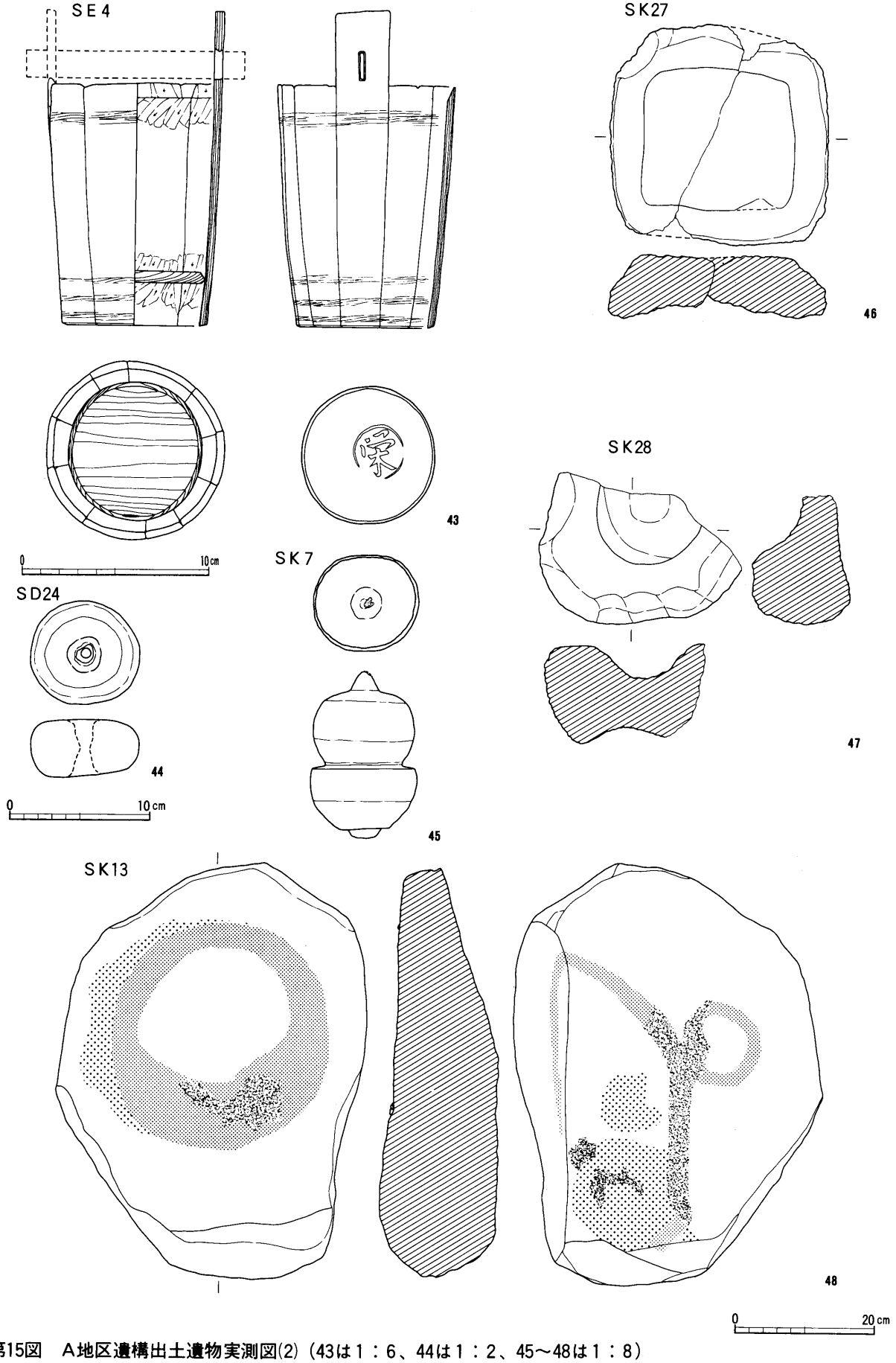
土師器皿（32）　器高は低く、底部外面がやや内側に窪む。

ｂ　ピット２出土遺物

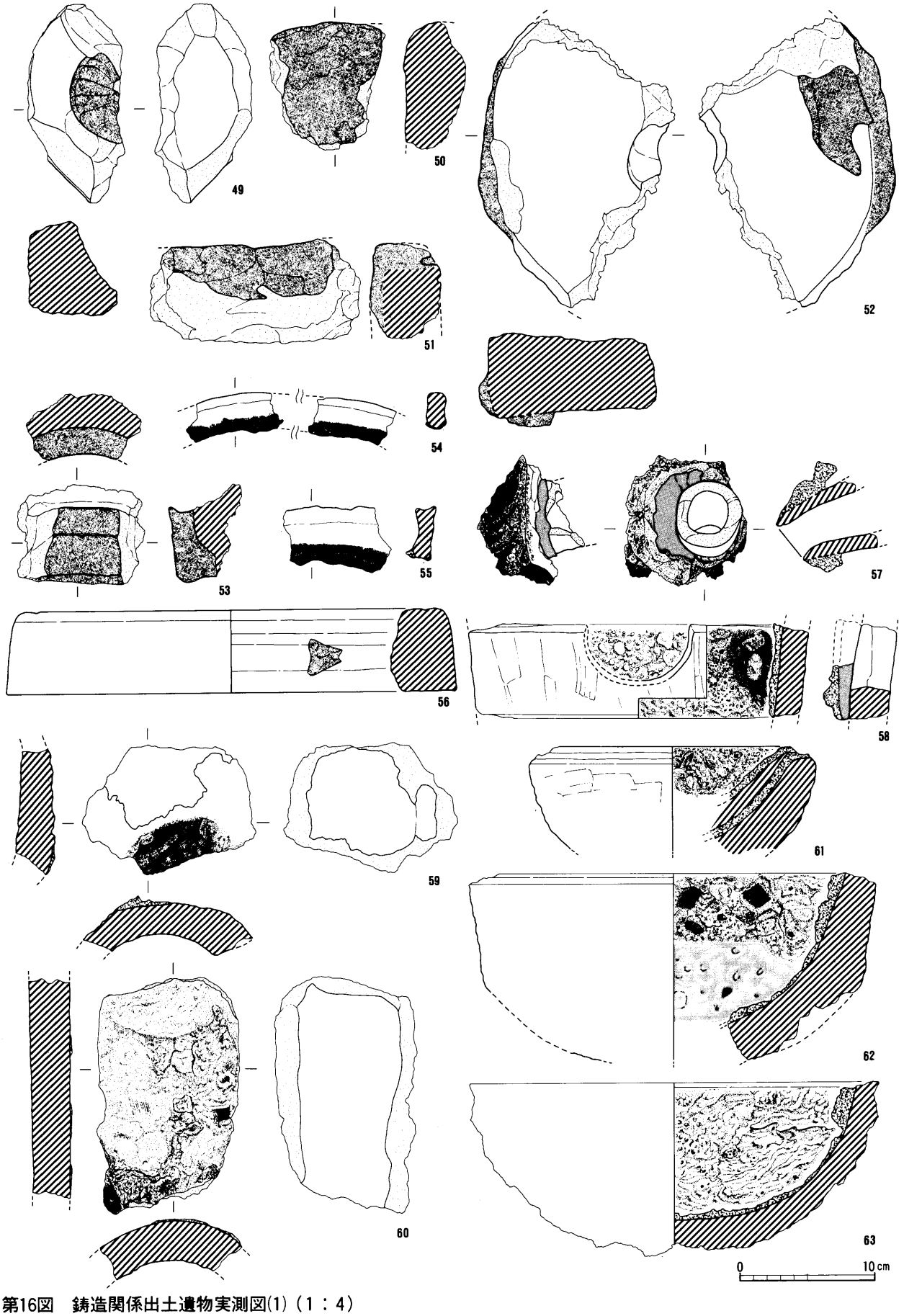
土師器皿（33）　口縁部は直線的に開き、口縁端部



第14図　A地区遺構出土遺物実測図(1)（1～40は1：4、41・42は1：3）



第15図　A地区遺構出土遺物実測図(2)（43は1：6、44は1：2、45～48は1：8）



第16図　鋳造関係出土遺物実測図(1)（1：4）

は尖りぎみに丸くおさめる。底部内面に沈線状の強いナデがみられる。

c　ピット3出土遺物

折縁中皿（34）　体部は直線的に開き、口縁端部を内側につまみあげて丸くおさめる。

d　ピット4出土遺物

天目茶椀（35）　体部は直線的で、口縁部は直立し口縁端部は外反する。

e　ピット5出土遺物

青白磁（36）　内面に花弁文がみられ、底部に沈線が認められる。

f　ピット6出土遺物

瓦器椀（37）　口径は11.7cmで、内面に疎らなミガキを施すもので、口縁部内面の沈線は消失している。底部を欠いているが、山田編年⑦のⅢ段階の3型式または4型式に相当すると思われる。

g　ピット7出土遺物

火舎（38）　口縁部から肩部にかけての破片で、肩部には2条の凸線がめぐり、その間には花菱文が押印されている。

h　ピット8出土遺物

擂鉢（39）　擂目が1.25cmの幅に5本ある。山田編年⑧のⅣb型式に相当するものと思われる。

i　ピット9出土遺物

直縁大皿（40）　体部は直線的で、口縁端部は丸くおさめる。

j　ピット10出土遺物

銅銭（41）　北宋銭の「景祐元宝」（初鋳1034年）で、直径2.5cm、厚さ2mmである。

C　鋳造関係遺物

溶解炉（58・61～63）　61・62・63はＳＫ７から、62はＳＫ７・ＳＤ11から出土した。

58は、フイゴ羽口が取り付く部分の炉壁である。内面は高温を受けており、鉱滓が付着している。フイゴ羽口を取り付けるための円形の孔があけられている。

61～63は、溶解炉底部である。径30cmのもの（62・63）と径21cmのもの（61）がある。器壁は2～4cmと厚く、内部には籾殻や藁がみられる。内面は高熱のために器壁の一部が溶けており、鉱滓や炭が付着している。61は、一度使用した底部内面に粘土を貼り付けた痕跡が認められ、再使用されたものと考えられる。

鋳型（49～53・56）　いずれも鋳型の外型である。49は、内面の形状から椀の鋳型と思われる。50・51・56は、用途不明の鋳型である。内面には真土が塗られている。51は、幅5.2cm、高さ7.2cmである。真土は内面から上端部にまで塗られている。上端部の真土の側面には径0.8cm、深さ1.2cmの孔がみられる。52は、推定径26cm、推定厚さ5～7cmの円形の鏡の鋳型である。中心には推定径6cmの孔が開けられており、表面と側面の一部に真土が認められる。53は羽釜の鋳型で、口縁部から鍔にかけての部分と思われる。

鋳造関係土製品（54・55・59・60）　54・55は幅約3～4cm、厚さ1～1.5cmの環状の土製品と考えられる。内面はかなりの高熱を受けているとみられ、付着物（鉱滓）が認められる。溶解炉壁どうしの接合部分に用いられる「ねなわ」と思われる。

59は長さ16cm、幅10.3cm、厚さ3cmの平瓦のような形態の土製品である。凸面側には鉱滓が部分的に付着している。凸面側は一部に高熱を受けた痕が認められるが、凹面側には全く認められない。60も同様の土製品であるが、凸面側は全面に高熱を受けた痕と鉱滓の付着が認められる。いずれもＳＫ７から出土した。

59・60の用途は、現在のところ不明である。高熱を受けたり、鉱滓が付着している部分が凹面ではなく凸面であることから、溶解作業に用いられる土製品ではないかと考えられる。

フイゴ羽口（57・64～69）　Ａ地区から24点、Ｃ地区から1点の計25点が出土しており、その多くは包含層出土である。

57は、フイゴ羽口で、溶解炉に取り付けられていた部分から先端部分までの破片である。先端部分には、鉱滓が付着している。破断面を観察すると付着している鉱滓と羽口の間には、羽口と溶解炉壁の隙間を埋めるために充填されたと思われる粘土が認められる。包含層出土である。

64～69は、フイゴ羽口の先端部分である。64はＳＫ７から、65・66はＳＫ９から、67はＳＤ10から、

68はＳＤ12から、69は包含層から出土した。形態は円筒形で、外径が40cm～74cm、内径が16cm～30cmと小型のものである。外面は、先端部分から高温により溶けた部分、暗灰色系部分、黄橙色系部分に分けられ、それぞれ炉内、炉壁、炉外の部分に相当すると考えられる。この境目の線は、羽口の中心線に対して50度前後の角度をなしており、溶解炉壁に対して50度前後の角度をもって取り付けられていたものと考えられる。

三叉状土製品（70～74）　鋳型の内面を乾燥させる工程で用いられる三つ又の道具である。藁と炭を置いて燃焼させるために、上面はよく焼けている。比較的大型のものである。

石（48）　ＳＫ13の北東隅で出土した。上面には、褐色の帯が直径32.5cm、幅3.5～10cmの円形に認められ、帯上の一部には鉄分と思われるものが付着している。円形に囲まれた部分の表面は、比較的滑らかな面であるが、帯の外側は高温を受けたため変質している。また、下面にも褐色の帯が長径40cm、短径19cm、幅１～３cmの楕円形状に認められる。上面と同様に帯に囲まれた部分は、比較的滑らかな面で、その外側は変質している。

Ｄ　土符

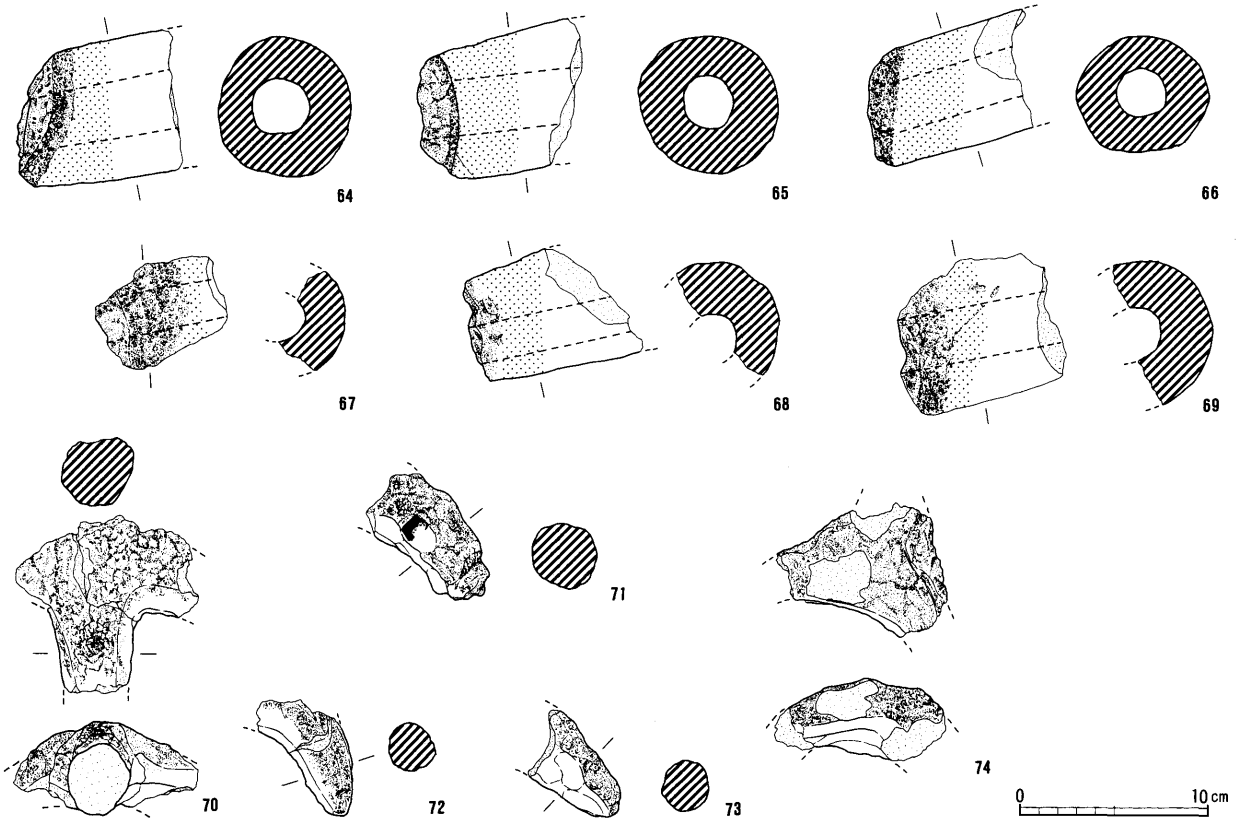
土符（75～86）　試掘調査で出土した１点を含め、計６点の土符が出土した。

土符は、上野市北部の柘植川沿岸地域にしかみられない、荷札状の素焼きのものである。一般的に長方形もしくは正方形に近い形状をしている。表面には、ヘラ書きの文字が認められ、片面に年月日、もう片面に花押および物品名があり、上端部または上下の端部に孔が開けられている。

第18図に当遺跡から出土した６点（75～80）と過去の調査で出土した４点（伊賀国府跡・箕升氏館跡・高羽根遺跡出土、いずれも三重県埋蔵文化財センター蔵）、個人蔵の１点（北出遺跡出土）の実測図と表１に釈文や特徴などを示しておく。

75は、「応永廿八」「（花押）　馬」と書かれている。現在知られている紀年銘例中初期のものである。

76は、元号および月の部分を欠くが、書かれている花押は嘉吉年間に使用されたものに該当する。[9] 現



第17図　鋳造関係出土遺物実測図（2）（１：４）

時点で確認されている嘉吉年間（1441～1444）の土符は、「元年十月廿二日」と「二年十月十五日」、「三年十月十七日」の三種類である。85には「十七日」の文字がみられること、「年」の上には漢数字の「二」「三」「四」「五」のいずれかの残欠が認められることから、この土符は、「嘉吉三年十月十七日」銘の土符であると考えられる。

77は、今回の調査で唯一完形で出土した土符である。

78は、ＳＫ９から出土した。今回出土した土符の中で最も大きい土符である。元号部分は欠けているが、花押から永禄年間（1558～1570）のものと考えられる。

79は、年月日部分が干支で書かれている。「丁」で始まる干支は６通りあるが、２文目の残欠を考慮すると、この土符には「丁酉」と書かれていたと考えられる。応永年間から天正年間までの「丁酉」の年は「応永24(1417)年」・「文明９（1477）年」および「天文６(1537)年」が該当する。このことと花押の残欠から「丁酉」は「応永24(1417)年」を示すものと推定される。

80は、逆三角形状に孔が３ヵ所開けられている。通例では、年月日および物品名などがヘラ書きされているべきであるが、スタンプのようなもので押されたと思われる花押だけが認められる。

85は、磨滅が著しいため年月日は不明である。花押から、明応年間（1492～1501）もしくは永正年間（1504～1521）銘のものと考えられる。

Ｅ　包含層出土遺物

黒色土器（87・89）　ともに内面を黒色化する椀で、10世紀前葉～中葉ころのものである。87の内面は円周に沿って密なヘラミガキを行い、螺旋状の暗文が施される。高台はやや雑な作りの低いもので、口縁部内側には、細い一条の沈線が巡る。

土師器皿（88・90～101）　88は、ロクロ土師器の灯明皿である。口縁端部にススが付着している。90～92はいわゆるヘソ皿で、底部中央が大きく内側に窪む。91の外面には工具のあたり痕と思われるものがみられる。94の底部内面と外面、96の外面には工具のあたり痕と思われるものがある。100・101の外面には、粘土接合痕がみられる。

瓦器椀（102・103）　体部外面は、粗いヘラミガキを施し、指圧痕が残る。103の内面には、連結輪状文がみられる。ともに山田編年のⅡ段階３型式に相当すると思われるが、102は体部外面のヘラミガキの状態から大和型の可能性もある。

擂鉢（104～106）　いずれも内面には、ヘラで疎らに擂目をいれている。信楽産と思われる。

壷（107）　頚部から体部にかけての破片で、肩部にヘラ記号がみられる。信楽産と思われる。

鉢（108）　体部は直線的に開き、口縁部は内弯する。口縁端部を平坦に仕上げている。信楽産と思われる。

青磁椀（109・111）　109は、口径約16cmである。外面には雷文が、内面には楕円形の模様がみられる。111は、龍泉窯系と思われる。高台は断面四角であり、器壁は厚い。外面には、蓮弁文がみられる。底部内面の釉は、掻き取られており、その部分にはスタンプによる陰刻花文が施文されている。高台の内側は施釉されていない。

天目茶椀（110）　底部径約４cmの輸入品である。高台の高さは８cmで、削出高台である。黒色の釉がかけられているが、外面下半には施釉していない。明代のものである。

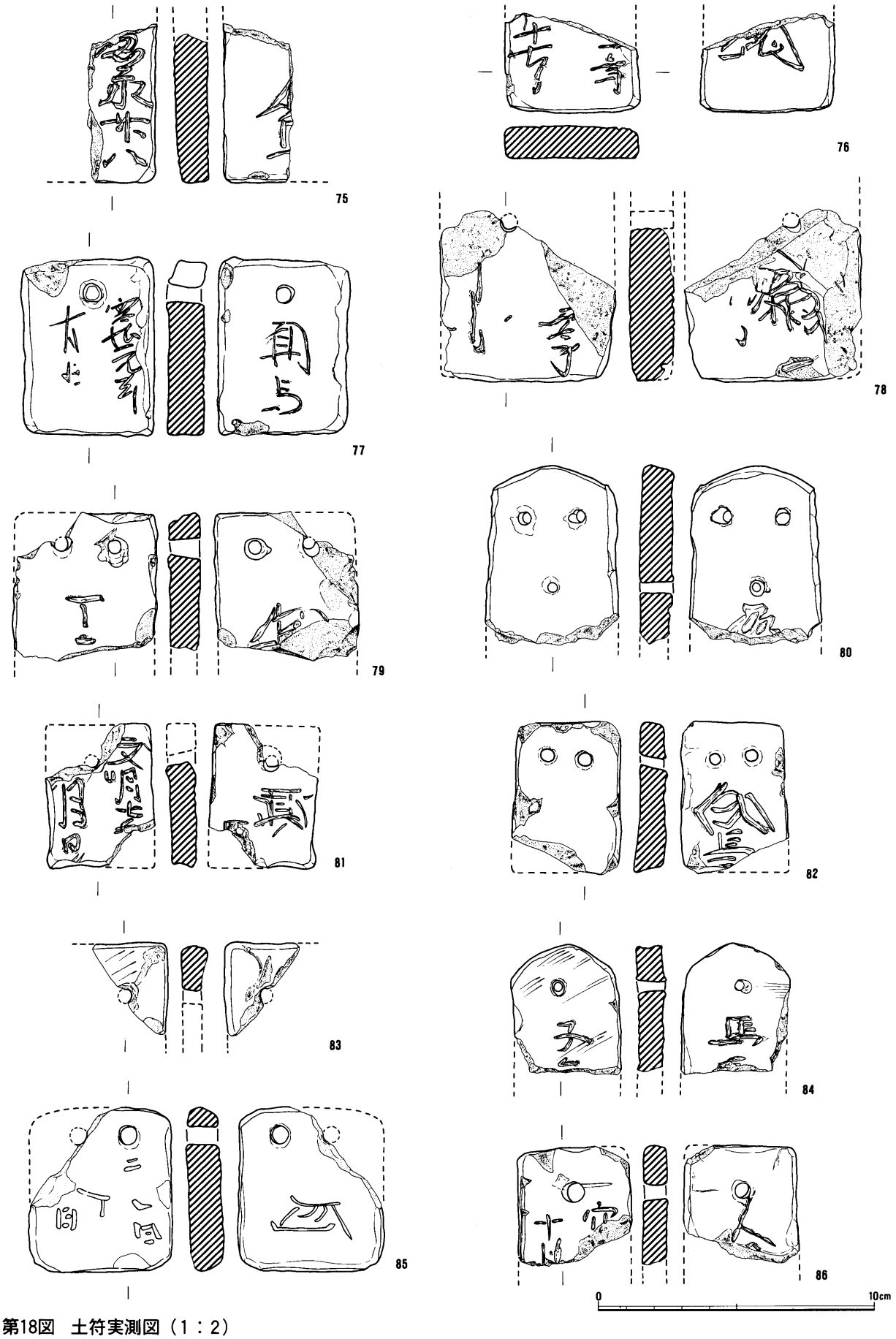
瓦質土器香炉（120）　体部から底部にかけての破片である。体部外面には雷文と巴文が押されている。底部には円錐状の脚が貼り付けられている。

火舎（118・119）　118は口縁端部のやや下に凸線と２条の沈線がめぐる。119は口縁端部のやや下に凸線・沈線の順でめぐる。ともに沈線と沈線の間に四重の□と×を組み合わせた模様のスタンプが押されている。

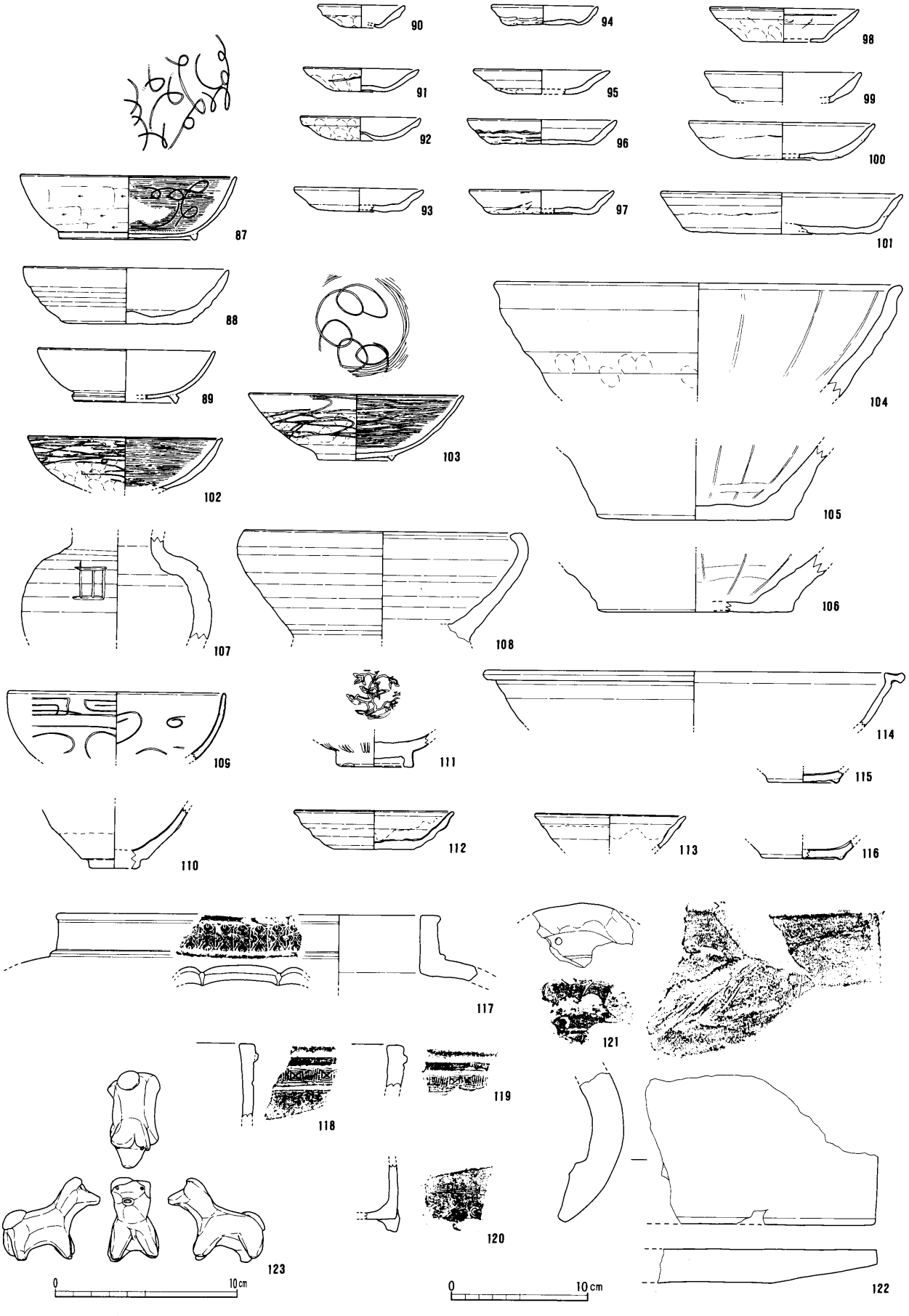
風炉（117）　復元口径約28cmの瓦質の風炉である。口縁部は直立しており、外面の上・下部に凸線をめぐらし、その間に花菱文のスタンプが縦長に押されている。肩部には火窓が１／３程度残っている。

瓦（121・122）　平瓦や丸瓦、軒丸瓦などが計14点出土している。いずれも凹面には布目があり、全体に燻しがかかっている。130は、軒丸瓦の瓦当片である。外区内縁には珠文がある。

犬形土製品（123）　体長5.3cm、体高4.6cmの中形



第18図　土符実測図（1：2）



第19図　A地区包含層出土遺物実測図（87～122は1：4、123は1：3）

のもので、灰白色を呈する土師質焼成である。外面はナデて調整し、目は刺突によって、口はヘラ状工具で表現している。ずんぐりとした胴、短い脚、前に垂れ下がった耳などの形態的特徴をもつ。

緑釉小皿（112・113）　112は、体部はほぼ直線的に開き、底部外面には糸切痕がみられる。瀬戸産である。

折縁深皿（114）　体部は丸味をもち、口縁部は水平方向に外折する。瀬戸産である。

丸皿（115・116）　高台は、低く小さい断面三角形の付高台である。瀬戸産である。

(2)　B地区出土の遺物

B地区の遺物は、奈良時代から室町時代にかけての土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、鋳造関係土製品が出土している。

A　遺構出土遺物

SK19出土遺物

白磁椀（138）　底部内面に1条の圏線がみられる。高台は欠損しているが、削出高台と思われる。

B　包含層出土遺物

土師器皿（124）　器高は低く、体部外面に稜がみられる。

土師器杯（125）　口縁部は直線的で、口縁端部内面に面をもつ。平安時代のものである。

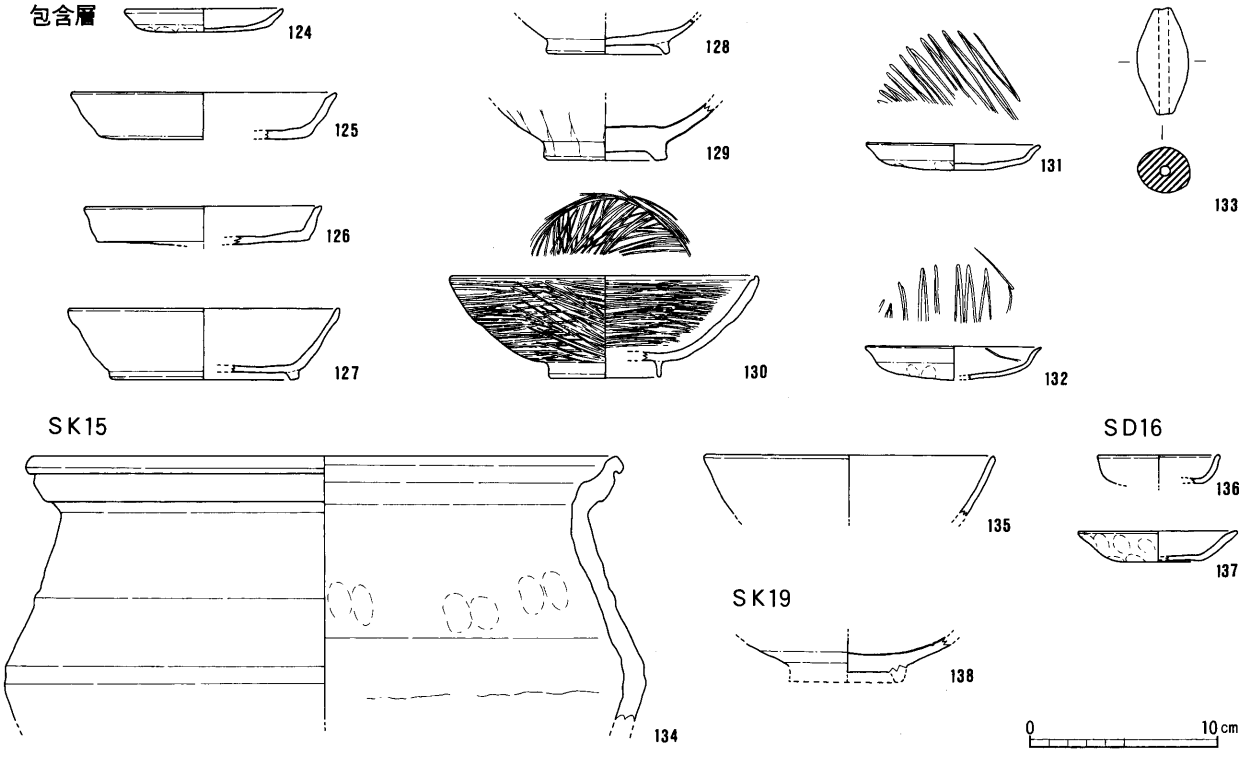
須恵器盤（126）　口縁部が直線的に開き、口縁端部には内傾する面をもつ。奈良時代末～平安時代初頭のものである。

須恵器杯（127）　口縁部は直線的に開く。高台は断面四角の貼付高台で、底部に対して斜めに付く。奈良時代末～平安時代初頭のものである。

施釉陶器（128）　高台は貼付高台で、高台内側には糸切り痕がみられる。

青磁椀（129）　龍泉窯系と思われる。高台は削出高台で、断面四角である。底部器壁は1.4 cmと厚い。13世紀代のものと思われる。

瓦器椀（130）　腰の張った深椀タイプで、体部の内外面を密にヘラミガキする。高台は高いが、細いものである。山田編年のⅠ段階2型式に相当すると思われる。



第20図　B・C地区出土遺物実測図（1：4）

瓦器皿（131・132）　口縁部内面のミガキはなく、底部内面に、50は間隔の細かい、51は間隔の粗いジグザグ暗文が施される。

土錘（133）　長さ5.6㎝、径2.7㎝の紡錘状を呈するものである。重さ29.7ｇ、孔径６㎝である。

(3)　Ｃ地区出土の遺物

Ｃ地区の遺物は、古墳時代から室町時代にかけての土師器、須恵器、陶磁器、鉱滓が出土している。

Ａ　遺構出土遺物

ａ　ＳＫ15出土遺物

甕（134）　緩やかに内傾する体部にＮ字状の口縁部がつく。口縁端部下で外面は肥厚し、内面は頸部との境に段を有する。信楽産である。

青磁椀（135）　龍泉窯系と思われる。やや丸みをもった体部である。

ｂ　ＳＤ16出土遺物

土師器皿（136・137）　136は、平坦な底部から内弯しながら立ち上がる口縁部をもつ。137は、口縁部は直線的で、口縁端部はわずかに外反する。

4　結　　語

火山遺跡では、試掘調査で「土符」が１点出土しており、それに関連する何らかの遺構が検出できるものと期待された。ところが、今回の調査では、県内で初めての鋳造土坑を確認することができた。

今回の調査結果は、中世の伊賀、特に柘植川沿岸地域の歴史解明のための貴重な発見となるだけでなく、畿内近国における中世史を考える上でも重要な資料を提起すると考えられる。その中で、鋳造遺構と土符、当遺跡の性格についてまとめてみることにする。

鋳造遺構と遺物について

当遺跡で確認できた鋳造関係の遺構は、鋳造土坑１基、廃棄土坑２基と鋳造に関係すると思われる土坑１基で、炉跡や工房跡と思われる施設については検出されなかった。また、出土した鋳造関係の遺物の量は、後述する主要な鋳造遺跡と比較すれば余り多くない。溶解炉底部やフイゴ羽口も小形のものであった。

近隣府県の鋳造遺跡としては、「河内鋳物師」の本拠地である大阪府南河内郡美原町の真福寺遺跡・太井遺跡・日置荘遺跡、大阪府堺市の余部遺跡や京都府京都市の京都大学構内遺跡などがある。飛鳥・奈良時代の太井遺跡を除き、いずれも中世の「河内鋳物師」に関係する遺跡である。[10] これら中世の遺跡では、梵鐘や湯釜のような大型製品を製作していた鋳造土坑や遺物が確認されている。検出された土坑のプランは、隅丸方形あるいは方形が多い。四辺のうち一辺にテラス状もしくはスロープ状の張出がみられ、土坑の床面には鋳型を固定するための掛木の痕跡と足場用と考えられるピットが認められる。また、多くの鋳造関係遺物の中には、大型の溶解炉やフイゴ羽口が出土しているが、これらを使用した炉跡については、日置荘遺跡で土坑の周囲に拳大の石を積み上げ、その内側に溶解炉を設置した炉跡が検出されているだけである。

真福寺遺跡や京都大学構内遺跡では、安定した地盤に鋳造土坑が掘り込まれていたのを検出しているが、炉跡は検出されていない。[11] 当遺跡で検出した鋳造土坑も安定した地盤に掘り込まれている。プランは方形で、一辺にスロープ状の張出が認められるが、床面には掛木の痕跡は検出できなかった。炉跡についても検出することはできなかった。

溶解炉については、福岡県太宰府市の鉾ノ浦遺跡や前述の大阪府堺市の日置荘遺跡などで検出している。溶解炉の設置方法には大きく分けて、①土坑を掘り、そこに溶解炉を置く、②土坑を掘り、礫を積み上げて溶解炉を置く、③礫を積み上げて溶解炉を固定する、の３パターンが考えられる。[12] 鉾ノ浦遺跡では①～③の方法で、日置荘遺跡では②の方法で設置されたものである。③以外の方法による溶解作業の場合、当時の地表面を掘削していることから、遺構を検出することは可能である。当遺跡においても、①～③のいずれかの方法によって設置しているもの

と考えられるが、前述したとおり、当遺跡では炉跡を検出していない。これは、調査区が田面間の高低差が大きい棚田の部分にあたるため、田圃を作る際に相当の削平を受けており、既に遺構は失われてしまっていることも考えられる。

時期は異なるが、上野市市部の森脇遺跡では、近世の方形土坑から廃棄された三叉状土製品や鉱滓などが出土しいる[13]。また、比自岐神社境内にある梵鐘の銘に「安永六丁酉龍集刻八月十八日鋳物師伊州依那具村住橋本治右衛門御鋳師藤原永次作」[14]とある。依那具村は、現在の上野市依那具で、市部地区とは隣接しており、江戸時代には森脇遺跡もしくはその周辺で鋳物生産を行っていた可能性が高い。

なお、県内においては、フイゴ羽口や鉄滓などの出土が報告されているが、上箕田遺跡（鈴鹿市）・原出遺跡（名張市）・下川遺跡（安芸郡芸濃町）などでは、鍛冶工房跡ではないかと推定されている。

土符について

上野市北部や柘植川・木津川流域に分布範囲が限られる、荷札状の素焼きの陶片である。現在までに知られている土符は、約230 点である。この遺物の使用方法や使用階層については、未だに定説はみられない。従来、「馬」「米」「人」「ぜに」のヘラ書き文字があること、室町時代の伊賀国守護・仁木氏との関連が想定されている上山宅跡およびその付近で約40点もみつかっていることから仁木氏に関係する荷札あるいは徴符、過所であるとされてきた。しかし、分布範囲が伊賀国の一地域に限られること、土符の大部分は農作業中などに偶然みつけられたものであり、性格などを特定するには無理があり、謎の多い考古遺物である。ただ、土符には花押や物品名などが刻まれていることから、ある程度の政治的地位を持った者の間で使用されていたものと考えて良いであろう。

今回の調査で、計６点の土符が出土した。その中の１点は、前述したとおり廃棄土坑から出土している。これは、遺構出土としては初めての例であり、鋳造遺跡という特殊な遺跡から出土したことも注目に値し、「土符」の使用方法や使用階層の解明に貴重な資料となるであろう。

火山遺跡の性格について

当遺跡からの出土遺物は、11世紀代以降中世全期にわたり明確な断絶もなく確認できる。そして、青白磁を含む輸入陶磁器も安定して供給されている状況が窺え、瀬戸産陶器類の出土も多い。伊賀における瀬戸産陶器の分布状況は、未だ明確にされていないが、伊勢における出土量と比べても遜色なく、多いと考えて良いのではなかろうか。土符を含む出土遺物における以上のようなあり方は、この地が中世全期を通じて継続的に生活の営まれた場であることを示すとともに、単純に一般農村とは考えがたい遺跡であることを示している。遺構としては明確化できなかったものの、在地における有力者、あるいは小領主的な人物の屋敷地であることを示すと考えて良いかと思われる。このことから、今回の調査区はその屋敷地の一部分にあたり、鋳造土坑はその一角に営まれたものと思われる。

網野善彦氏の研究によれば、中世の鋳物師は、各地で生産の場と原材料を与えられるとともに、各地を遍歴している[15]。このように遍歴をしていた鋳物師の一人が当遺跡において鋳物生産に従事していたものと思われる。

当遺跡では、出土した鋳型や鉱滓などから判断して、大型製品を含む鍋・釜・鏡などの鉄製品や銅製品を生産していたものと考えられる。また、鍛造が行われていた可能性もある。その操業期間については、出土した遺物の量から、出吹や定住のような形態の操業ではなく、一定期間この地に留まって操業したものと思われ、鋳物師を一定期間雇用できるだけの力をもった有力者がこの地にいたものと考えられる。

また、廃棄土坑が調査区の東端で検出されていることから、今回の調査対象外になった部分に鋳造関係遺構が残っている可能性がある。

以上のことから、当遺跡は中世に存在した一般の農村集落ではなく、11世紀代以降、中世の全期にわたって生活が営まれた場であり、中世後期には土符の出土からみられるように政治性を有し、鋳物師を呼び寄せて一定期間鋳物生産を行うことができるほどの有力者の存在が推定されるに至った。

（船越重伸）

註

① 高柳光寿・竹内理三編「室町幕府諸職表」『角川日本史辞典 第二版』 角川書店 1984

② 上野市古文献刊行会「巻之六十七 伊賀国 阿拝郡」『定本三国地誌』 上野市 1987

③ 上掲②には「紀伊守宅址」とみえる。

④ 山本雅靖「城館研究の視点と方法の展開」『中世の城と考古学』 1991

⑤ 久保文武『伊賀国無足人の研究』 1991

⑥ 青木修『仏供田窪跡』愛知県瀬戸市教育委員会・㈶瀬戸市埋蔵文化財センター

⑦ 山田猛「瓦器に関する若干の考察」『中世土器の基礎研究Ⅱ』中世土器研究 1986

⑧ 山田猛「下郡遺跡の擂鉢」『Mie history 』vol.1 三重歴史研究会 1990

⑨ 山本雅靖「土符」－考古学的調査の現状と課題－『三重県史研究』第8号 三重県総務部学事文書課 1992

⑩ ㈶大阪府文化財調査研究センター『大阪府立弥生文化博物館 平成8年冬季企画展図録 発掘速報展 大阪'96 』大阪府立弥生文化博物館 1996

⑪ 大阪府教育委員会・山本彰氏、京都大学埋蔵文化財研究センター・五十川伸矢氏のご教示による。

⑫ 山本信夫・狭川真一「太宰府市の鋳造関係遺跡」『鋳造遺跡研究会資料』鋳造遺跡研究会 1991

⑬ 三重県埋蔵文化財センター；森川常厚氏のご教示による。

⑭ 比自岐公民館・郷土史教室「明治二十年調製 地誌上申書比自岐村分 役場控」『明治二十年調製 地誌上申書』比自岐郷土史編纂委員会 1994

⑮ 網野善彦 『日本中世の非農業民と天皇』 1984

No.	登録番号	出土位置・遺構	年月日の記載のある側	物品名の記載のある側	孔・位置	孔・数	縦 mm	横 mm	厚さ mm	胎土	焼成	色調	備考
75	029-01	A地区 包含層	応永廿八	花押 馬	不明	不明	(60)	(24)	12	細砂粒を含む	良	にぶい橙色	ヘラ書き文字
76	033-01	試掘坑 No.121	嘉吉二年 十月十七日	花押	不明	不明	(34)	48	12	細砂粒を含む	良	淡橙色	ヘラ書き文字
77	031-01	A地区 包含層	宝徳元年 十月日	花押 馬	上	1	64	48	13	～4.5mmの砂粒を少し含む	良	橙色	スタンプ文字
78	032-01	SK7	□□□年 十月日	花押	上	2?	(62)	64	16	やや粗 ～3mmの小石を多く含む 微砂粒を含む	並	灰白色	ヘラ書き文字
79	028-01	A地区 包含層	丁酉	花押	上	2	(54)	52	12	細砂粒を含む	良	橙色～灰白色	ヘラ書き文字
80	030-01	A地区 17 包含層		花押	上	3	(66)	48	12	～2mmの細砂粒を含む	良	にぶい橙色～橙色	ヘラ書き文字
81	035-01	伊賀国府跡 9EH－9V 包含層	文明七年 十月日	花押 馬	上	1	52	38	10	～4mmの砂粒を含む	良	灰白色	ヘラ書き文字
82		伊賀国府跡 D5－9、D－3 包含層		花押 馬	上	2	56	38	10	やや密 2～4mmの石英を若干含む	良	浅黄橙色	ヘラ書き文字 墨書?
83	036-01	伊賀国府跡 D6－7、A1 包含層			上	2?	(36)	(28)	10	微砂粒を少し含む	良	灰白色	
84	034-01	高羽根遺跡 試掘坑 No.25	子年	馬 花押	上	1	(50)	40	10	細砂粒を含む	良	にぶい橙色	ヘラ書き文字
85	029-02	北出遺跡 表採	不明	花押	上	2	60	52	12	砂粒を多く含む	良	にぶい黄橙色	ヘラ書き文字
86		箕升氏館跡	寛正□年 十月日	人 花押	上	1	(44)	42	9	密 砂粒を少し含む	良	灰白色	ヘラ書き文字

第1表 土符観察表

No.	登録番号	器種	出土位置・遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	胎土	焼成	色調	備考
49	011-01	鋳型椀	A地区 包含層				～2mmの細砂粒を多く含む	良	浅黄橙色	外型 真土が残る
50	042-02	鋳型	SK7				～2mmの細砂粒を多く含む	良	にぶい橙色	内面に真土が残る
51	042-01	鋳型	SK7				～2mmの細砂粒を含む	良	淡橙色～灰白色	真土が残る
52	010-01	鋳型鏡	A地区J7 P1				～2mmの細砂粒を含む	良	橙色	外型 真土が残る
53	049-01	鋳型羽釜	SK7				砂質 4mm大の小石粒、1.5mm以下の砂粒を含む	並	にぶい橙色～褐灰色	内面に真土が残る
54	023-02	鋳造関係土製品	SK7				粗 細砂粒を含む	並	にぶい橙色	付着物
55	023-03	鋳造関係土製品	SK7				粗 細砂粒を含む	並	にぶい橙色	付着物
56	027-01	鋳型	SK7	31.0	6.1		細砂粒を少し含む	並	灰色	内面に僅かに真土が残る
57	012-01	フイゴ羽口	A地区 包含層				～2mmの細砂粒を含む	良	浅黄橙色	先端部分は高熱により溶解
58	047-02	溶解炉	SK7	25.0			やや粗 ～3mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色	内面に付着物 内面は高熱により溶解
59	023-01	鋳造関係土製品	SK7				粗 籾殻、微砂粒を含む	並	にぶい橙色	付着物
60	026-02	鋳造関係土製品	SK7				細砂粒を多く含む	並	内：にぶい橙色 外：黒色	付着物
61	047-01	溶解炉	SK7	21.0			やや密 ～3mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色～橙色	再使用している
62	048-01	溶解炉	SK7	30.0			やや粗 ～2mmの小石、微砂粒を含む	並	浅黄橙色～橙色	内面に付着物 内面は高熱により溶解
63	044-01	溶解炉	SK7	30.0			やや密 微砂粒を含む	並	灰白色	内面に付着物 内面は高熱により溶解
64	045-01	フイゴ羽口	SK7				密 5mm以下の小石、微砂粒を含む	並	灰白色～明赤灰色～赤灰色～暗灰色	先端部分は高熱により溶解
65	025-04	フイゴ羽口	SK9				細砂粒を多く含む	並	灰白色	先端部分は高熱により溶解
66	025-03	フイゴ羽口	SK9				細砂粒を多く含む	並	灰色、灰白色	先端部分は高熱により溶解
67	025-05	フイゴ羽口	SD10				細砂粒を多く含む	並	灰白色	先端部分は高熱により溶解
68	025-02	フイゴ羽口	SD12				細砂粒を多く含む	並	内：橙色 外：灰白色	先端部分は高熱により溶解
69	026-01	フイゴ羽口	A地区N5 包含層				細砂粒を多く含む	並	灰白色	先端部分は高熱により溶解
70	046-01	三叉状土製品	SK7				やや粗 ～3mmの小石、微砂粒を含む	並	赤褐色～橙色	上面は高熱を受けている
71	019-01	三叉状土製品	SK7				微砂粒を含む	良	桃色～にぶい橙色	上面は高熱を受けている
72	046-02	三叉状土製品	SK7				やや粗 ～3mmの小石、微砂粒を含む	並	にぶい橙色～褐灰色	上面は高熱を受けている
73	019-02	三叉状土製品	SK28				微砂粒を含む	良	桃色～灰白色	上面は高熱を受けている
74	018-03	三叉状土製品	A地区H7 包含層					良	黄灰色～橙色	上面は高熱を受けている

第2表 鋳造関係、遺物観察

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	016-03	陶器 折口大皿	SD1				ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色 釉：灰オリーブ色		内外面を施釉 古瀬戸後期
2	020-04	土師器 皿	SK7	9.6	1.65	5.9	内： 外：ナデ、オサエ	密　～1mmの砂粒を含む	良	灰白色～灰黄色	口縁　1／4 底部　1／4	
3	050-01	土師器 皿	SK7	12.1	1.8		ナデ、オサエ	粗　～2mmの砂粒を含む	並	褐灰色	口縁　1／4	底部内面に工具痕
4	050-03	瓦質土器 火舎	SK7				内：ナデ 外：ナデ、ヘラミガキ	やや密　～1mmの砂粒を含む	並	灰白色～灰色		外面にスタンプ
5	040-01	陶器 壺	SK7	14.4	14.9	底径　14.3	ロクロナデ	～4mmの砂粒を多く含む	良	灰褐色	口縁　1／2 底部　3／8	信楽産
6	037-01	陶器 甕	SK7	17.5			内：ヨコナデ、指オサエ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	～5mmの小石、微砂粒を含む	並	明赤灰色～にぶい橙色～橙色		内面に粘土接合痕 信楽産
7	040-02	陶器 鉢	SK7	21.4	7.7	底径　16.0	ロクロナデ	～2mmの細砂粒を多く含む	良	灰褐色	底部　1／8	信楽産
8	017-01	白磁 椀	SK7	15.6			ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色		内外面に施釉
9	050-02	白磁 皿	SK7	9.0	2	高台径 4.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	密　微砂粒を含む	良	灰白色	口縁　1／3 高台　1／2	内面に目跡 削出高台（4足と思われる）
10	041-01	土師器 皿	SK9	8.0	1.7	底径　3.0	ヨコナデ、ナデ	やや粗　～1mmの小石、細砂粒を含む	並	浅黄橙色	口縁　1／4	
11	017-02	陶器 平椀	SK9				ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色 釉：黄褐色		内外面に施釉
12	041-02	陶器 平椀	SK9			底径　5.0	内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ	やや粗　細砂粒を含む	並	灰色 釉：灰オリーブ色	底部　3／4	削出高台 古瀬戸
13	006-05	天目茶椀	SD10			底径 4.4～4.5	内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ	微砂粒を少し含む	良	にぶい橙色～灰白色 釉：オリーブ黒	底部　完存	内外面ともに施釉
14	006-06	青磁 椀	SD12			底径　7.5	内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ	細砂粒を少し含む	良	灰白色～淡黄色 釉：オリーブ灰	底部　1／2	内外面ともに施釉
15	039-01	陶器 鉢	SD11	24.0	8.2	底径　15.3	ロクロナデ 底部外面：ヘラ切り	粗　～5mmの砂粒を含む	良	浅黄橙色	口縁　1／5 底部　1／6	信楽産
16	039-02	陶器 擂鉢	SD11			底径　18.0	ロクロナデ	やや密　～5mmの砂粒を含む	良	内：黒褐色 外：にぶい赤褐色	底部　1／8	内面に炭化物 信楽産
17	006-02	土師器 皿	SK13	8.0	1.5		内：オサエ＋ナデ 外：オサエ	微砂粒を少し含む	並	にぶい橙色	口縁　1／3	
18	006-03	土師器 皿	SK13	9.0	1.9		内：ナデ 外：オサエ	細砂粒を少し含む	並	淡黄色	口縁　1／2	内面にススが付着
19	024-05	土師器 皿	SK13	14.3	1.85		内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ	密　微砂粒を含む	並	にぶい橙色		内外面に沈線
20	024-04	施釉陶器	SK13			底径　8.4	内：ナデ 外：ヨコナデ	密　微砂粒を含む	並	灰色 釉：灰オリーブ色		
21	020-06	土師器 皿	SD23	7.0			ヨコナデ、ナデ	密　～1.5mmの砂粒を含む	良	橙色	口縁　2／5	
22	020-09	土師器 皿	SK25	8.8	1.3		内：ナデ 外：オサエ、ナデ	密　～2.5mmの微砂粒を含む	良	にぶい黄橙色	口縁　1／2	
23	021-03	土師器 皿	SK25	10.2			内：ヨコナデ、ナデ	やや密　～1.5mmの砂粒を含む	良	灰白色	口縁　1／6	
24	016-04	白磁 椀	SK25	15.7			ロクロナデ	微砂粒を含む	良	白色 釉：灰白色		内外面に施釉
25	001-01	土師器 皿	SK29	8.6～ 9.2	1.75		内：弱いヨコナデ、ナデ 外：弱いヨコナデ、オサエ	細砂粒を含む	良	にぶい橙色～浅黄橙色～橙色	完存	
26	001-02	土師 皿	SK29	8.3	1.55		内：弱いヨコナデ、ナデ 外：弱いヨコナデ、オサエ	細砂粒を含む	良	浅黄橙色	1／2	
27	001-03	土師器 皿	SK29	8.2～ 8.6	1.85		内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ	細砂粒を含む	良	褐灰色	完存	内面に工具のあたり痕
28	001-04	土師器 皿	SK29	9.6～ 10.2	1.85		内：弱いヨコナデ、ナデ 外：弱いヨコナデ、オサエ	細砂粒を含む	良	灰白色	完存	内面に工具のあたり痕
29	001-05	土師器 皿	SK29	9.5～ 10.2	2.5		内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ	細砂粒を含む	良	浅黄橙色～にぶい橙色	完存	
30	001-06	土師器 皿	SK29	9.5～ 10.2	2.15		内：ナデ 外：オサエ	細砂粒を含む	良	橙色～灰白色	完存	
31	006-01	土師器 皿	SK30	9.8～ 10.4	1.5		内：ヨコナデ、指オサエ＋ナデ 外：オサエ＋ナデ	微砂粒を少し含む	良	浅黄橙色	ほぼ完存	外面にススが付着
32	020-08	土師器 皿	A地区J5 P1	9.6	1.25	底径　6.6	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ	やや密　～1.5mmの砂粒を含む	並	灰白色～にぶい黄橙色～褐灰色	口縁　1／5	
33	020-02	土師器 皿	A地区F P2	10.2	1.8		内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	密　～1mmの砂粒を含む	良	淡橙色～にぶい橙色	口縁　1／4	底部内面に工具による沈線状の強いナデ
34	021-05	陶器 折縁中皿	A地区G8 P1	16.2			ロクロナデ	粗　～2mmの砂粒を含む	良	にぶい橙色 釉：灰白色	口縁　1／8	内外面に施釉 古瀬戸
35	017-03	天目茶椀	A地区L2 P2	11.2			内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	微砂粒を含む	良	淡黄色 釉：暗赤褐色		内外面に施釉
36	018-02	青白磁	A地区H8 P2				ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色 釉：明緑灰色		内：花弁文
37	021-06	瓦器 椀	A地区M4 P2	11.7			内：ヨコナデ、ヘラミガキ 外：ヨコナデ、オサエ	密　微砂粒を含む	良	灰色～灰白色～褐灰色	口縁　1／4	
38	008-02	瓦質土器 火舎	A地区G8 P1					微砂粒を少し含む	良	灰色		花菱文
39	022-02	陶器 擂鉢	A地区L7 P1	31.8			ロクロナデ	やや密　～3mmの砂粒を含む	良	浅黄橙色	口縁　1／12	信楽産
40	016-01	陶器 直縁大皿	A地区G9 P3	42.8			ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色～にぶい褐色 釉：暗オリーブ色		内外面を施釉 古瀬戸後期
87	009-03	黒色 椀	A地区 包含層	15.8	4.7	高台径10.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、貼付ナデ、ナデ	～1mmの微砂粒を含む	良	浅黄橙色	口縁　1／6 高台　1／4	内面に螺旋状暗文 内面を燻す
88	025-01	ロクロ土師器 灯明皿	A地区O5 包含層	15.0	4.0	底径　10	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	細砂粒を少し含む	良	にぶい黄橙色	口縁　1／8 底部　2／3	口縁端部にススが付着
89	009-02	黒色土器 椀	A地区P5 包含層	13.0	3.9	高台径 7.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、貼付ナデ、ナデ	～1mmの微砂粒を含む	良	橙色～浅黄橙色	口縁　1／16 高台　1／4	内面を燻す
90	020-01	土師器 皿	A地区J3 包含層	6.2	1.65	底径　2.5	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密　～1.5mmの砂粒を含む	良	にぶい黄橙色	口縁　1／3 底部　1／4	ヘソ皿
91	020-07	土師器 皿	A地区G8 包含層	8.4	1.7	底径　3.8	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ、ナデ	密　微砂粒を含む	良	浅黄橙色	口縁　1／3 底部　2／5	
92	013-01	土師器 皿	A地区G8 包含層	8.6	1.3	底径　3.0	内：ナデ 外：オサエ	やや粗　～2mmの小石、細砂粒を含む	並	灰白色	口縁　1／3	ヘソ皿

第3－1表　出土遺物観察表

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
93	021-01	土師器 皿	A地区F4 包含層	9.3	1.7		内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ、ナデ	密　～1.5mmの砂粒を含む	良	浅黄橙色	口縁　1／8	
94	017-07	土師器 皿	A地区D8 包含層	7.6	1.4		内：ヨコナデ、強いヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	微砂粒を含む	良	灰白色	口縁　2／3	外面に工具？のあたり痕 底部外面に指オサエ痕
95	021-02	土師器 皿	A地区F4 包含層	9.8	1.8		内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ、ナデ	やや密　～1.5mmの砂粒を含む	並	にぶい黄橙色	口縁　1／6	
96	017-06	土師器 皿	A地区J5 包含層	10.7	1.8		内：ヨコナデ、強いヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	微砂粒を含む	良	灰白色	口縁　1／9	外面に工具？のあたり痕 底部外面に指オサエ痕
97	017-08	土師器 皿	A地区K4 包含層	10.5	1.8		内：ヨコナデ、強いヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	微砂粒を含む	良	灰白色	口縁　1／8	外面に工具？のあたり痕 底部外面に指オサエ痕
98	017-05	土師器 皿	A地区F9 包含層	10.8	2.4		内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	微砂粒を含む	良	灰白色	口縁　1／3	
99	020-03	土師器 皿	A地区O5 包含層	10.4			内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ	やや密　～2mmの砂粒を含む	並	にぶい黄橙色～黄灰色	口縁　1／8	
100	021-04	土師器 皿	A地区N7 包含層	13.6	2.7		ヨコナデ、ナデ	やや粗　～2mmの砂粒を含む	並	にぶい褐色	口縁　1／4	外面に粘土接合痕
101	020-10	土師器 皿	A地区N7 包含層	17.6	3.0		ヨコナデ、ナデ	やや密　～3mmの砂粒を含む	良	淡橙色～にぶい橙色	口縁　1／5	外面に粘土接合痕
102	021-07	瓦器 椀		14.0			内：ヨコナデ、ナデ、ヘラミガキ 外：ヨコナデ、オサエ、ヘラミガキ	密　微砂粒を含む	良	灰色～灰白色	口縁　1／4	
103	022-03	瓦器 椀	A地区N5 包含層	15.5	4.9	高台径 5.5	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ、ナデ	密　微砂粒を含む	良	灰色～灰白色	高台　3／4	
104	024-03	陶器 擂鉢	A地区 包含層	29.8			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちロクロナデ	やや粗　～2mmの小石を多く含む、細砂粒を含む	並	灰白色		
105	024-01	陶器 擂鉢	A地区 包含層			底径　14.0	内：ナデ　外：ロクロナデ 底部外面：未調整	やや粗　～3mmの小石を多く含む、細砂粒を含む	並	淡橙色	底部　1／6	
106	024-02	陶器 擂鉢	A地区K2 包含層			底径　13.8	内：ナデ　外：ロクロナデ 底部外面：未調整	やや粗　～3mmの小石、細砂粒を含む	並	赤橙色	底部　3／8	
107	008-04	陶器 壺	A地区 包含層				ロクロナデ	微砂粒を少し含む	並	にぶい赤褐色		肩部にヘラ記号　信楽産
108	009-01	陶器 鉢	A地区 包含層	20.2			ロクロナデ	～2mmの微砂粒を多く含む	良	橙色	1／9	ロクロ：右回転　信楽産
109	008-05	青磁 椀	A地区H8 包含層	16.0				砂粒はほとんど含まない	良	灰白色 釉：明緑灰色	口縁　1／8	雷文
110	006-04	天目茶椀	A地区F9 包含層			底径　4.0	内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ	微砂粒を少し含む	良	灰白色 釉：黒色	底部　1／4	内外面ともに施釉
111	018-01	青磁 椀	A地区 包含層			底径　5.1	内：ロクロナデ 外：ロクロヘラケズリ	微砂粒を含む	良	白色～灰白色 釉：明緑灰色	底部　9／10	内面：陰刻花文 外面：蓮弁文
112	017-04	陶器 緑釉小皿	A地区 包含層	11.5	2.9	底径　5.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色 釉：オリーブ灰色	口縁　1／4 底部　1／2	内外面に施釉 古瀬戸後期
113	016-05	陶器 緑釉小皿	A地区 包含層	10.9			ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色 釉：灰オリーブ色	口縁　1／12	内外面に施釉 古瀬戸後期
114	022-01	陶器 折縁深皿	A地区 包含層	30.3			ロクロナデ	やや密　砂粒を含む	良	灰白色 釉：灰オリーブ色	口縁　1／12	内外面に施釉 古瀬戸後期
115	018-07	陶器 丸皿	A地区B5 包含層			高台径 5.0	ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色 釉：灰オリーブ色	1／4	内外面に施釉　付高台
116	018-06	陶器 丸皿	A地区G5 包含層			高台径 5.8	ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰白色 釉：暗オリーブ色	1／4	内外面に施釉　付高台
117	038-01	瓦質土器 風炉	A地区E9 包含層	26.8			ナデ		良	灰色	口縁　1／13	口縁部外面にスタンプ
118	008-03	瓦質土器 火舎	A地区M3 包含層					微砂粒を少し含む	良	灰色		スタンプ
119	008-01	瓦質土器 火舎	A地区 包含層					微砂粒を少し含む	良	にぶい橙色		スタンプ
120	006-07	瓦質土器 香炉	A地区 包含層				ナデ 脚：貼付ナデけ	微砂粒を少し含む	良	浅黄橙色		雷文・巴文のスタンプ
121	007-02	軒丸瓦	A地区 包含層									
122	007-01	平瓦	A地区 包含層					微砂粒を少し含む	良	灰色		内面に布目痕
123	027-01	犬形土製品	A地区G4 包含層									
124	013-03	土師器 皿	B地区I1 包含層	8.4	1.2	底径　4.0	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ	やや粗　微砂粒を含む	並	浅黄橙色	口縁　1／4	
125	013-04	土師器 杯	B地区 包含層	14.0	2.4		ヨコナデ、ナデ	やや粗　～1mmの小石を多く含む　微砂粒を含む	並	橙色	口縁　1／4	
126	014-04	須恵器 盤	B地区E1 包含層	12.4	1.8		ヨコナデ、ナデ	やや粗　細砂粒を含む	並	灰色	口縁　1／8	
127	013-05	須恵器 杯	B地区D3 包含層	14.2	3.8	底径　9.4	内：ロクロナデ、ナデ 外：ロクロナデ、ヨコナデ	密　微砂粒を含む	並	灰色		
128	015-02	施釉陶器	B地区E2 包含層			底径　6.3	内：ロクロナデ、ナデ 外：ロクロナデ、ヨコナデ	やや粗　細砂粒を含む	並	灰黄色	底部　1／2	底部外面に糸切痕　貼付高台
129	013-07	青磁 椀	B地区I1 包含層			底径　6.0	ロクロナデ	密　微砂粒を含む	並	灰白色～灰オリーブ色	口縁　1／3	龍泉窯系
130	014-01	瓦器 椀	B地区D3 包含層	14.0	5.4	底径　5.8	内：ヘラミガキ 外：オサエのちヘラミガキ、ヨコナデ	やや粗　細砂粒を含む	並	灰色	口縁　1／4	
131	014-03	瓦器 皿	B地区 包含層	9.2	1.4	底径　3.6	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ	やや粗　微砂粒を含む	並	灰色		
132	014-02	瓦器 皿	B地区D3 包含層	9.2			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエ	密　細砂粒を含む	並	灰色	口縁　1／3	
133	015-04	土錘	B地区D2 包含層					やや粗　微砂粒を含む	並	橙色		
134	015-01	陶器 甕	SK15	31.0			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ナデまたはケズリ	やや粗　～3mmの小石を多く含む　細砂粒を含む	並	明褐灰色		信楽産
135	013-06	青磁 椀	SK15	15.2			ロクロナデ	密　微砂粒を含む	並	灰白色～オリーブ灰色	口縁　1／4	龍泉窯系
136	020-05	土師器 皿	SD16	6.4			ヨコナデ	やや密　～1mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色	口縁　1／6	
137	013-02	土師器 皿	SD16	8.4	1.6	底径　4.0	内：ナデ 外：オサエ	密　微砂粒を含む	並	灰白色	口縁　1／4	
138	015-03	白磁 椀	SK19				内：ロクロナデ、ナデ 外：ロクロケズリ	やや粗　細砂粒を含む	並	灰白色 釉：明オリーブ灰色		内外面を施釉　削出高台？

第3－2表　出土遺物観察表

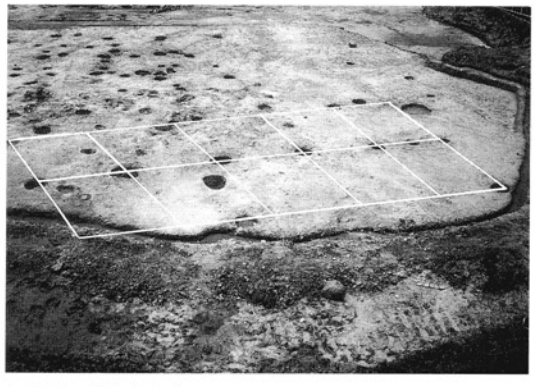
Ａ地区西側全景（北から）

Ａ地区東側全景（北から）

Ｂ地区全景（西から）

Ｃ地区全景（西から）

Ａ地区作業風景



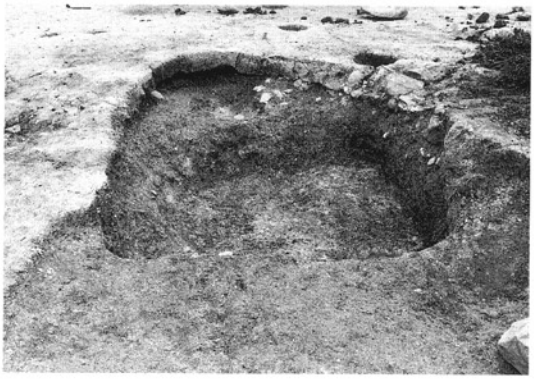
ＳＢ２（北から）

ＳＥ４遺跡出土状況（東から）

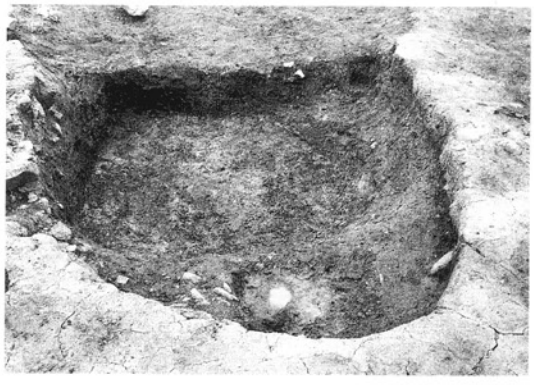
ＳＥ４遺跡出土状況（東から）

ＳＫ13・掘削途中（西から）

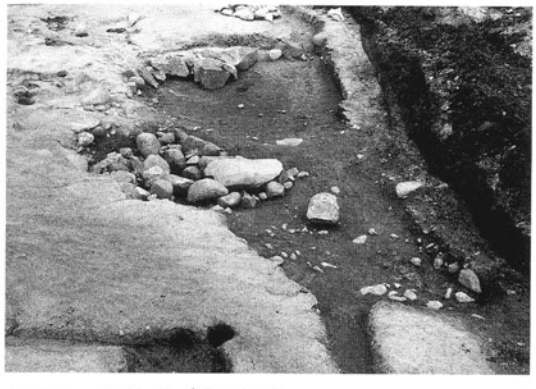
ＳＫ13・掘削途中（南から）



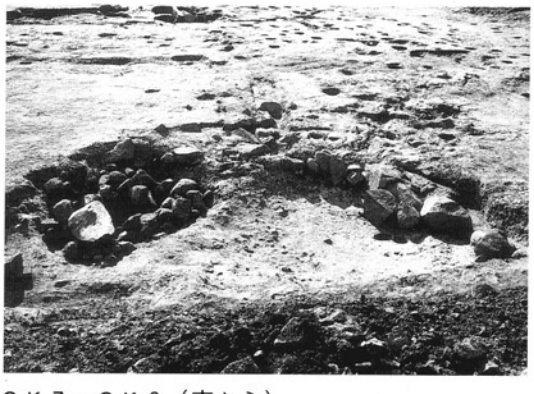
ＳＫ13・掘削終了（東から）



ＳＫ13・掘削終了（西から）



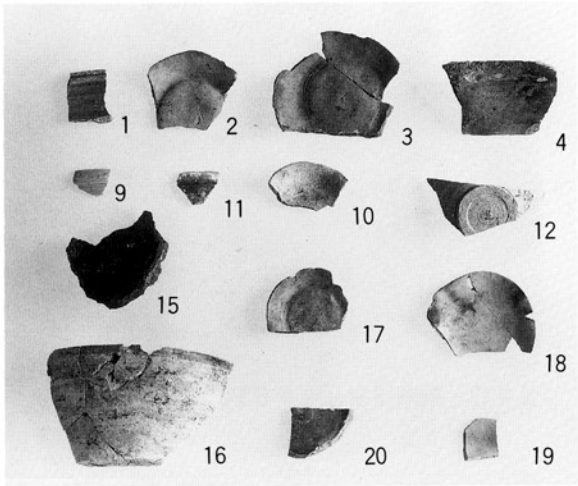
ＳＫ７・ＳＫ９（南から）

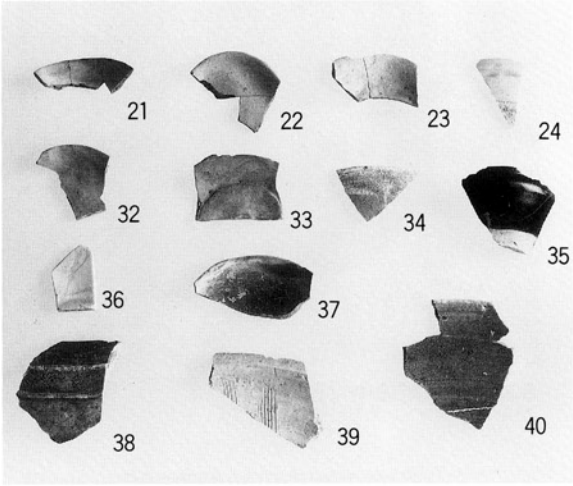


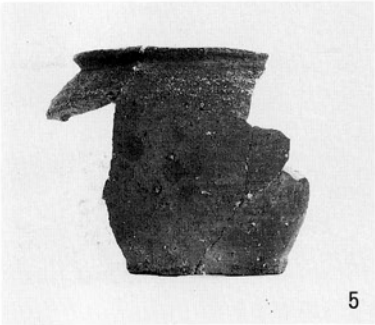
ＳＫ７・ＳＫ９（東から）

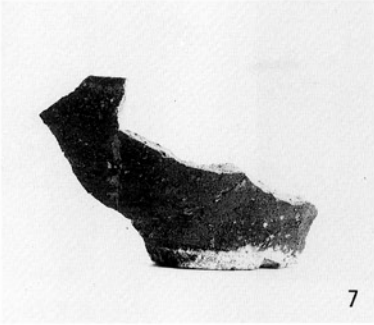
ＳＫ27・ＳＫ28遺物出土状況（北から）

ＳＫ30遺物出土状況（北から）

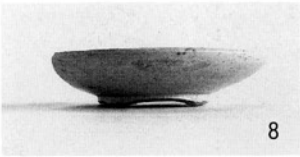

1
2
3
4
9
11
10
12
15
17
18
16
20
19

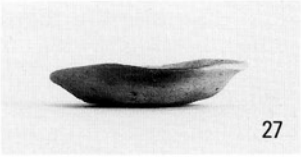

21
22
23
24
32
33
34
35
36
37
38
39
40

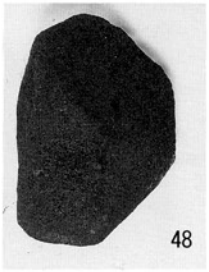

5

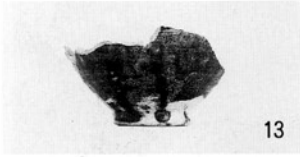

7

6

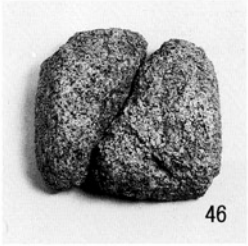

8

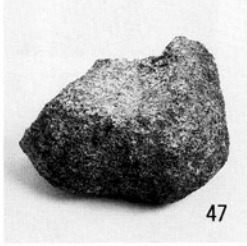

27

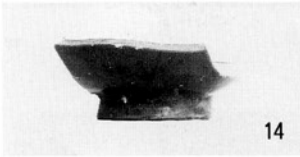

48

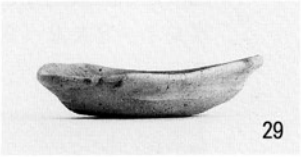

13

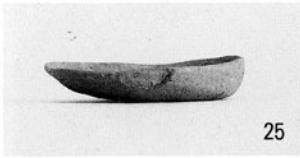
28

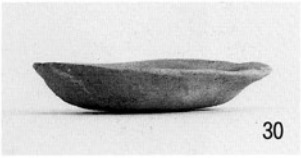

46

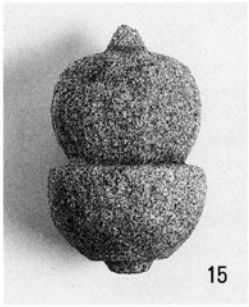

47

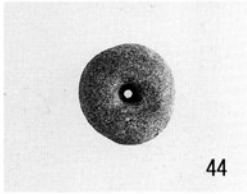

14

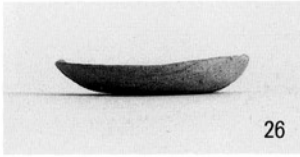

29

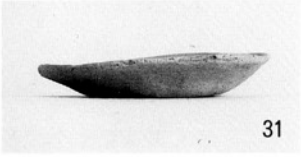

25


30


15

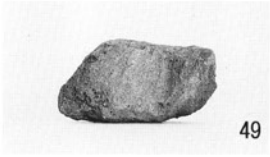

44

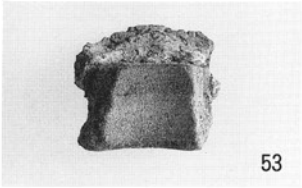

26

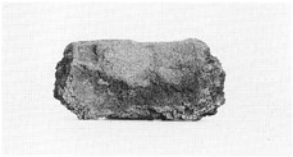

31

41

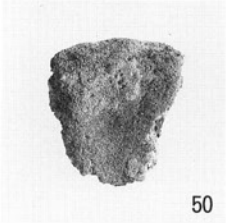
42

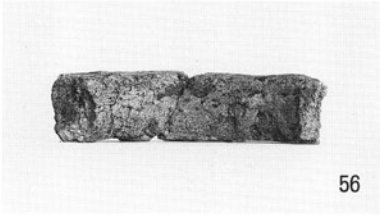

49

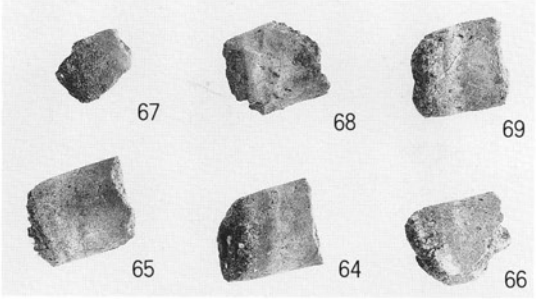

53

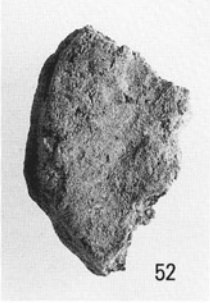


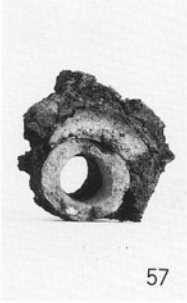
51

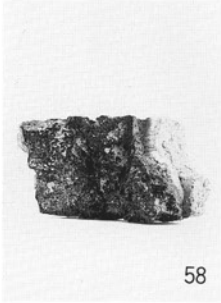

50

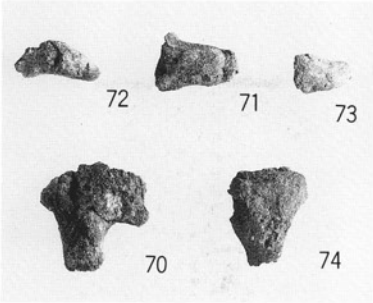

56

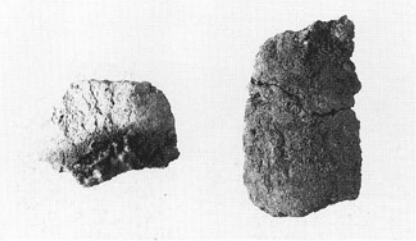

67
68
69
65
64
66

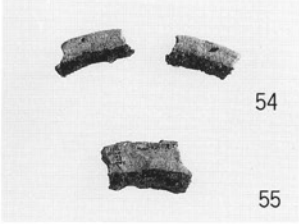

52

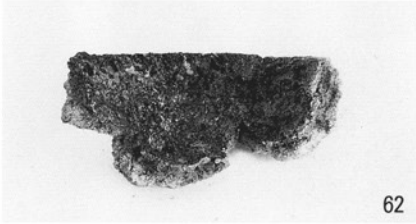

57

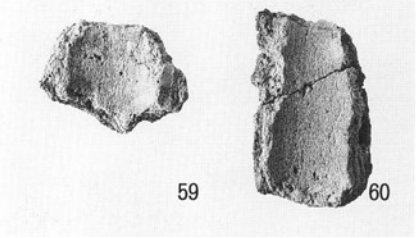

58

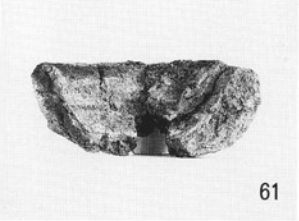

72
71
73
70
74

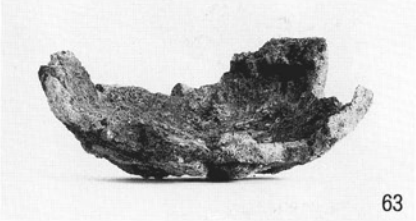


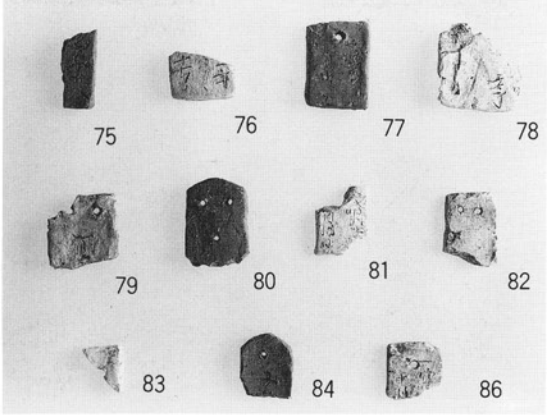

54
55

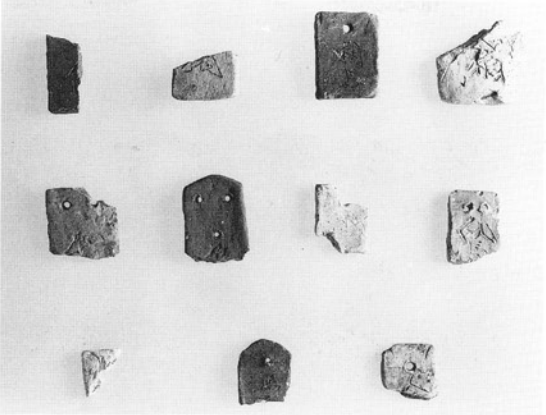

62

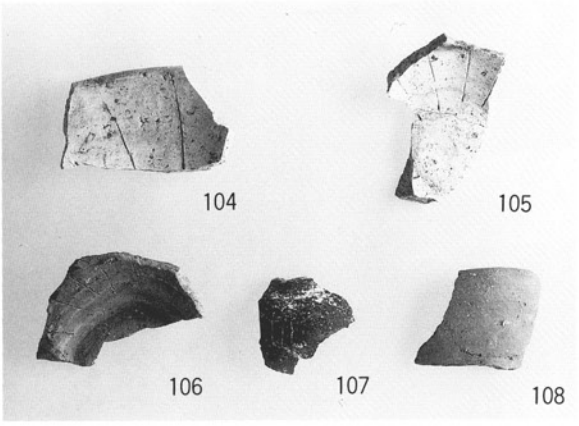

59
60

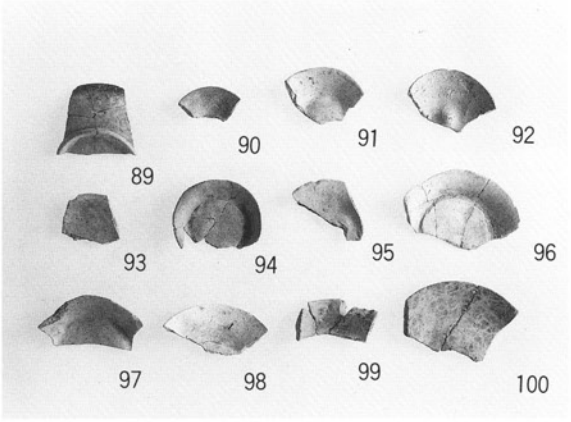

61

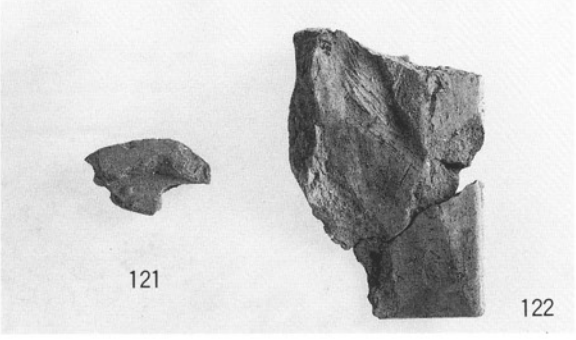

63


75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
86

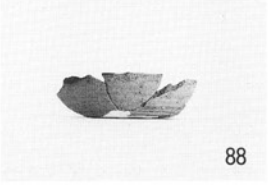



104
105
106
107
108

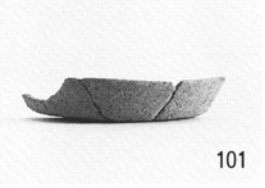

89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100


121
122

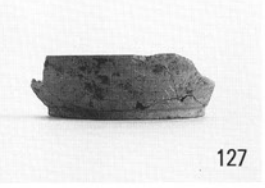
87

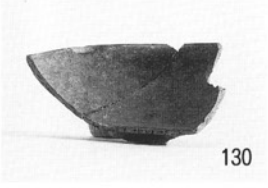

88

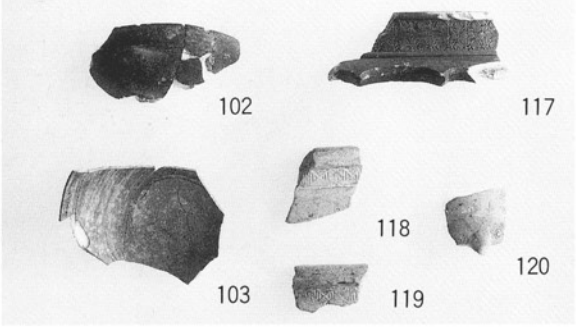
123

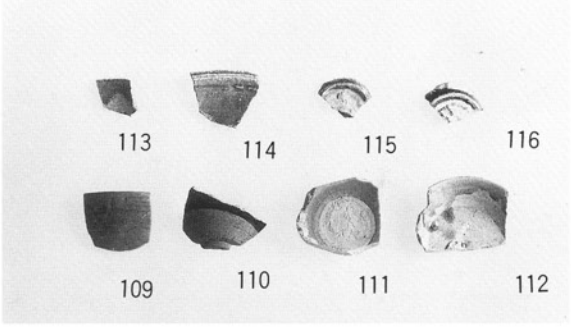

101

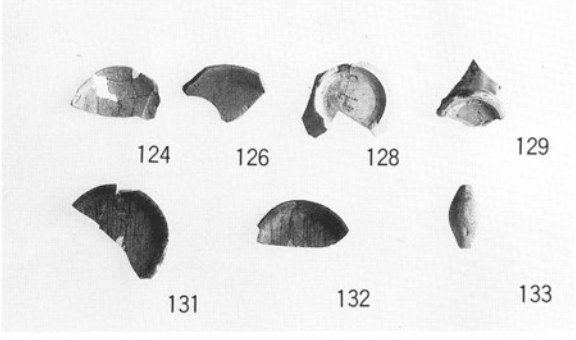
125

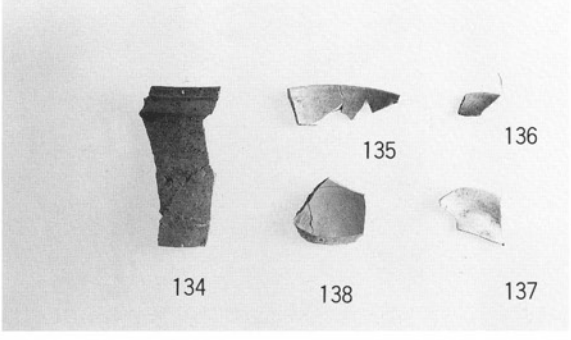

127


130


102
117
118
120
103
119


113
114
115
116
109
110
111
112


124
126
128
129
131
132
133


135
136
134
138
137

Ⅱ．上野市沖　山神遺跡

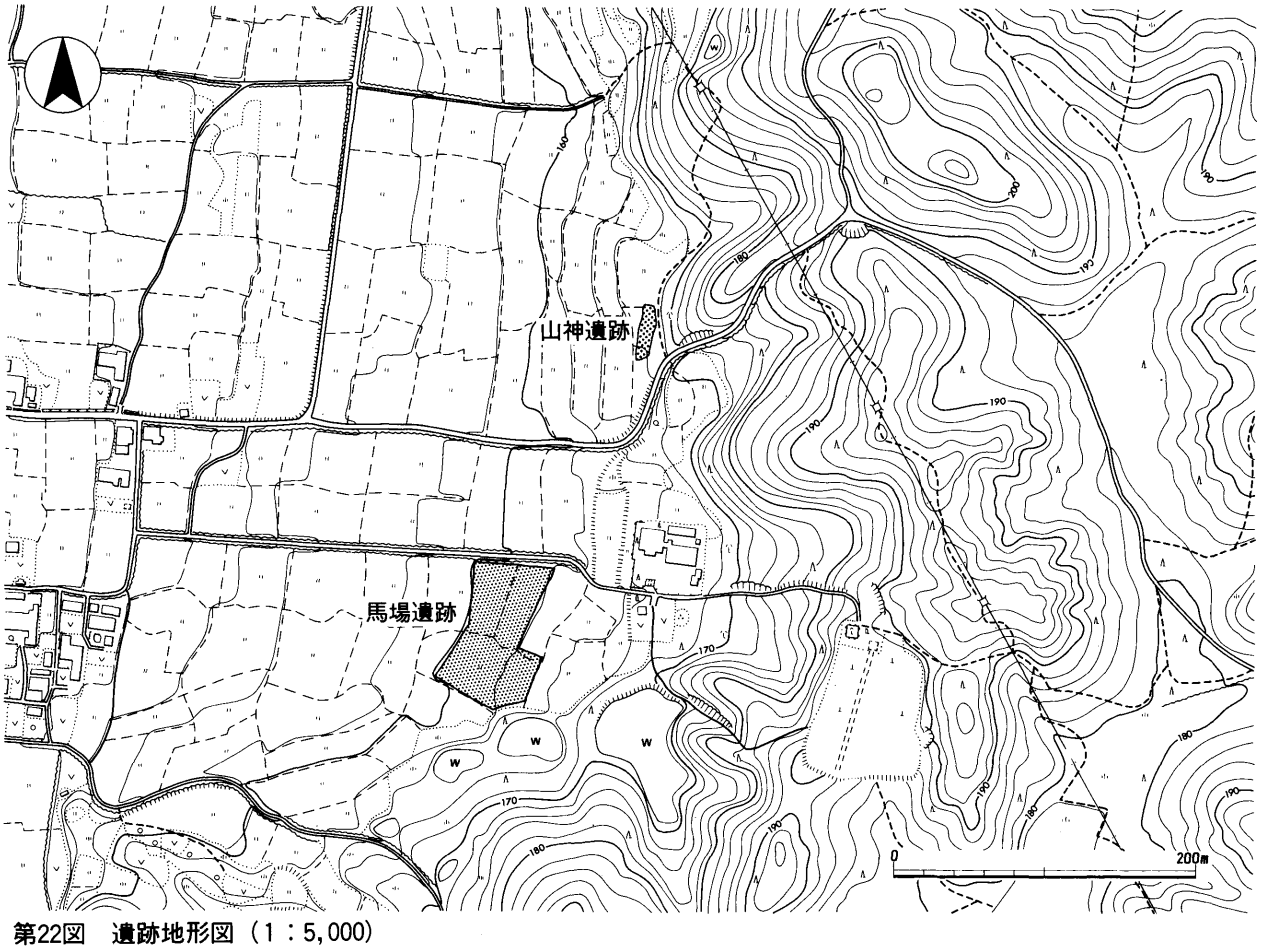
1　位置と環境

山神遺跡（1）は、木津川右岸、上野盆地と比自岐小盆地を分ける丘陵の西側端部に位置し、行政上は上野市沖字山神に所在する。

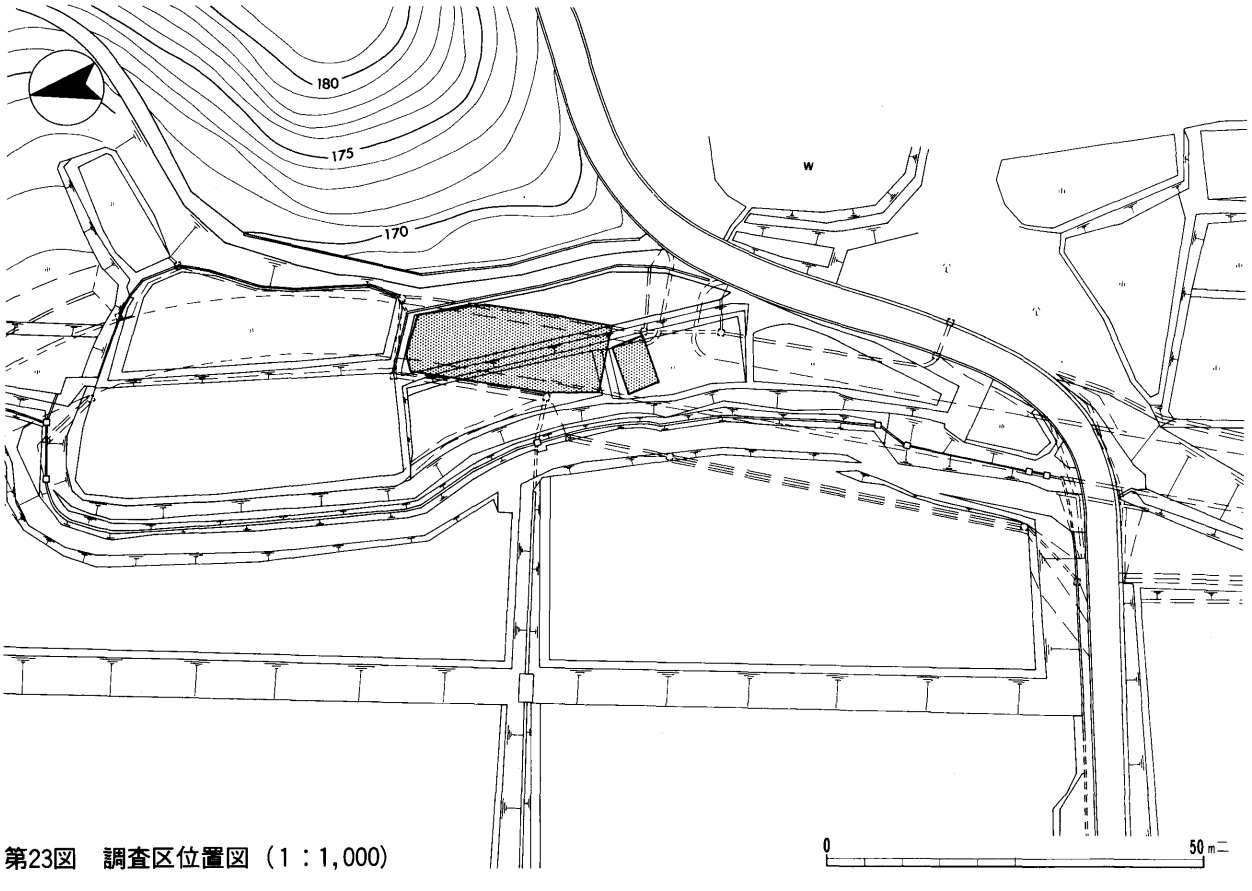
当遺跡の西方を流れる木津川（旧長田川）は、上野の市街地に向けて北流しているが、古くは現在の沖の集落付近を流れており、江戸時代に河道の付け替えが行われ、現在の流路になっている。[1]

上野市南部の木津川流域にひろがる平地部分には、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が数多く存在する。縄文時代の遺跡としては、前期の北白川下層

第21図　遺跡位置図（1：50,000）国土地理院「伊勢路」



第22図　遺跡地形図（1：5,000）

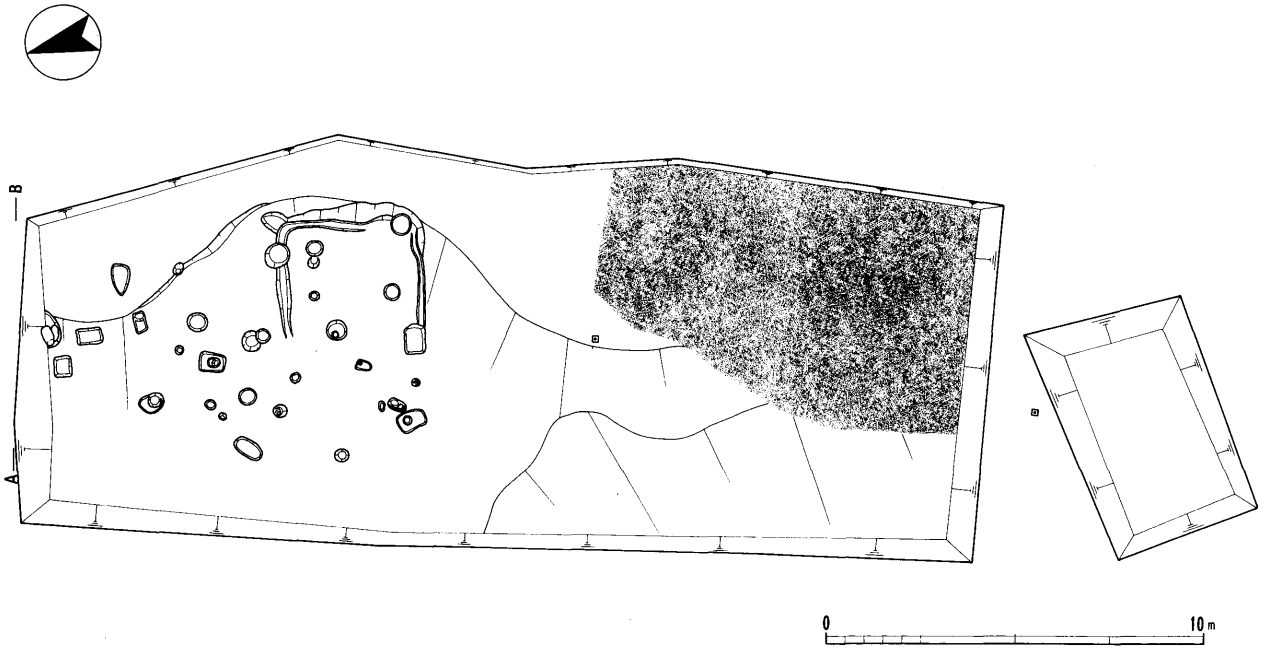


第23図　調査区位置図（1：1,000）

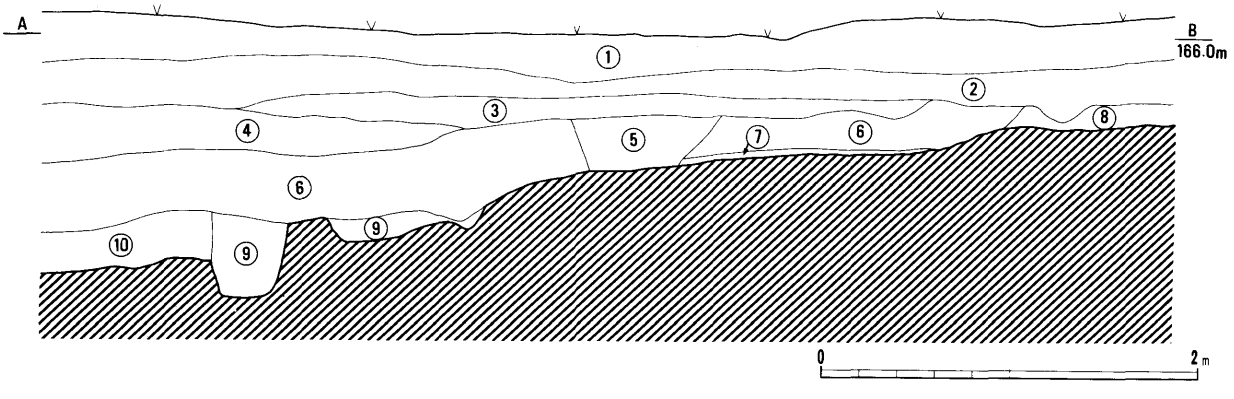
式が出土した田中遺跡[2]（２）や清水北遺跡が、弥生時代の遺跡としては、弥生時代後期前半の良好な土器が多数出土した才良遺跡[3]（３）や農耕具や祭祀具を含む多くの木製品が出土した北堀池遺跡[4]（４）、森脇遺跡（５）、下郡遺跡（６）、田中遺跡、山ノ川遺跡（７）、木製長柄鋤・田下駄などの木製品が出土した森寺遺跡[5]（８）などが知られている。弥生時代の遺跡から出土した土器は、畿内的な要素を持つ土器であり、木津川水系を通じて畿内との交流があったことがうかがわれる。

当遺跡の対岸に位置する下郡遺跡は、縄文時代や弥生時代の遺物が出土するが、遺構はあきらかではない。しかし、古墳時代の竪穴住居が２地点で確認されている[6]。

古墳時代になると、上野盆地には御墓山古墳や石山古墳（９）、王塚古墳（10）、久米山古墳群など多くの古墳が築造される。当遺跡の南東には不動寺１号墳（11）や東の比自岐小盆地には、三重の埴輪



第24図　調査区平面図（１：200）



①　耕作土　②　淡黄灰色土（小石混じり）　③　淡褐色土　④　灰褐色粘土（小石混じり）
⑤　晴青灰色土（小石混じり）　⑥　淡褐色土（小石混じり）　⑦　青灰色粘土土　⑧　灰色砂
⑨　淡黒褐色土（小石混じり）　⑩　黒褐色土（小石混じり）

第25図　北壁土層断面図（１：40）

列と三つの粘土郭を持つ4世紀後半の石山古墳、三色の彩色がある埴輪をもつ王塚古墳が築造されている。また、木津川左岸の北堀池遺跡では、水田跡や竪穴住居群が検出され[7]、木津川右岸の城之越遺跡(12)では、祭祀の場と考えられる古墳時代の貼石のある大溝と4棟もの四面庇付大型掘立柱建物が検出されており[8]、上野市南部地域に相当な有力者がいたことをうかがわせる。

飛鳥時代に至って伊賀国が設置され、国府は上野市北部の同市佐那具に置かれた。この頃には、伊賀南部の勢力は衰退していき、伊賀地域の政治や文化の中心は、しだいに上野市の北部へと移っていく。

2　層序と遺構

(1)　層序

調査区の現況は水田で、上野盆地と比自岐小盆地の境をなす丘陵西側端部にあり、標高は約166ｍである。

遺構が検出される地山面までの層序は、第25図のとおりで、淡褐色土（小石混じり）が遺物包含層である。地山までの深さは、調査区東端で約40cmと浅く、西端で約1.2ｍと深い。地山面は北東から南西方向に傾斜している。

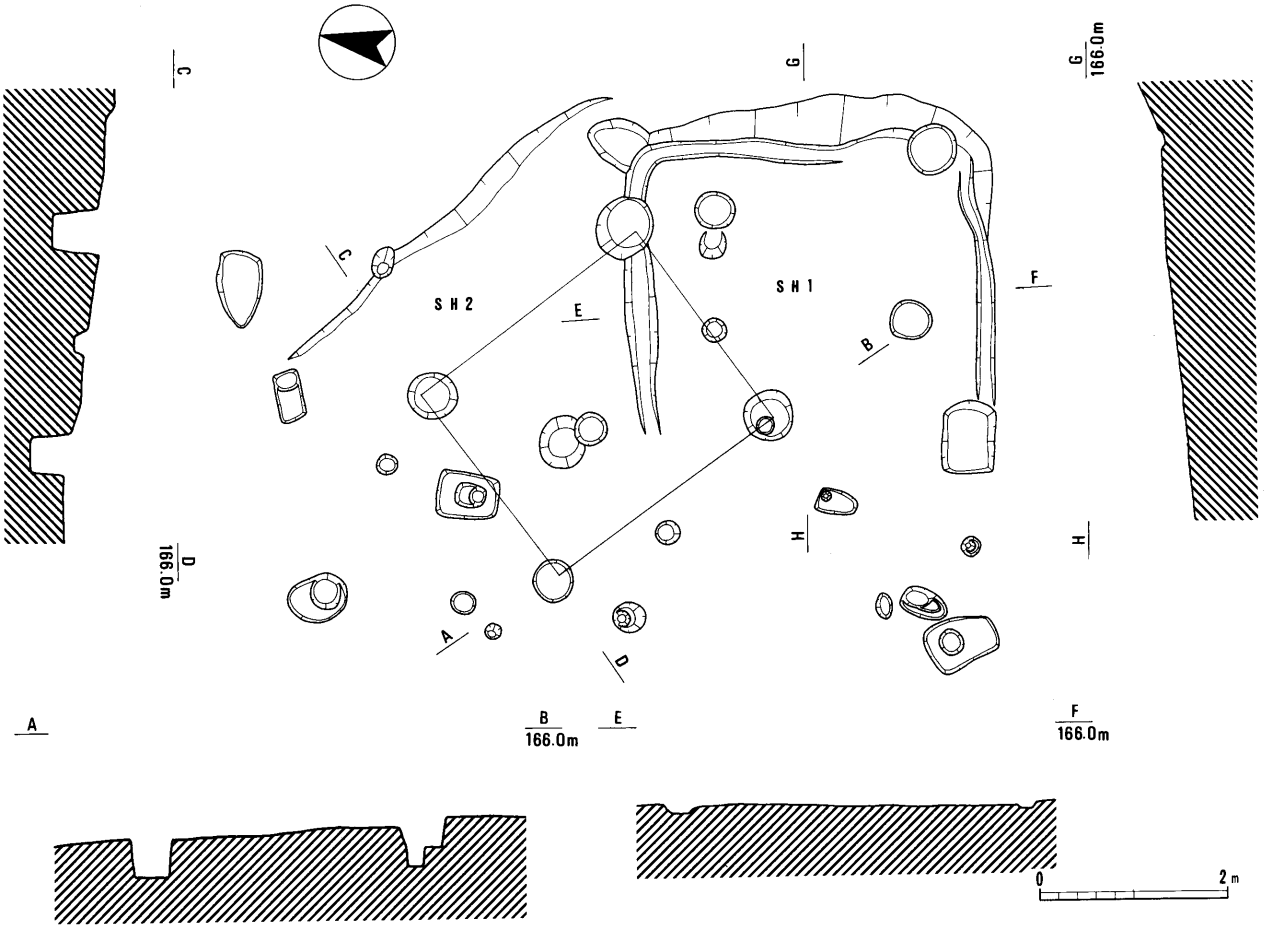
(2)　遺構

a　弥生時代の遺構

弥生時代の明確な遺構は確認できなかったが、東北から南西方向へ落ち込んでいる自然の落ち込み部分から多数の弥生土器が出土した。なお、上層では須恵器杯や瓦器椀などが出土した。

b　古墳時代の遺構

ＳＨ１　西壁は確認できなかったが、一辺が４ｍの



第26図　ＳＨ１・２実測図（１：80）

正方形の竪穴住居であると考えられる。深さ3～7cmの壁周溝が巡っている。主柱穴は確認できなかった。南西隅には1m×0.6mの貯蔵穴かと思われる土坑がある。この土坑の埋土から、ほぼ完形の小型丸底壷が1点出土した。

SH2　SH1により壊されているため、全体の輪郭は不明瞭であるが、主柱穴を4つ検出した。主柱穴間の距離は約3mで、この間隔から一辺5m前後の竪穴住居であったと推定される。

3　遺　物

遺物の大半は、自然の落ち込みから出土した弥生後期の土器や古式土師器である。遺構に伴うものとしては、SH1の貯蔵穴と思われる土坑から小型丸底壷が出土している。包含層からは、土師器、布目瓦片、須恵器や瓦器などが出土した。

(1)　弥生時代の遺物

甕（1～19）　受口状口縁甕（1～13・17～19）と「く」の字状口縁甕（14～16）がある。受口状口縁甕は、口縁部を櫛やヘラによる刺突文を施す。1・2・9は、口縁部から体部上半にかけての破片で、口縁部を櫛による刺突文、頸部から体部上半にかけてを横線文、刺突文を施す。口縁部の破片のうち、3はヘラ状の工具で、4～12は櫛による刺突を口縁部に施すが、13は頸部をヘラによる刺目を施す。

「く」の字状口縁甕は、口縁下端部に刺目を施す。16は、口縁端部と肩部に刺突文がみられる。

高杯（26～34）　26は、杯部上段が外反する。杯部と脚部の接合部に2条の沈線が巡り、透孔があく。27～34は、脚部片である。大小様々なものがあり、外面をヘラミガキ調整しているもの（27～32）、ナデ調整するもの（33・34）がある。脚柱状部の短い32は、裾端部が屈曲して外側に短く開き、三方に透孔があく。脚柱状部の長い30は、三方向に透孔があく。内面には工具痕が残る。

壷（35～44・55～58）　口縁端部を垂下させ、外縁帯を設けるもの（35～38・40～44）と口縁端部を折り返しているもの（39）がある。

外縁帯があるもののうち、35はヘラによる刺目で、36は波状文で、37は円形浮文がみられる。39は、口縁端部に櫛による刻みを施し、口縁部内面の平坦面には波状文が施される。頸部は、外面をハケ調整、内面をナデ調整する。40は、外縁帯を円形浮文で飾り、口縁部内面も外縁に沿って櫛による刺突文で加飾する。42の頸部外面には朱がみられる。

55は、体部片で、外面をヘラミガキで調整するとともに長径5cm、短径4cmの楕円形に朱が塗られている。

56は、受口状に大きく開いた口縁部で、口径約21cmである。

無頸壷（59）　口縁部は外反し、口縁端部を丸くおさめる。外面にはススの付着がみられる。

直口壷（45～51）　45～48は、肩部に竹管による刺突文を施す。45・46の口縁部は弱く外傾して立ちあがり、端部を丸くおさめている。45は、口縁部内面をハケ調整している。48は、口縁部外面をヘラミガキ調整している。49は、頸部をヘラによる刺突文を施し、体部外面をヘラミガキ調整している。50は、頸部を波状文を施す。51は、頸部にヘラにより意味不明の記号が描かれている。

短頸壷（52）　比較的短い口縁部がやや外傾ぎみに付き、口縁端部は丸くおさめる。

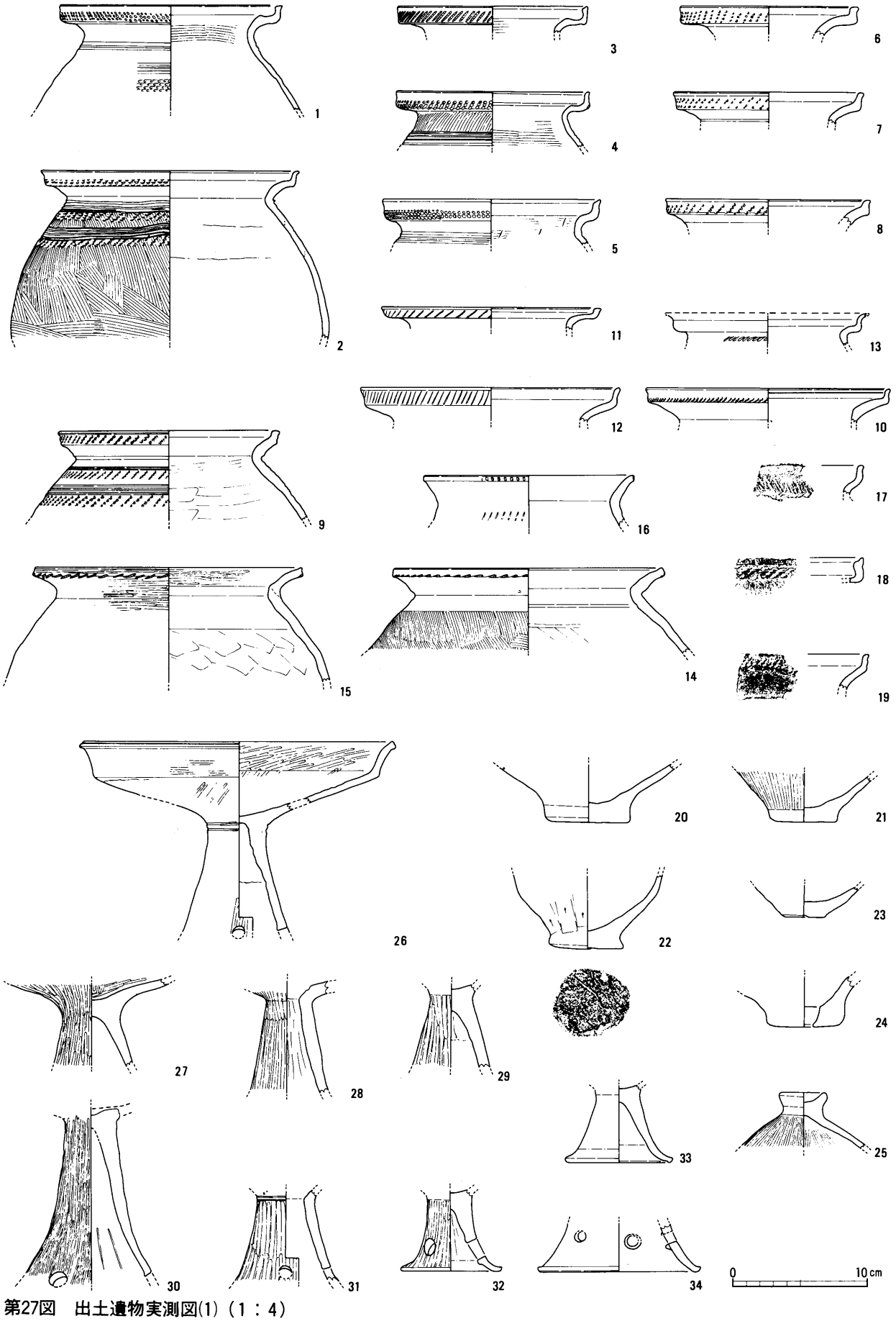
長頸壷（53・54）　53は、口縁部はやや外傾し、口縁端部をヨコナデして丸くおさめる。内外面をヘラミガキで調整するが、内面の調整は粗い。54は、口縁部がやや外傾し、口縁端部をヨコナデする。内外面をヘラミガキで丁寧に仕上げる。

鉢（60）　口径約23cmで、短く外へ屈曲する口縁をもつ。口縁部をヨコナデ、体部内外面をハケで調整する。

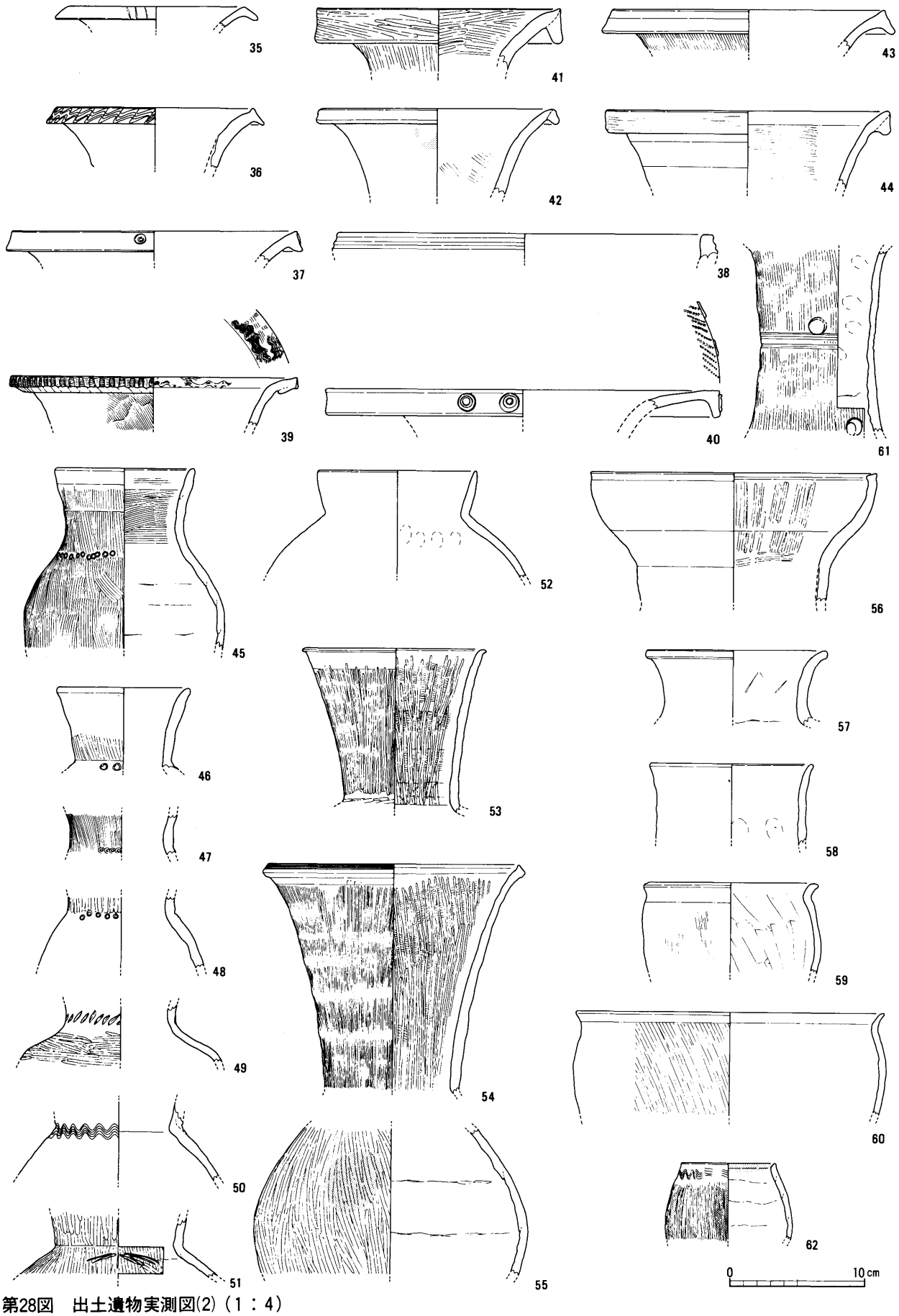
器台（61）　筒状の器台の脚部である。ヘラ状の工具により3条の沈線を施し、透孔が沈線の上下にあく。外面をヘラミガキ調整する。

蓋（25）　裾部を欠いている。突出した頂部は、やや深めに窪んでいる。内外面にはハケメが残る。

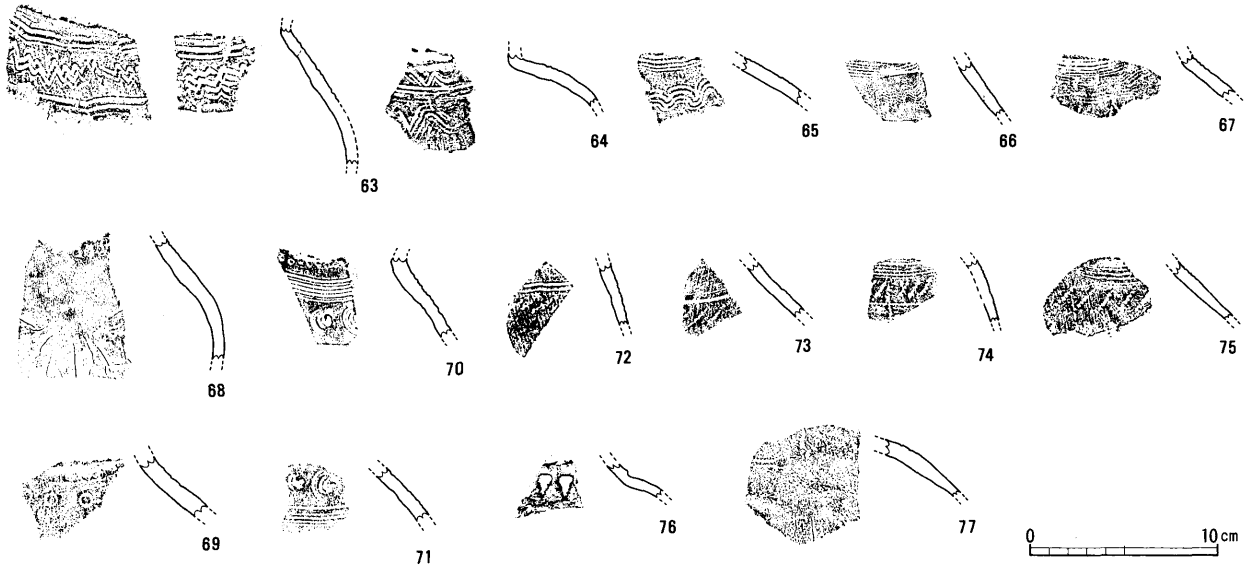
甑（24）　底部径5.4cmで、中央に径約2cmの孔が



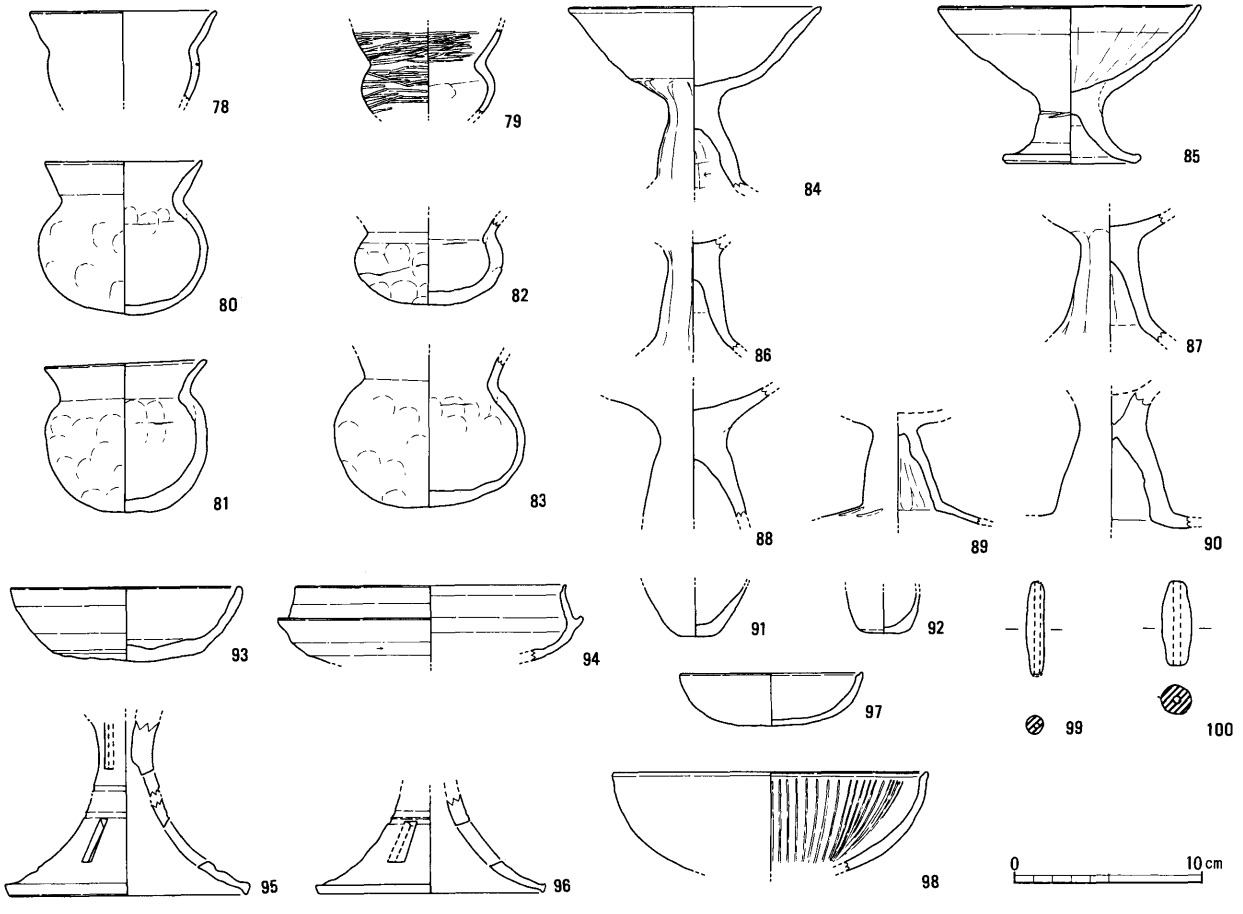
第27図　出土遺物実測図(1)（1：4）



第28図　出土遺物実測図(2)（1：4）



第29図　弥生土器拓影（1：4）



第30図　出土遺物実測図(3)（1：4）

あく。この孔は、焼成前にあけられている。

器種不明（20～23・62～77）　20～23は、甕もしくは壷の底部片である。22は、底部外面に籾殻痕がみられる。

62は、口縁端部外面を波状文で飾る。外面をケズリ、内面をナデで仕上げる。口縁部内面と外面の一部に朱が塗られている。ワイングラス形高杯の杯部ではないかと思われる。

63～77は、甕もしくは壷の体部片である。63～67には横線文と波状文が、68・69には竹管文が、70・71には横線文と渦巻文が、72～75には横線文と刺突文が施されている。76には、三角形の刺突文が施されている。77には、線刻が認められる。

(2) 古墳時代の遺物

土師器小型丸底壷（78～83）　いずれも球形の体部に外反する口縁部がつく。80は、ＳＨ１の貯蔵穴から出土した。79は、外面および口縁部内面をヘラミガキで調整する。80は、内外面に黒斑がみられる。82はやや扁平な体部で、口縁部を欠く。外面底部に黒斑が認められる。

土師器高杯（84～90）　84・85は、浅い椀形の杯部と短い脚をもつ。84は、杯部はナデ、脚部外面は面取り風のナデで調整する。脚部内面にはケズリ痕が残る。85は、接合部に１条の沈線がみられる。円盤充填により底部を作り上げたものと考えられる。86～90は、脚部片である。87は、外面を面取り風のナデで調整する。89・90の脚は、やや膨らみ気味の柱状部で、折れ曲がる直線的な裾部をもつ。89の柱状部から裾部につながる部分には、ヘラ状工具のあたり痕が残る。

ミニチュア土器（91・92）　底部片で、器形は不明である。

須恵器杯身（94）　立ち上がりは内傾し、端部を細く丸める。体部外面のロクロケズリは、1／2程度である。田辺編年のＭＴ85に相当する時期と思われる。

須恵器高杯（95・96）　脚部片である。裾部が大きくラッパ状に開く。脚端部は下方に尖るように垂下し、外面に内傾する面をもつ。95は、２段透かしで透孔と透孔の間に２条の沈線が巡る。

(3) 飛鳥・奈良時代の遺物

土師器皿（97）　口径9.7㎝、器高2.7㎝で、内外面とも磨滅が激しい。

土師器杯（98）　口径16.8㎝で、底部を欠いているために器高は不明である。内面には１段の放射状暗文がみられる。

(4) 時期不明の遺物

土錘（99・100）　101は長さ4.9㎝、径１㎝、重さ4.35ｇである。102は長さ4.5㎝、径1.6㎝、重さ10.95ｇである。

4　結　語

路線内の限られた部分の調査であったため、遺跡の全容を把握するまでには到らなかったが、出土遺物、検出された遺構から、弥生時代後期から古墳時代にかけて、当遺跡において生活が営まれていたと考えられる。

当遺跡は、丘陵裾部の緩斜面に立地しており、古墳時代の竪穴住居を２棟検出している。また、南方250ｍの馬場遺跡も同じような立地の遺跡であるが、古墳時代の遺物が出土し、溝や竪穴住居を検出している[9]。このことから、居住の場としてはあまり適した場所とは考えにくいが、当遺跡の東側の丘陵端部に集落が点在している可能性が考えられる。

また、自然の落ち込みからは弥生土器や古式土師器が多く出土した。今回の調査では、弥生時代の遺構は検出されなかったが、出土した遺物の状態は良く、当遺跡の近隣に弥生時代の居住地も存在するものと思われる。

今回出土した弥生土器は、Ｖ様式前半の土器が多い。その中で、甕の口縁部は19個体分が確認でき、うち16個体が受口状口縁甕で、全体の８割を占める。ところが才良遺跡では、口縁が確認できる41個体中、受口状口縁甕が10個体、「く」の字状口縁甕が16個体で、「く」の字状口縁甕の占める割合が高く、当遺跡とは若干傾向を異にする。

自然の落ち込みから出土した壷（39）は、この地方ではあまり見られない「折返し口縁」を持つ。伊賀地方では「折返し口縁」を持つ壷は、名張市井出の城屋敷遺跡で１点出土しているだけである[⑩]。いわゆる菊川式などの特徴をもつものであるが、胎土・色調は在地の土器に近く、搬入品の可能性は低い。しかし、畿内や近江だけでなく、東国と何らかの交流があったことをうかがわせる遺物である。

（船越重伸）

註

① 『沖村地誌　全』　明治年間

② 沖島卯之・星野獣二・宇佐晋一「三重県上野市田中遺跡の縄文式土器」『古代学研究18』　1958

③ 西森平之『才良遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会　1983

③ 山田猛ほか『三重県上野市　北堀池遺跡発掘調査報告　第一分冊』三重県教育委員会1981

⑤ 森川桜男「三重県上野市森寺発見の木鋤」『古代学研究14』1956

⑥ 中森英夫・山田猛・山本雅靖『下郡遺跡発掘調査報告』上野市教育委員会　1978

⑦ 上掲④に同じ

⑧ 穂積裕昌ほか『城之越遺跡』三重県教育委員会　1992

⑨ 吉澤良「馬場遺跡」『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第１分冊－』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター　1992

⑩ 門田了三『名張市井手　城屋敷遺跡』名張市教育委員会　1985

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	015-02	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層	16.4			内：ヨコナデ、ヨコハケ、オサエのちナデ 外：タテハケナデ消し	砂粒を多く含む	良	灰白色	3／4	口縁部外面に刺突文 体部外面に凹線文、刺突文
2	002-01	弥生土器 受口状口縁甕	B 4・5 包含層	19.0			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、浅いハケメ	～２mmの細砂粒を少し含む	良	浅黄橙色	口縁１／４	内面に粘土接合痕 外面に刺突文、横線文
3	004-06	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層	13.9			ヨコナデ、ナデ	粗　１～1.5mm大の小石、微砂粒を含む	並	淡黄色	1／10	口縁部外面に刺突文
4	004-04	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層	14.2			ヨコナデ、ハケメ	やや粗　１～３mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	並	淡黄色～黒色	1／4	口縁部外面に刺突文 肩部に横線文
5	005-01	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層	16.0			内：ヨコナデ、工具ナデ 外：ヨコナデ	粗　１～1.5mm大の小石、微砂粒を含む	並	灰白色～灰黄褐色	1／2	口縁部外面に刺突文 肩部に横線文
6	005-05	弥生土器 受口状口縁甕	B 6 包含層	13.0			内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ナデ	やや密　～1.5mmの小石、～１mmの砂粒、微砂粒を含む	並	浅黄橙色	1／7	口縁部外面に刺突文
7	006-03	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層	13.8			ヨコナデ	やや粗　１～1.5mm大の小石、微砂粒を含む	並	灰白色～にぶい黄橙色	1／8	口縁部外面に刺突文
8	006-02	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層	15.0			ヨコナデ	やや粗　４mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	並	灰白色	1／8	口縁部外面に刺突文
9	005-02	弥生土器 受口状口縁甕	B 6 包含層	17.2			内：ヨコナデ、工具ナデ 外：ヨコナデ、ナデ	やや粗　１～２mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色～灰褐色	1／7	口縁部外面に刺突文 肩部に横線文
10	005-03	弥生土器 受口状口縁甕	B 6 包含層	18.0			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ	やや粗　４mm大の小石、～２mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色～黒色	1／10	口縁部外面に刺突文 肩部に横線文
11	005-04	弥生土器 受口状口縁甕	B 4 包含層	16.0			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ	やや粗　１～2.5mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	並	灰白色	1／10	口縁部外面に刺突文
12	007-02	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層	19.0			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ	やや粗　１～４mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	並	淡黄色～にぶい黄褐色～黒色	1／8	口縁部外面に刺突文
13	006-01	弥生土器 受口状口縁甕	試掘坑 No. 5	15.0			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ	粗　～１mmの砂粒、微砂粒を含む	並	灰白色		肩部に刺目
14	004-01	弥生土器 「く」の字状口縁甕	B 5 包含	19.6			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケメ	密　1.5mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	良	淡黄色～黒色	1／4	口縁部外面に黒斑 口縁部下端に刺目
15	008-04	弥生土器 「く」の字状口縁甕	B 6 包含層	19.6			内：ナデ、ヨコナデ 外：ミガキ	やや密　～２mmの砂粒を含む	並	灰黄色～黄灰色	1／4	口縁部外面下部に刺目 口縁部外面にススが付着
16	004-02	弥生土器 「く」の字状口縁甕	B 5 包含層	15.2			内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ	やや粗　２～３mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	並	灰黄色～橙色	1／12	口縁部・頸部外面に刺突文
17	010-01	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層				内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、ハケメ	やや粗　～２mmの砂粒を含む	並	灰白色～灰黄褐色		口縁部外面に刺突文
18	006-065	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層				ヨコナデ	粗　～１mmの砂粒、微砂粒を含む	不良	灰白色～灰黄褐色		外面に沈線、刺突文
19	006-07	弥生土器 受口状口縁甕	B 5 包含層				ヨコナデ	粗　１～３mm大の小石、～１mmの砂粒を含む	並	灰白色～暗灰黄色～黒色		外面に刺突文
20	011-04	弥生土器 壷または甕	B 5 包含層			底径　5.6	ナデ	微砂粒を多く含む	並	内：灰色 外：淡黄色	完形	底部外面：未調整
21	011-01	弥生土器 壷または甕	B 5 包含層			底径　5	内：ナデ 外：ハケメ、ナデ	微砂粒を少し含む	良	浅黄色	完形	底部外面の一部に黒斑
22	018-02	弥生土器 壷または甕	B 6 包含層			底径 4.9～5.7	内：ナデ 外：ヘラケズリ、ナデ	細砂粒を含む	良	にぶい黄橙色		底部外面に籾殻痕
23	018-06	弥生土器 壷または甕	B 5 包含層			底径 3.6～ 3.8	ナデ	細砂粒を含む	良	橙色～褐灰色		
24	020-06	弥生土器 甑	B 5 包含層			底径　5.4	ナデ	細砂粒を含む	良	内：灰色 外：灰白色	完存	底部に穿孔
25	011-03	弥生土器 蓋	B 5 包含層			つまみ径 3.3	ハケメ	細砂粒を少し含む	並	内：黄灰色 外：灰黄色	完形	

第４－１表　出土遺物観察表

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
26	016-01	弥生土器 高杯	B 5 包含層					やや粗　1～5mm大の小石、～1mmの砂粒を含む	並	淡黄色		接合部に2条の沈線
27	019-02	弥生土器 高杯	B 5 包含層					細砂粒を含む	良	灰白色		
28	016-04	弥生土器 高杯	B 5 包含層				内：ナデ 外：ヘラミガキ	～1mmの砂粒、微砂粒を含む	良	灰白色		
29	012-01	弥生土器 高杯	B 5 包含層				内：ナデ 外：ヘラミガキ	細砂粒を少し含む	良	淡黄色		内面にシボリ痕
30	019-04	弥生土器 高杯	B 5 包含層				外：ハケのちヘラミガキ	微砂粒を含む	良	灰白色～明褐灰色		内面に工具痕あり
31	012-02	弥生土器 高杯	B 5 包含層				内：ナデ 外：ヘラミガキ	細砂粒を少し含む	良	にぶい黄橙色		円形透かし
32	012-03	弥生土器 高杯	B 5 包含層			裾径　7.5	裾内：ヨコナデ 外：ヘラミガキ	細砂粒を少し含む	良	にぶい黄橙色	1／3	三方向に円形透かし 内面にシボリ痕
33	011-06	弥生土器 高杯	B 5 包含層			裾径　8.0		微砂粒を少し含む	良	浅黄橙色	2／5	
34	016-03	弥生土器 高杯	B 5 包含層				ヨコナデ	～1mmの砂粒、微砂粒を含む	並	淡黄色		円形透孔
35	005-06	弥生土器 壺	B 3 包含層	12.8			ヨコナデ	やや粗　1～1.5mm大の小石、微砂粒を含む	並	灰白色～暗灰黄色	1／12	口縁部外面に刺突文
36	018-01	弥生土器 壺	B 6 包含層	16.0			ナデ	砂粒を含む	良	浅黄橙色	1／4	口縁部外面に波状文
37	004-03	弥生土器 壺	B 4 包含層	20.8			ヨコナデ	やや粗	良	浅黄橙色～浅黄橙色	1／6	口縁部外面に円形浮文
38	019-05	弥生土器 壺	B 6 包含層	27.8			ナデ	微砂粒を含む	良	灰白色		口縁部外面に横線文
39	007-03	弥生土器 壺	B 3 P 2	21.0			内：ナデ 外：ヨコナデ、ハケメ	やや密　～1mmの砂粒、微砂粒を含む	並	淡黄色		口縁部内面に波状文 口縁部外面に刺目 折返し口縁
40	007-01	弥生土器 壺	B 5 包含層	30.1			内外面：ヨコナデ	密　1～4mm大の小石、細砂粒を含む	良	灰白色	1／14	口縁部内面に刺突文 口縁部外縁帯外面に円形浮文
41	017-02	弥生土器 壺	B 5 包含層	17.9			内：ヘラミガキ 外：ヨコナデ、ヘラミガキ	やや密　1～3mm大の小石、～1mmの砂粒を含む	良	灰白色		
42	017-05	弥生土器 壺	B 5 包含層	17.0			外：ヨコナデ、ナデ	密　微砂粒を含む	並	灰白色	1／12	外面に朱
43	017-03	弥生土器 壺	B 5 包含層	20.0			ヨコナデ	やや密　1～2.5mm大の小石、～1mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色	1／8	
44	013-03	弥生土器 壺	B 5 包含層	21.0			内：ハケメ 外：ナデ	微砂粒を多く含む	並	橙色	1／8	口縁部外面に薄いハケメ
45	003-01	弥生土器 直口壺	B 5 包含層	10.4			内：ヨコナデ、上半ハケメ、下半ナデ 外：ヨコナデ、ハケメ	～2mmの細砂粒を含む	良	浅黄橙色	口縁1／4	肩部に竹管文
46	008-05	弥生土器 直口壺	B 4 包含層	9.6			内：ヨコナデ 外：ヨコナデ、ハケメ	やや粗　～4mmの砂粒を含む	並	にぶい黄橙色～褐灰色	1／6	肩部に竹管文
47	020-03	弥生土器 直口壺	B 5 包含層				内：オサエ 外：ハケメ	細砂粒を含む	良	灰白色～褐灰色		外面に竹管文
48	009-02	弥生土器 直口壺	B 6 包含層			頸部径 8.0	内：ナデ、ヨコナデ 外：ミガキ、ナデ	やや粗　～2mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色～褐灰色	1／6	肩部に竹管文
49	009-01	弥生土器 直口壺	B 5 包含層			頸部径 8.1	内：ナデ 外：ミガキ	やや粗　～2mmの砂粒を含む	並	浅黄橙色～灰白色	1／8	肩部に刺目
50	009-04	弥生土器 直口壺	B 6 包含層			頸部径 9.4	内：ナデ	やや粗　～2mmの砂粒を含む	並	灰白色～灰黄褐色	1／4	肩部に波状文
51	008-02	弥生土器 直口壺	B 6 包含層			頸部径 9.5	内：ナデ、オサエ 外：ハケ、ミガキ	やや密　～1.5mm以下の砂粒を含む	良	橙色～浅黄橙色	1／3	頸部にヘラ書きの模様 内面に粘土接合痕
52	019-01	弥生土器 短頸壺	B 5 包含層				内：ヨコナデ、オサエ 外：ヨコナデ、ナデ	細砂粒を含む	良	淡橙色		
53	014-03	弥生土器 長頸壺	B 5 包含層	13.1			内：ハケメのちヘラミガキ 外：ヘラミガキ	細砂粒を多く含む	良	にぶい黄橙色	2／3	
54	014-01	弥生土器 長頸壺	B 5 包含層	19.4			内：ハケメのちヘラミガキ 外：ヘラミガキ	細砂粒を含む	良	灰黄色	1／3	
55	009-03	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層			体部径20.2	外：ミガキ	やや粗　～1.5mmの砂粒を含む	並	内：にぶい黄橙色 外：にぶい橙色	1／4	外面に朱 内面に粘土接合痕
56	013-04	弥生土器 壺	B 5 包含層	21.0			内：ヨコナデ、ヘラミガキ 外：ヨコナデ、ナデ	細砂粒を多く含む	良	にぶい黄橙色		
57	017-01	弥生土器 壺	B 6 包含層	13.2			外：ヨコナデ	やや密　1～2mm大の小石、～1mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色		内面に粘土接合痕
58	017-04	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層	12.0			ヨコナデ	やや密　1～3mm大の小石、～1mmの砂粒を含む	並	にぶい橙色		
59	015-01	弥生土器 無頸壺	B 5 包含層	13.0			内：ヨコナデ、工具ナデ 外：ヨコナデ、ハケメ	砂粒を多く含む	良	にぶい黄橙色	完形	外面にススが付着
60	013-02	弥生土器 鉢	B 5 包含層	23.0			ハケメ	微砂粒を少し含む	良	灰白色	1／2	
61	016-02	弥生土器 器台	B 5 包含層				内：オサエのちナデ 外：ヘラミガキ	やや密　1～2.5mm大の小石、～1mmの砂粒を含む	良	暗灰黄色		円形透孔、沈線
62	008-01	弥生土器	B 6 包含層	6.7			内：オサエ、ナデ 外：ミガキ	やや粗　～2mmの砂粒を含む	並	灰黄色	1／3	口縁部外面に波状文 口縁部内面・体部外面に朱 内面に粘土接合痕
63	010-05	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：ナデ	粗　～3.5mmの砂粒を多く含む	並	外：にぶい黄橙色～灰黄褐色 内：灰白色		外面に横線文、波状文
64	019-03	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				ナデ	細砂粒を含む	良	明褐灰色		外面に沈線、波状文
65	009-06	弥生土器 壺または甕	B 6 包含層				内：ナデ	やや粗　～1.5mmの砂粒を含む	並	灰白色		外面に横線文、波状文

第4－2表　出土遺物観察表

No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	口径 cm	器高 cm	その他 cm	技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
66	010-07	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：ナデ 外：ハケメ	やや密 ～3mmの砂粒を含む	良	にぶい橙色		外面に横線文、波状文
67	010-04	弥生土器 壺または甕	B 6 包含層				内：ナデ	やや密 ～1mmの砂粒を含む	並	灰白色		外面に横線文、刺突文
68	010-03	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：オサエ、ナデ、未調整 外：ハケメ、ミガキ	やや粗 ～2mmの砂粒を含む	並	内：黒色 外：にぶい黄橙色		肩部に竹管文
69	009-05	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				外：ハケメ	粗 ～1.5mmの砂粒を含む	並	橙色		外面に竹管文
70	006-05	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：ナデ	密 1～1.5mm大の小石、細砂粒を含む	良	浅黄橙色		外面に竹管文、横線文、渦巻文
71	009-07	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：ナデ	やや密 ～2mmの砂粒を含む	並	灰白色		外面に渦巻文、横線文
72	006-04	弥生土器 壺または甕	試掘坑 No. 5				内：ナデ	やや密 ～1mmの砂粒、微砂粒を含む	並	浅黄橙色～灰白色		外面に刺突文、横線文
73	009-08	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：ナデ 外：ハケメ	やや粗 ～1.5mmの砂粒を含む	並	灰白色		外面に横線文、刺突文
74	010-08	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層					やや粗 ～2mmの砂粒を含む	並	灰白色～灰褐色		外面に横線文、刺突文
75	010-02	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：ナデ 外：ハケメ	やや密 ～1.5mmの砂粒を多く含む	並	淡黄色		外面に刺突文
76	018-03	弥生土器 壺または甕	C 3 包含層					砂粒を含む	良	灰白色		外面に刺突文
77	010-06	弥生土器 壺または甕	B 5 包含層				内：オサエ、ナデ 外：ナデ	やや粗 ～3mmの砂粒を含む	並	内：黄灰色 外：黄灰色		外面に線刻
78	018-04	古式土師器 小型丸底壺	C 3 包含層	9.8			ヨコナデ、ナデ	細砂粒を含む	良	褐灰色～にぶい橙色～灰白色		
79	018-05	古式土師器 小型丸底壺	C 3 包含層				ヘラミガキ	微砂粒を含む	良	にぶい橙色		内面に工具痕
80	001-01	古式土師器 小型丸底壺	SH1	8.3	8.1	体部径 8.9	内：ヨコナデ、上半オサエ、下半ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	～2mmの細砂粒を多く含む	良	にぶい黄橙色	口縁1／2 体部完存	内外面に黒斑
81	001-02	古式土師器 小型丸底壺	包含層	8.6	8.1	体部径 8.5	内：ヨコナデ、上半オサエ、下半ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	～2mmの細砂粒を多く含む	良	にぶい黄橙色	口縁1／4 体部3／4	
82	001-04	古式土師器 小型丸底壺	C 3 包含層			体部径 7.8 頸部径 6.7	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	～2mmの細砂粒を含む	良	明褐灰色	頸部1／4 体部完存	底部外面に黒斑
83	001-03	古式土師器 小型丸底壺	B 6 包含層			体部径10.0	内：ヨコナデ、上半オサエ、下半ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	～2mmの細砂粒を多く含む	良	にぶい黄橙色	体部3／4	
84	003-02	古式土師器 高杯	包含層	13.4		頸部径 2.7		～1mmの微砂粒を多く含む	良	明赤褐色～橙色	頸部完存	
85	014-02	古式土師器 高杯	B 5 包含層	13.9	8.5～ 8.9	底径 7.0～7.3	内：ヨコナデ、板ナデ 外：ヨコナデ、オサエのちナデ	細砂粒を多く含む	良	灰白色	口縁2／3 脚部1／3	円盤充填
86	011-08	古式土師器 高杯	C 3 包含層					微砂粒を多く含む	並	橙色		
87	012-05	古式土師器 高杯	C 3 包含層				内：ナデ 外：面取り風ナデ	微砂粒を多く含む	並	淡黄色		内面にシボリ痕
88	013-01	古式土師器 高杯	C 3 包含層				ナデ	微砂粒を少し含む	良	灰黄色		炭化物が付着
89	020-05	古式土師器 高杯	包含層				ナデ	細砂粒を含む	良	にぶい橙色～灰白色		脚部外面に工具痕
90	020-04	古式土師器 高杯	包含層				ナデ	細砂粒を含む	良	にぶい橙色～灰白色		
91	016-05	ミニチュア土器	B 5 包含層				ナデ	～1mmの砂粒、微砂粒を含む	良	灰白色		
92	008-03	ミニチュア土器	C 3 包含層			体部径 3.8	内：ナデ 外：オサエ、ナデ	密 微砂粒を含む	並	淡黄色	1／4	
93	015-03	須恵器 杯身	B 6 包含層	14.4	3.9		ロクロナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	細砂粒を多く含む	良	灰色	完形	
94	012-04	須恵器 杯身	B 包含層	15.0		袴径 16.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	細砂粒を多く含む	並	灰色	袴 1／6	
95	020-01	須恵器 高杯	B 5 包含層			台径 13.0	ロクロナデ	微砂粒を含む	良	灰色	3／8	三方向に透孔
96	020-02	須恵器 高杯	B 5 包含層			台径 12.2	ロクロナデ	細砂粒を含む	良	灰白色		三方向に透孔？
97	002-02	土師器 皿	B 1 包含層	9.7	2.7		ヨコナデ、ナデ	～2mmの細砂粒を少し含む	良	浅黄橙色	ほぼ完存	
98	002-03	土師器 杯	B 1 包含層	16.8			ヨコナデ、ナデ	～1mmの細砂粒を少し含む	良	浅黄橙色～橙色	1／4	内面に放射状暗文

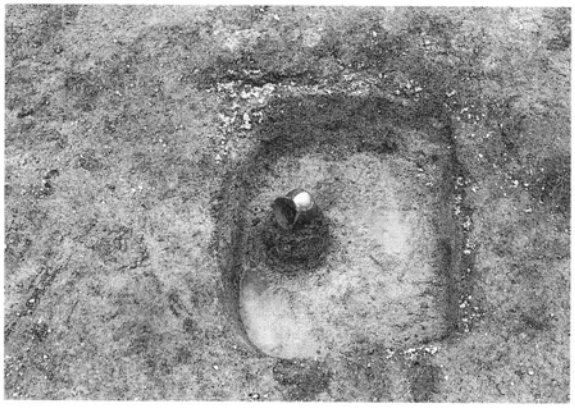
第4－3表　出土遺物観察表

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

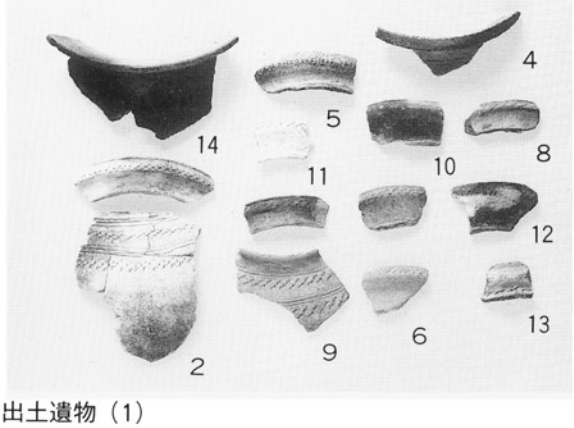
ＳＨ１（南から）

ＳＨ２（西から）

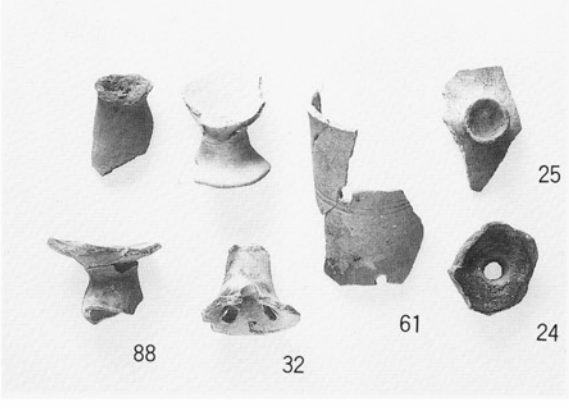


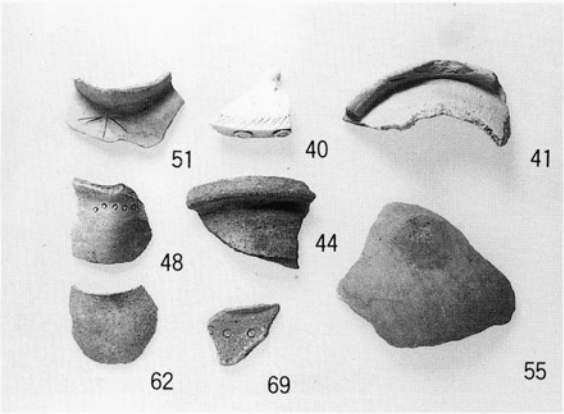
遺物（80）出土状況（西から）

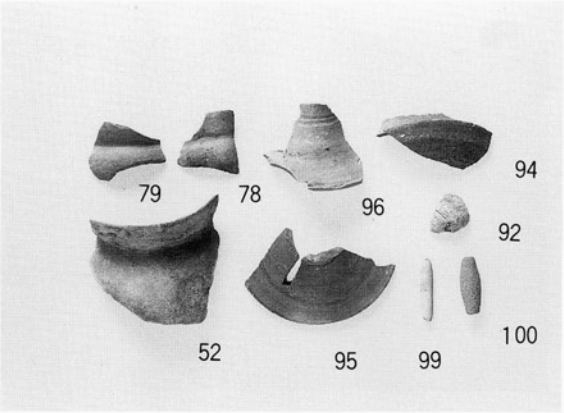
作業風景（南から）

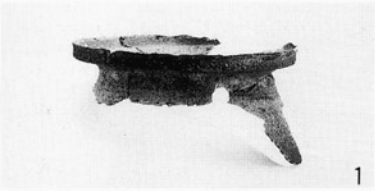


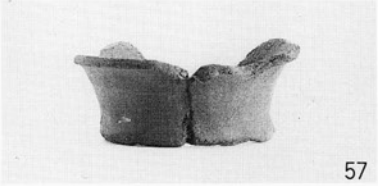
出土遺物（1）



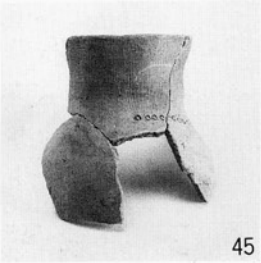

51
40
41
48
44
62
69
55

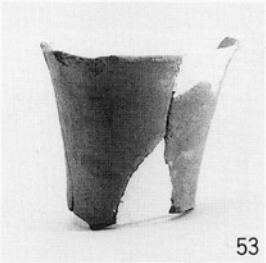

79
78
96
94
92
52
95
99
100


1

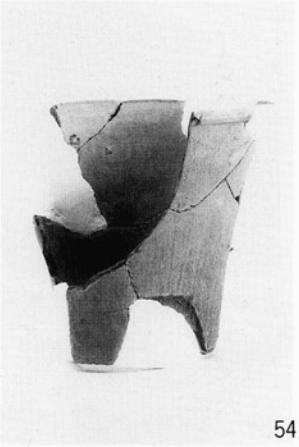

57

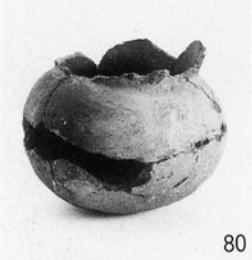
30


45


53

59


54


80

81

82

83

85

93

97

Ⅲ. 阿山郡伊賀町　良福寺跡

1　調査に至る経過

今回の発掘調査は、平成７年度の県営ほ場整備事業に伴う調査である。平成６年度の分布調査、平成６年度および平成７年度の試掘調査の結果、事業地内に8,800㎡にわたり遺跡が広がっていることが判明した。そのうち、事業により削平をうける165㎡について本調査を行った。調査区は、排水路予定箇所の南北方向110ｍ、幅1.5ｍである。調査期間は平成７年10月18日～25日の１週間である。

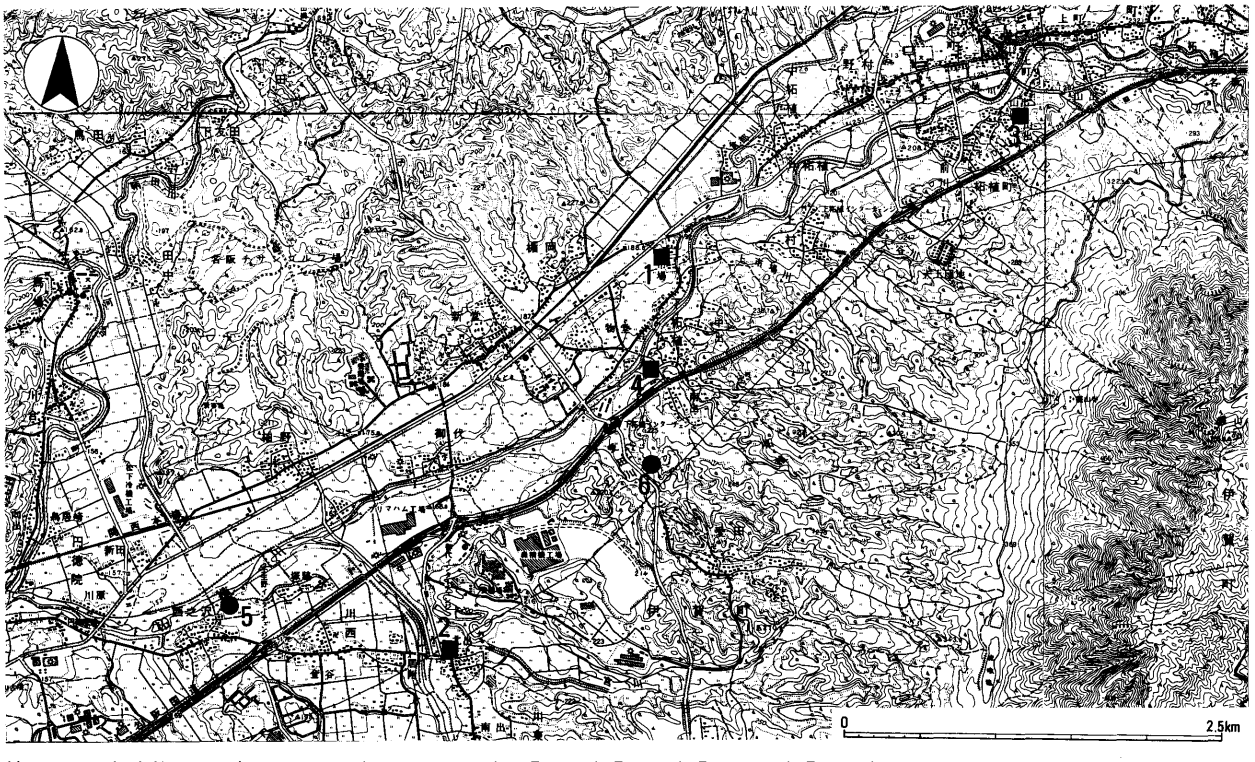
2　位置と環境

当遺跡は、柘植川北岸に形成された河岸段丘上に位置している。標高は185～188ｍで、北から南に緩やかに傾斜している。遺跡所在地の現況は水田である。

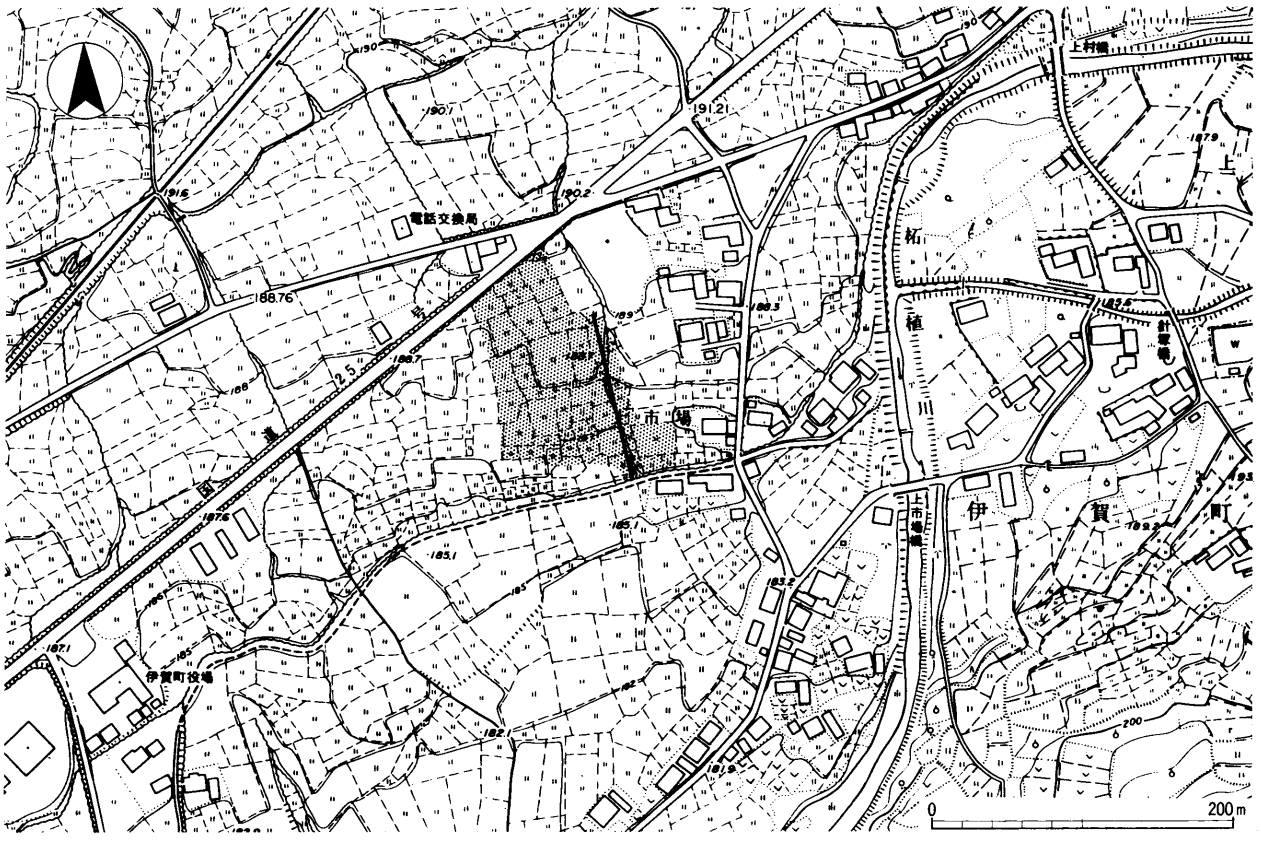
周辺の歴史的環境については、鎌倉～室町時代の中世寺院について述べたい。

当遺跡は中世寺院「良福寺」（１）の推定地である。「明徳二年（1391）九月廿八日書改了」の奥書を持つ西大寺所蔵『西大寺諸国末寺帳』[①]によると、伊賀国内に12ヵ寺が記載され、そのうち「三部野（壬生野）大聖寺（２）」「ツケ（柘植）長福寺（３）」「トクヰ（下柘植字徳井？）良福寺」の三カ寺が伊賀町域に存したという。現在の壬生野には大聖寺を称する寺はないが、川東にある阿弥陀寺の東側、通称ダイショウジにあったと考えられる。同地には小五輪塔の残欠があり、また室町期と見られる瓦片が散布していた[②]。長福寺は現在の柘植町字山出の萬寿寺のことである[③]。

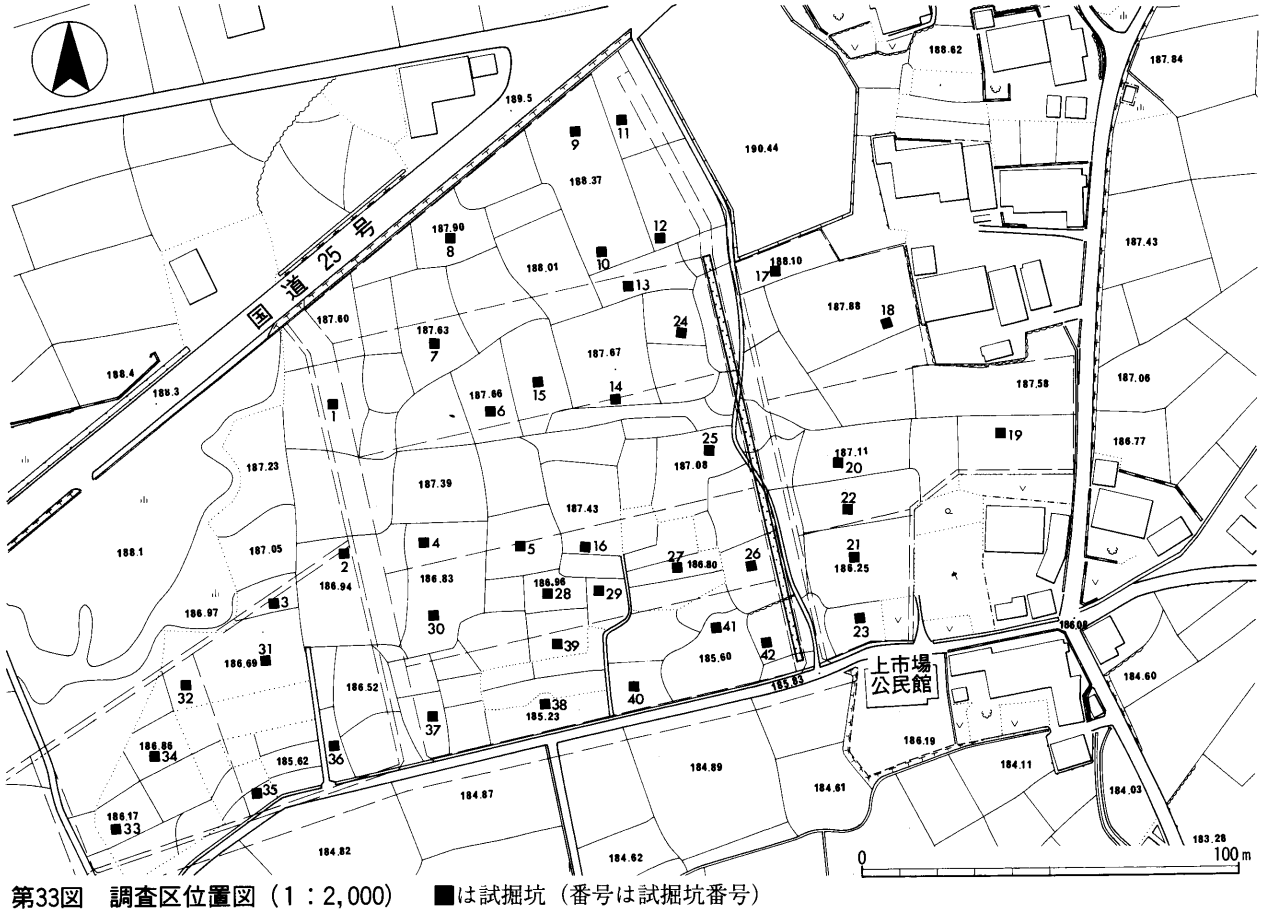
「トクヰ　良福寺」の所在地、来歴を語るものはほとんどない。早瀬保太郎は『伊賀史概説』で「徳井、寺之後の辺りに良福寺が所在したのではあるまいか」と推定している[④]。現在、下柘植字広畑1594番



第31図　遺跡位置図（１：50,000）国土地理院　「上野」「甲賀」「鈴鹿峠」「平松」１：25,000より



第32図　遺跡地形図（1：5,000）　── は調査区範囲



第33図　調査区位置図（1：2,000）　■は試掘坑（番号は試掘坑番号）

地に所在する西光寺（４）が、天正年間（1573～1591年）以前に調査区付近にあったという伝承が地元に残っている。小字寺之後（テラノゴウ）の公民館脇には小石仏群もある。また『伊賀町遺跡地図』（伊賀町教育委員会）には、調査区付近が良福寺跡と記載されている。

なお、今回の調査では縄文時代の遺物も出土した。当遺跡の南西にある天道遺跡（５）でも、縄文時代後期の土器[5]が出土している。また、小波田遺跡（６）ではサヌカイト製の有舌尖頭器[6]が採取されている。

３　遺　構

土層の基本層序は、上から第１層＝黄灰褐色砂質土（耕作土）、第２層＝灰褐色砂質土（床土）、第３層＝灰色粘質土、第４層＝青灰色礫（地山）、第５層＝暗灰色粘質土（溝埋土）であり、遺構検出面は第４層上面とした。調査区の延長は約110ｍで南端と北端の比高は約３ｍである。調査面積が狭く、検出できた遺構は溝が２条にとどまる。

ＳＤ１　調査区の南端寄り約３～６ｍの地点で検出した東西方向に続く溝である。埋土は暗灰色粘質土で、深さは検出面より約10cmである。土師器羽釜の他、瓦器、須恵器、土師器の小片が少量出土した。

ＳＤ２　調査区の南端寄り約34～35ｍの地点で検出した北西方向に向かって伸びる溝である。埋土は暗灰色粘質土で、深さは検出面より約10cmである。出土遺物はない。

４　遺　物

Ａ　縄文時代の遺物

１・２とも試掘坑№21から出土し、おそらく同一個体のものと思われる。後期の中葉に属するものと考えられる。

Ｂ　奈良時代の遺物

３は、包含層から出土した須恵器長頸壷の口頸部である。頸接合部から折れた状態で出土した。頸接合部には、調整段階で頸内部から押さえた痕跡が見られる。

Ｃ　平安時代の遺物

４は、ＳＤ１から出土した土師器羽釜の口縁部片である。端部が内側に短く折り返される。12世紀頃のものと思われる。

Ｄ　鎌倉～室町時代の遺物

５は、包含層から出土した天目茶椀の高台片である。高台内の削り込みの深い輪高台である。内面部に鉄釉が施されている。藤澤良祐氏の編年による古瀬戸後期[7]に属し、14世紀後半～15世紀前半のものと思われる。

６は、包含層から出土した灰釉椀である。５とほぼ同時期に属するものと思われる。

７～９は丸瓦、10は平瓦である。

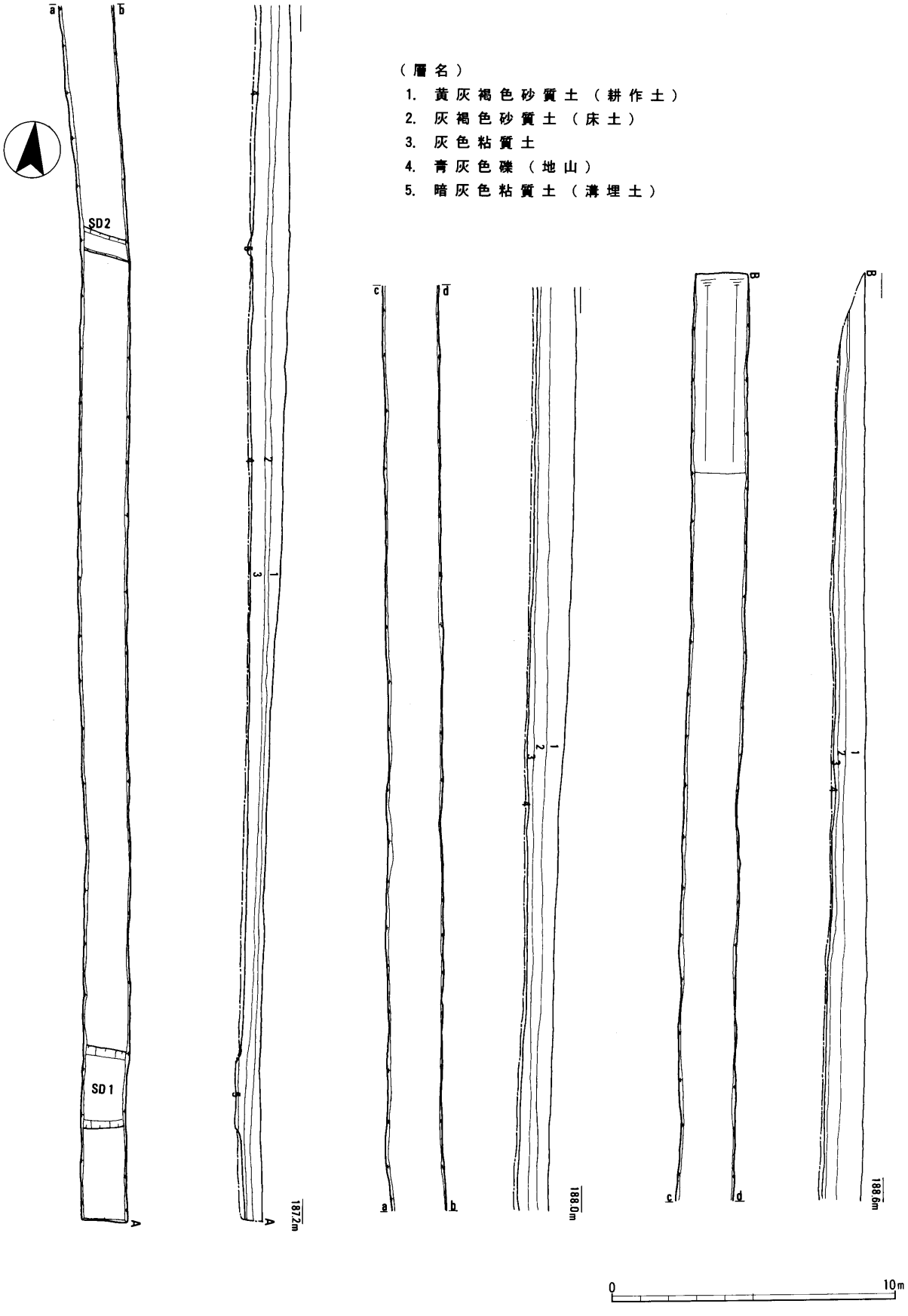
５　結　語

今回の調査は、排水路部分にあたる165㎡という狭い面積であったため、寺院跡と推定しうる遺構を確認することはできなかった。しかし、調査区西側の試掘坑から多量の瓦片が出土しており、寺院が存在した可能性もある。試掘調査の結果も踏まえて考えると、良福寺が当地付近にあったとすれば、それは今回の調査区の西側の微高地に存在するのではないかと思われる。

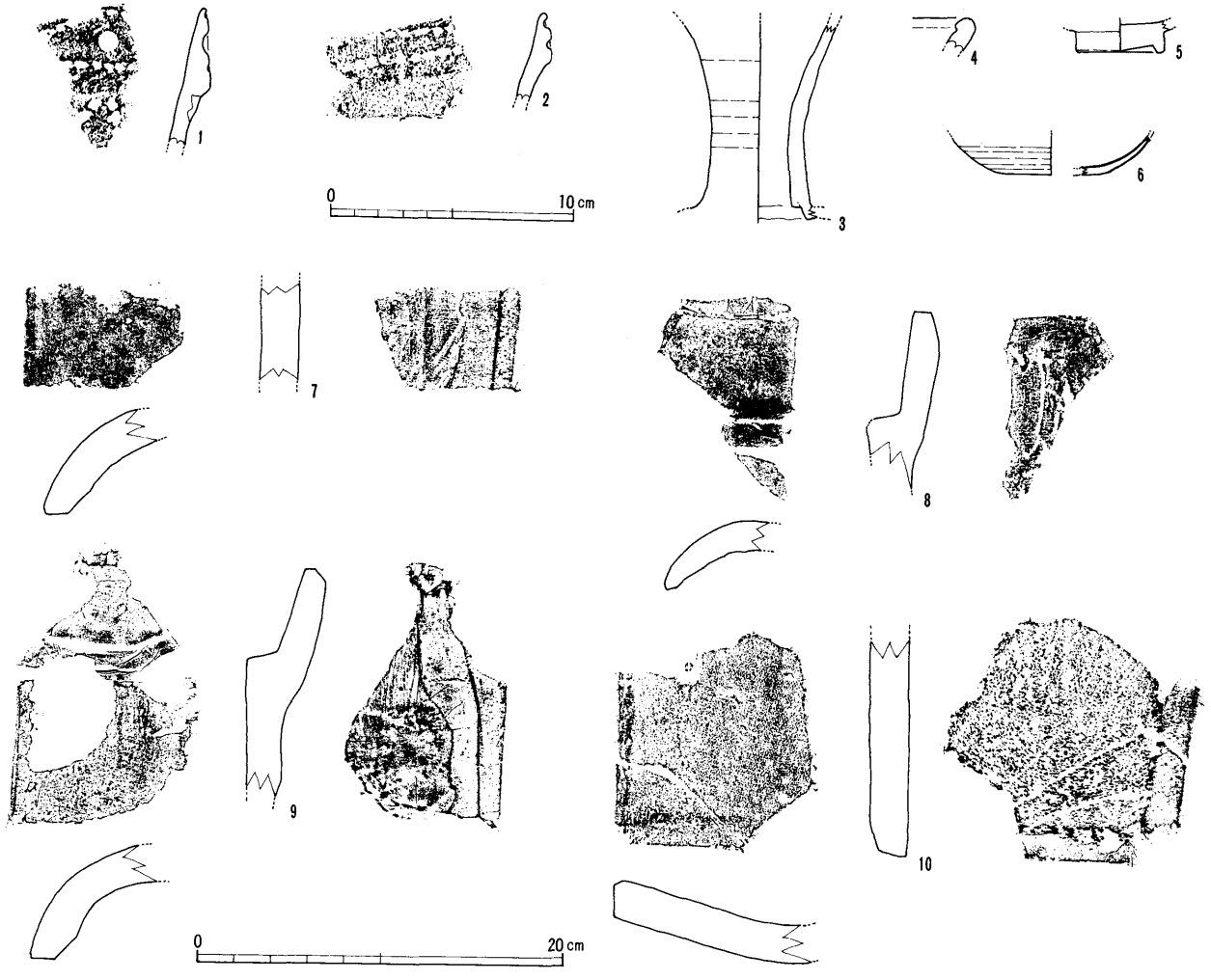
また、調査区東側の試掘坑から縄文土器が出土した。調査区西南部にあたる天道遺跡からも同時代の土器が出土していることから、木津川沿岸には古くから人々が生活していたことが分かる。今後調査が進めば、さらに類例が増えるものと考えられる。

（西澤　裕幸）

註
① 伊賀町『伊賀町史』　1979年
② 早瀬保太郎『伊賀史概説　上巻』日光印刷㈱　1973　P.531
③ 上掲②に同じ　P.533
④ 上掲②に同じ　P.537
⑤ 平子弘ほか『天道遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1989
⑥ 上掲①に同じ
⑦ 藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ｖ』瀬戸市歴史民俗資料館　1986



第34図　調査区平面図および東壁土層断面図（1：200）



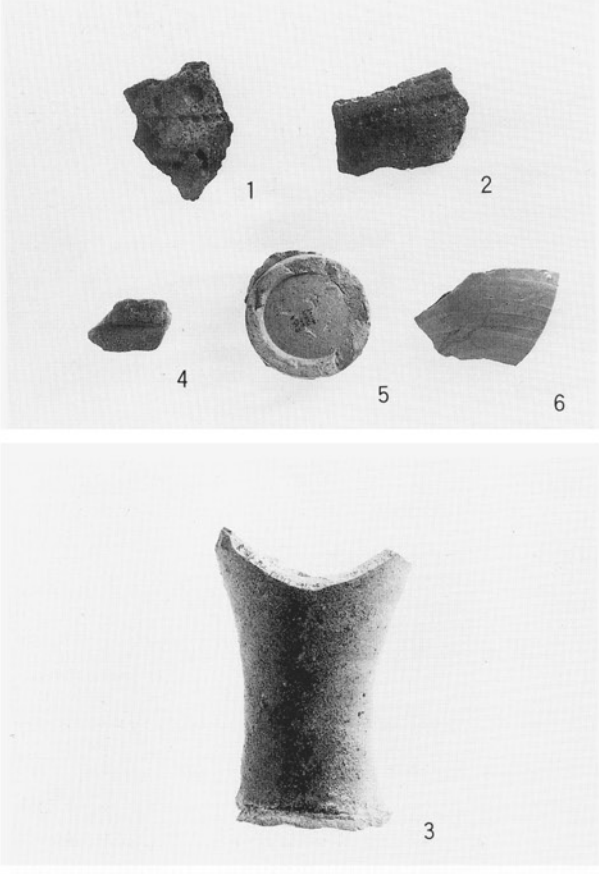
第35図　出土遺物実測図（１・２は１：３、３～10は１：４）

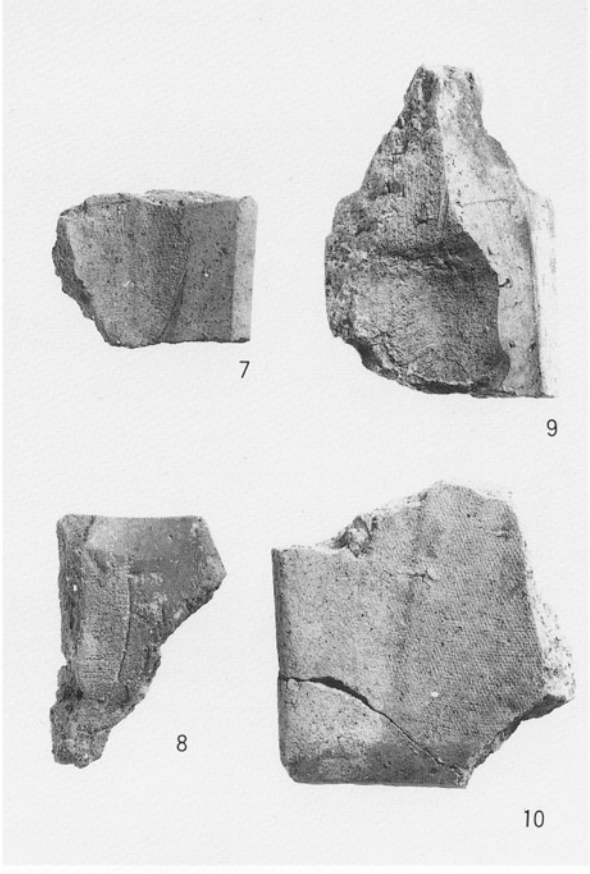
No.	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	形態・技法等の特徴	胎土	色調	残存度	備考
1	001－05	縄文土器 深鉢	試掘坑 No.21	－	波状口縁の波頂下に円形刺突文 2条の水平な刺突列と八の字状刺突列	粗（1mm 以下の砂粒を多く含む）	10YR7／3 にぶい黄橙色		2と同一個体か
2	001－04	縄文土器 深鉢	試掘坑 No.21	－	波状口縁の波頂部近く、口縁に2条の刺突列粒	粗（1mm 以下の砂を多く含む）	10YR7／3 にぶい黄橙色		1と同一個体か
3	001－06	須恵器 長頸壺	包含層	－	内面下部オサエ、ロクロナデ	やや粗（細砂粒）	素地N7／ 灰白色 釉色7.5Y4／2 灰オリーブ色着	頸部完形	内外面にまばらに自然釉付
4	001－02	土師器 羽釜	ＳＤ1	－		やや粗（細砂粒）	10YR6／4 にぶい黄橙色	口縁部小片	口縁部が内側に短く折り返される
5	001－03	陶器 天目茶椀	包含層	底径 4.8	高台外面部ケズリ出し調整、内面ナデ調整、	密（微砂粒）	素地2.5Y7／2 灰黄色 施釉釉色7.5YR4／2灰褐色	底部50%	
6	001－01	施釉陶器 灰釉椀	包含層	底径 3.2	ロクロナデ、内面全体及び外面体部に施釉	密（微砂粒）	素地7.5Y6／1 灰色 釉色7.5Y6／2 灰オリーブ色	小片	
7	003－01	瓦 丸瓦	試掘坑 No.28	－	凸面縄タタキ後ナデ 凹面布目痕	やや粗（2～3mmの小石を含む）	N5／灰色	小片	筒部のみ、内外面にいぶしがかかる
8	002－01	瓦 丸瓦	試掘坑 No.28	－	凸面ナデ 凹面布目痕	やや粗（2～3mmの小石を含む）	5YR5／1褐灰色	小片	内外面にいぶしがかかる
9	002－02	瓦 丸瓦	試掘坑 No.28	－	凸面ナデ 凹面布目痕	やや粗（2～3mmの小石を含む）	N5／ 灰色	小片	内外面にいぶしがかかる
10	003－02	瓦 平瓦	試掘坑 No.28	－	凸面ナデ 端面ヘラケズリ 凹面布目痕	やや粗（2～3mmの小石を含む）	10YR8／6 黄橙色	小片	内外面にいぶしがかかる

第５表　出土遺物観察表

調査区全景（南から）

ＳＤＩ（北から）





出土遺物（１：３）

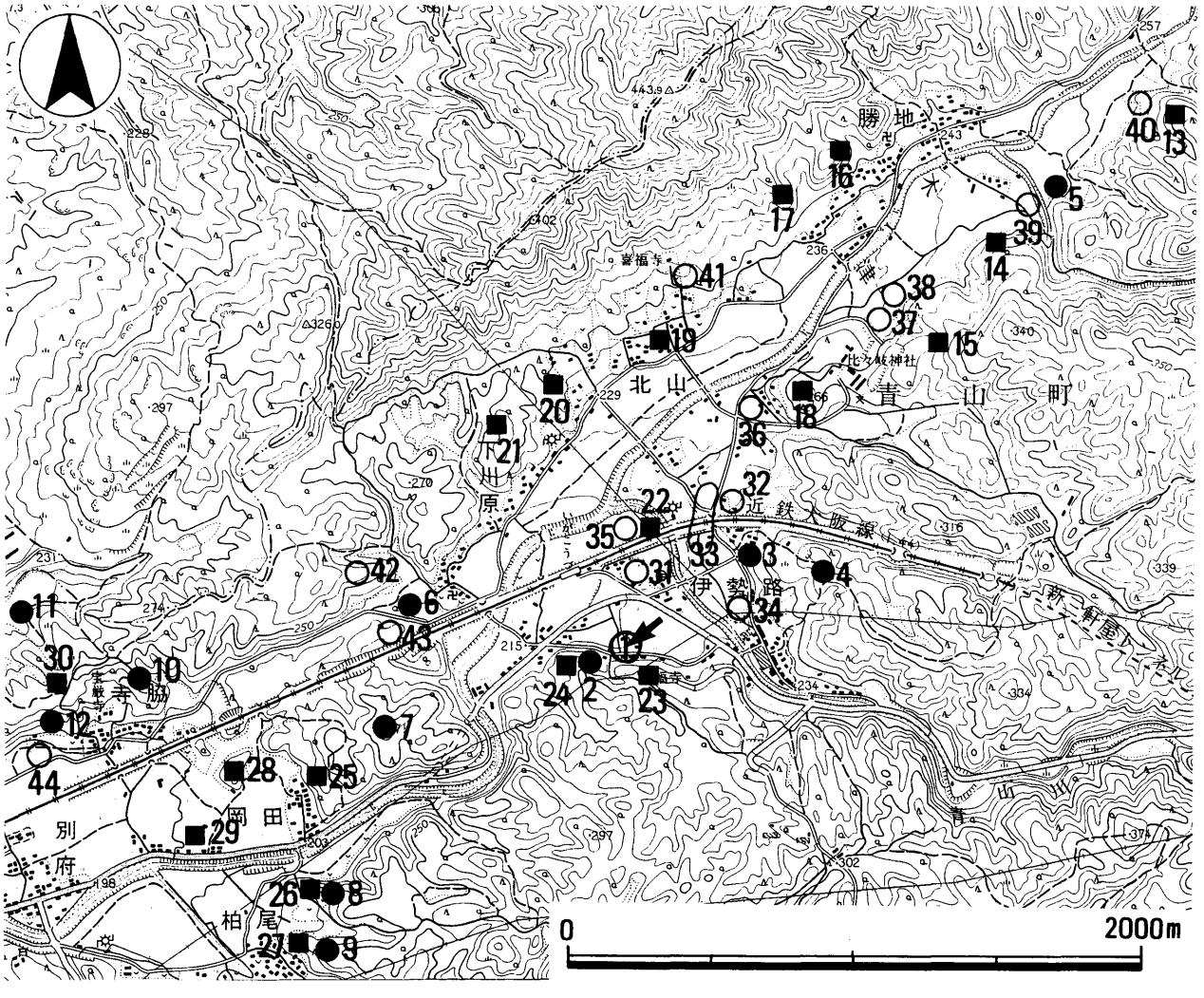
Ⅳ. 名賀郡青山町　高寺南遺跡

1　はじめに

高寺南遺跡（1）は、行政上は名賀郡青山町伊勢路字高寺に所在する。木津川の支流、青山川の南岸に位置し、標高は約223mである。現況は、水田および畑で、北に向かって緩やかに傾斜する。当遺跡のすぐ南には初瀬街道が東西に走る。

周辺には数多くの遺跡が存在するが、その多くが古墳群と中世城館である。しかもそのほとんどが、木津川に挟まれた南北の丘陵上に位置する（第36図・表6）。しかし、近年当該地域周辺で県営ほ場整備事業に伴って六地蔵B遺跡[1]（33）や高寺遺跡[2]（31）川南A遺跡(37)などの発掘調査が行われた結果、いままで空白であった飛鳥時代から鎌倉時代にかけての、低地での遺跡の存在も徐々に判明しつつある（第37図）。

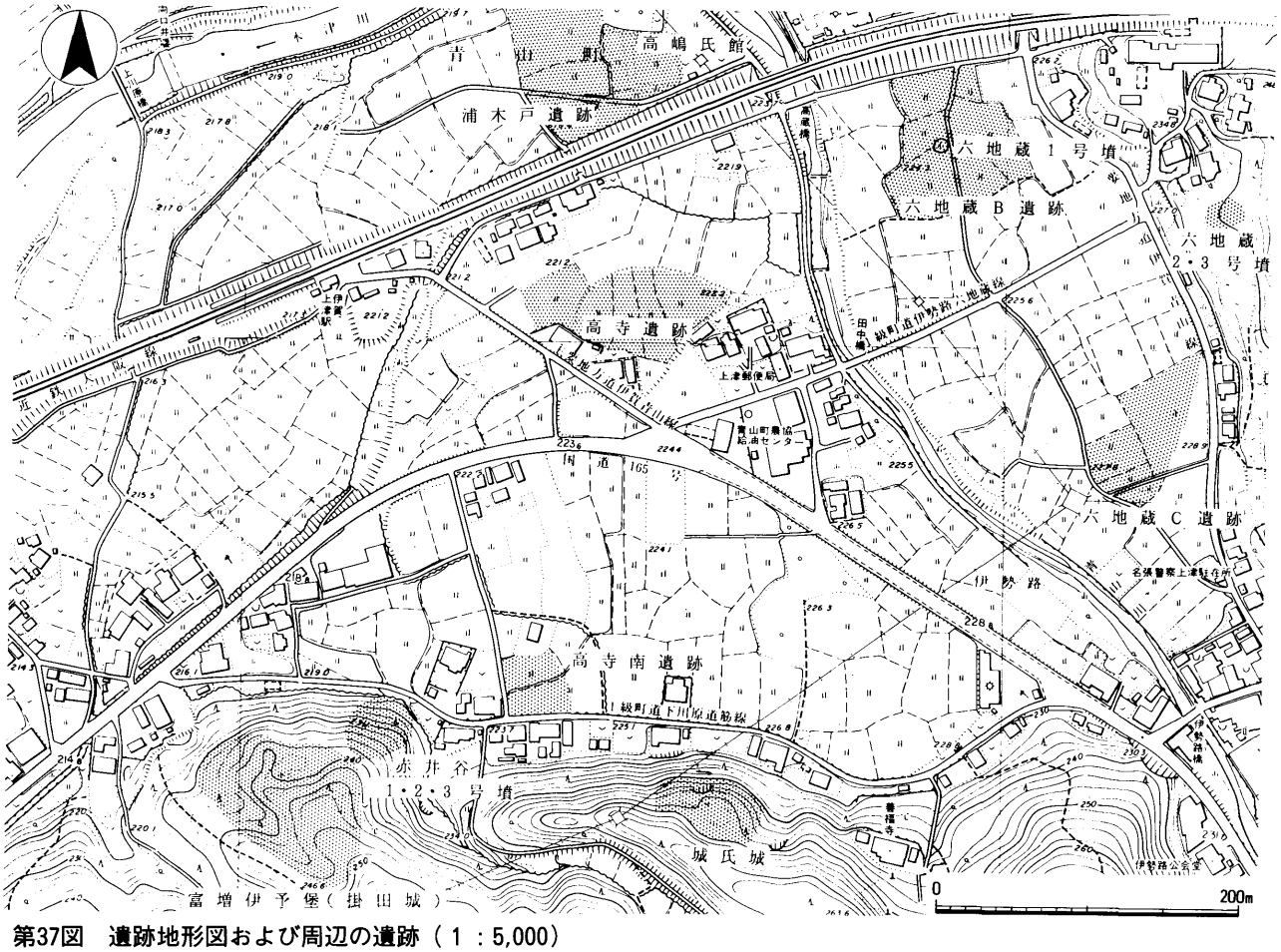
当遺跡は、平成7年度の県営ほ場整備事業（上津地区）に伴って分布調査・試掘調査を実施し、その結果事業地内の西端部分の1,400㎡が遺跡であることが判明した。この遺跡範囲の西側及び南側が排水路によって削平を受けるため、130㎡について本調査を行うことになった。調査区は、遺跡南側に東西



第36図　遺跡位置図（1：25,000）国土地理院「伊勢路」　●印：古墳群、■印：中世城館、○印：その他の遺跡

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	備考
1	高寺南遺跡	青山町伊勢路字高寺	集落	鎌倉～	
2	赤井谷古墳群	青山町伊勢路字赤井谷873	古墳	古墳	1号：径5m・高2m 2号：径9m・高2m 3号：径6m・高2m
3	六地蔵古墳群	青山町伊勢路字六地蔵	古墳	古墳	1号：径8m・高3m・横穴 2号： 3号：径20m・高1.8m・横穴
4	谷ノ奥古墳群	青山町伊勢路字谷奥	古墳	古墳	1号：径8m・高1m・横穴 2号：径11m・高3m・横穴 3号：径10m・高3m・横穴 4号：径15m・高1.5m 5号：径15m 6号：径14m・高1.5m・横穴
5	勝地大坪古墳群	青山町勝地	古墳	古墳	1号：径12m・横穴 2号：径12.4m・横穴 3号：横穴 ＊H3県営ほ場整備事業で調査
6	大坪1号墳	青山町下川原字大坪	古墳	古墳	径12m・高1.5m・直刀・耳飾
7	手登古墳群	青山町岡田字手登	古墳	古墳	1号：横穴 2号・径10m・高1.5m 3号：横穴 4号： 5号：径9.5m・高1.4m 6号：径14.5×12.8・高1.8m
8	岡田古墳群	青山町岡田字向	古墳	古墳	1号：横穴 2号・径10m・高1.8m 3号：径10m・高1.5m（方） 4号：径12×8・高4m 5号：横穴
9	中森・北の権古墳群	青山町柏尾字中森	古墳	古墳	中森1号：横穴 中森2号：径10m・高2m 中森3号： 北の権1号：横穴 北の権2号：横穴 北の権3号：径9m・高1.5m 北の権4号：径9m・高1.2m 北の権5号：径10.6m・高0.9m 北の権6号：径6.5m・高1.5m 北の権7号：径9.4m・高0.7m
10	東谷1号墳	青山町寺脇字東谷	古墳	古墳	円墳・鉄器類・玉類
11	朝妻1号墳	青山町寺脇字朝妻	古墳	古墳	円墳・横穴
12	安田古墳群	青山町寺脇字安田	古墳	古墳	1号： 2号：径13m・高2.1m
13	薮内宅址	青山町妙楽寺字砂田	城砦	室町	土塁・空堀・内部40m×40m
14	城氏堡	青山町勝地字中	城砦	室町	L形土塁・内部130m×24m
15	十郎宅址	青山町北山字十郎山	城砦	室町	100m四方
16	新左近宅址	青山町勝地字中416	城砦	室町	コの字土塁・内部15m×11m 石仏（元禄13年銘）
17	甚二郎城址	青山町勝地字谷山	城砦	室町	110m×70m
18	宮下城址	青山町北山字宮下	城砦	室町	40m×30m
19	小島氏館址	青山町北山字東出669	城砦	室町	60m×60m
20	木田氏館址	青山町北山字辻790	城砦	室町	65m×110m
21	西尾氏堡	青山町北山字辻	城砦	室町	12×26m,22×37m 2段平坦地
22	高嶋氏館	青山町伊勢路字浦戸	城砦	室町	コの字土塁内部26.7m×29.5m
23	城氏城	青山町伊勢路字道筋738	城砦	室町	土塁・空堀完存
24	富増伊予堡	青山町下川原字六拾	城砦	室町	土塁・空堀完存内部40m×50m
25	竹岡左馬介館址	青山町岡田字大田	城砦	室町	70m×－
26	小鴨氏堡	青山町岡田字向	城砦	室町	土塁・空堀・外周60m×70m
27	本田氏堡	青山町柏尾字中森	城砦室	町	
28	宮嶋氏堡	青山町寺脇字大田	城砦	室町	コの字土塁2段・外周26×33m
29	竹岡兵庫館址	青山町岡田字高屋	城砦	室町	50m×30m
30	川上氏堡	青山町川上字中縄手1061	城砦	室町	山頂に土塁完存
31	高寺遺跡	青山町伊勢路字高寺	集落		
32	六地蔵A遺跡	青山町伊勢路字六地蔵	集落		
33	六地蔵B遺跡	青山町伊勢路字六地蔵	集落		
34	六地蔵C遺跡	青山町伊勢路字六地蔵	集落		
35	浦木戸遺跡	青山町伊勢路字浦木戸			
36	久保遺跡	青山町伊勢路字久保			
37	川南A遺跡	青山町勝地字川南			
38	川南B遺跡	青山町勝地字川南			
39	川南D遺跡	青山町勝地字川南			
40	勝地中世墓群	青山町勝地字大坪			
41	七仏薬師院址	青山町北山字辻	寺院跡	鎌倉	規模不明・石仏
42	新福寺跡	青山町下川原字七谷	寺院跡	室町	規模不明・井戸・墓地跡・礎石
43	如来寺跡	青山町下川原字大坪	寺院跡		規模不明・井戸
44	来迎寺跡	青山町別府字中道	寺院跡	鎌倉	規模不明・井戸・50×400m

第6表　周辺の遺跡一覧表



第37図　遺跡地形図および周辺の遺跡（1：5,000）

方向37m、西側に南北方向32m、共に幅2mの調査溝を「L」字状に設定した（第38図）。調査期間は平成7年10月11日～13日の3日間である。

2　層序と遺構

土層の基本層序は、第1層＝表土、第2層＝淡灰褐色粘質土、第3層＝淡灰褐色粘質（赤褐色の鉄分沈着）、第4層＝暗灰褐色粘質砂、第5層＝暗黄褐色粘質土となり、遺構検出面は第5層上面とした。東西方向の調査区では、表土の下約20～30cmで第5層＝暗黄褐色粘質土となる。一方、南北方向の調査区では南端付近から北に向かう落ち込みがあり、比高は南端と北端では約60～70cmである。この部分に暗赤灰色や淡黒灰色の粘質土が堆積している。なお、南北方向の調査区の北側約6mの範囲から灰褐色の礫層が始まり、さらに北へ落ち込む。

検出できた遺構は、調査面積が狭いためピット10数個と土坑数基にとどまる。このピット群も調査区内では並ばず、建物の柱穴とは断定しかねる。

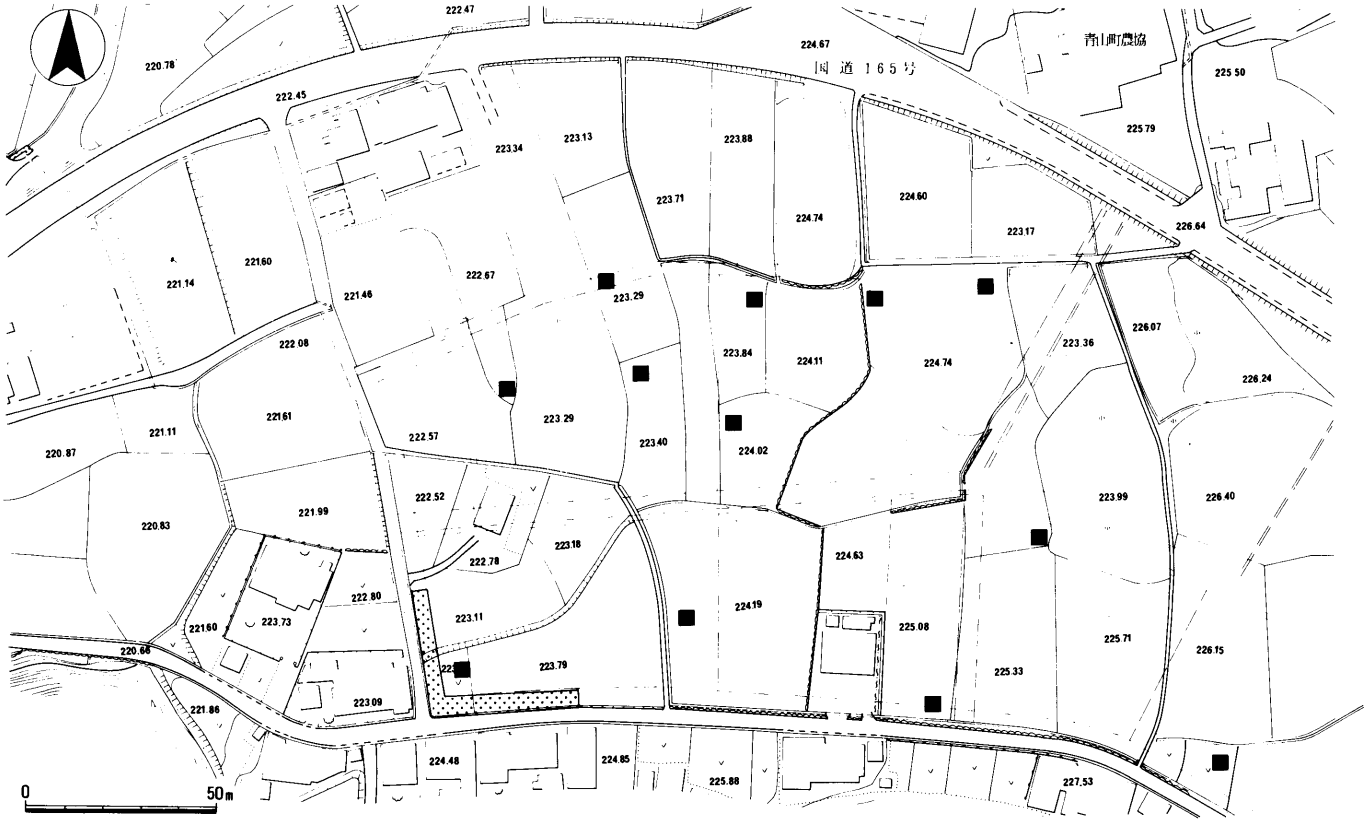
ＳＫ３（第40図）　南北方向の調査区の中央やや南よりで検出した。埋土は、明黄褐色粘質土に炭化物を含む。一辺約70cmのやや歪な四角形を呈し、検出面からの深さは約10cmである。土師器の甕片が出土したが、時期は不明である。

ＳＫ４　ＳＫ３の南約2mで検出した。暗灰褐色の埋土で、長軸約80cm、短軸約60cmの楕円形の土坑である。黒色土器の椀片が1点出土した。

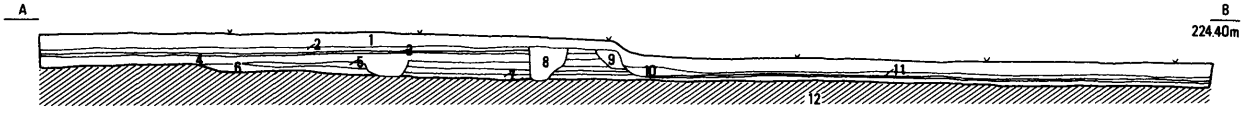
ピット５（第41図）　南北方向の調査区の北側で検出した。直径約30cm、深さは検出面より約20cmの円形である。この調査区ではいくつかのピットを検出したが、そのほとんどに遺物は含まれておらず、時期を決定するに至らない。しかし、唯一このピット5からは、土師器小皿が1点完形で出土した。

ＳＫ７　東西方向の調査区の中央で検出した。東西に約10mの土坑で、北に向かって広がる。埋土は明褐色土で、深さは検出面より約10cmである。土師器甕片・小皿片、瓦器片などが出土した。

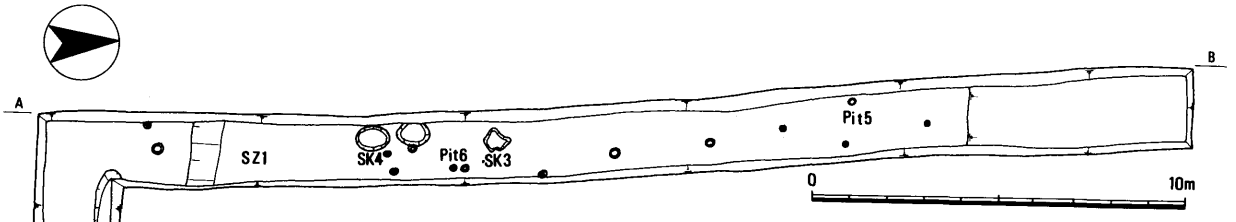
ＳＫ10　東西方向の調査区の西側で検出した。東西に約8mの土坑である。ＳＫ７同様、埋土は明茶褐



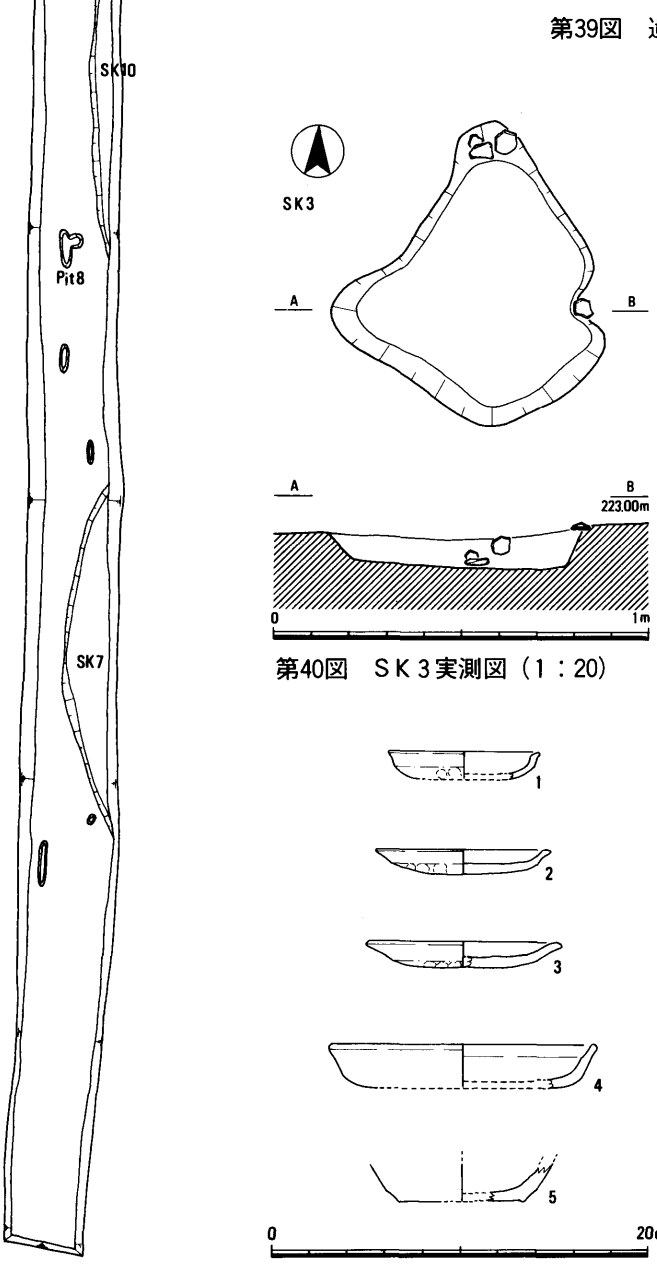
第38図　調査区位置図（１：2,000）　■印：試掘坑



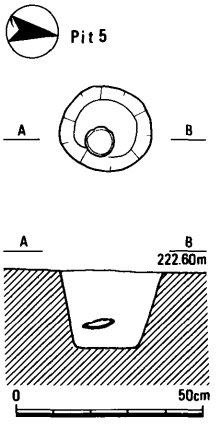
1 表土　2 淡灰褐色粘質土　3 2に赤褐色鉄分含む　4 暗灰褐色粘質砂　5 暗赤灰色粘質土　6 淡黒灰色粘質土　7 黒灰色粘質土　8 攪乱　9 淡灰白色砂質土　10 灰褐色粘質砂　11 赤褐色粘質砂　12 暗黄褐色粘質土



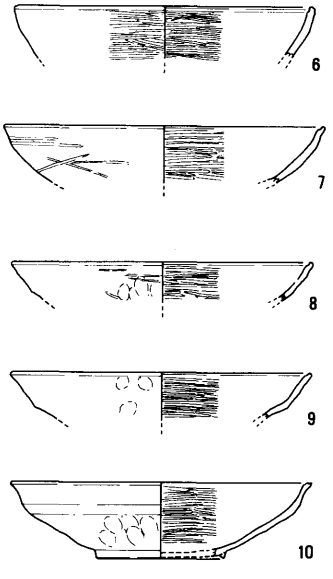
第39図　遺構平面図および西壁土層断面図（1：200）



第40図　ＳＫ３実測図（1：20）



第41図　ピット５実測図（1：20）



第42図　出土遺物実測図（1：4）

色土で、深さは検出面より約5㎝である。土師器片・瓦器片が出土した。このＳＫ10と前述のＳＫ７はともに北側に広がる別の土坑として報告するが、後述の自然の落ち込みの一部である可能性も考えられる。

ＳＺ１　南北方向の調査区の南端から北に向けて確認した。調査時点では東西方向の溝と考えＳＤ１として検出したが、西側土層断面を観察した結果、自然の落ち込みと判断した。ここからは、須恵器片・土師器片・瓦器片などが出土した。

3　遺　物

出土遺物は、瓦器椀・土師器小皿など12世紀後葉～13世紀前葉の遺物がほとんどであるが、奈良・平安時代の遺物も若干出土した。遺物量は、整理箱に１箱である。この遺物のほとんどは細片であるが、唯一ピット５から土師器小皿の完形品が出土した。以下、遺構別に出土遺物を記述するが、詳細は観察表を参照されたい。

ピット５出土遺物

土師器小皿（２）　口縁部をヨコナデして外反させ、端部は丸くおさめる。底部外面には指圧痕が残る。

ＳＫ７出土遺物

須恵器壷（５）　底部である。高台が剥離しているが、奈良時代のものであろう。
瓦器椀（９・10）　９は、口縁部外面にヨコナデを施し、端部内面に浅い沈線を巡らす。体部外面は、指圧痕が残り、ヘラミガキは施されない。10は、口縁部は、強いヨコナデによって大きく外反する。体部外面には指圧痕が残り、内面にはヘラミガキを施す。底部には断面三角形の低く小さい高台が貼り付けられる。ともに山田編年[3]のⅢ段階１型式に相当するものと思われる。

ピット８出土遺物

瓦器椀（８）　口縁部は、ヨコナデによりやや外反する。体部外面に粗いヘラミガキを施す。山田編年のⅡ段階４型式に相当するものと思われる。

ＳＫ10出土遺物

瓦器椀（７）　内弯気味に体部が立ち上がり、口縁はヨコナデによりやや外反する。体部外面に粗いヘラミガキを施し、８同様、山田編年のⅡ段階４型式に相当するものと思われる。

ＳＺ１出土遺物

土師器小皿（３）　底部外面には指圧痕が残り、口縁部はヨコナデを施す。
瓦器椀（６）　体部は、やや直立気味である。内外面ともに細かいヘラミガキを施す。山田編年のⅠ段階２型式に相当するものと思われる。

包含層出土遺物

土師器（１・４）　１は小皿である。口縁部は、強いヨコナデにより外方に屈曲する。４は皿である。平坦な底部から丸味を持って口縁に至る。端部はヨコナデを施す。平安時代のものであろう。

4　結　語

今回の調査は、排水路部分の130㎡という狭い面積であったため、明確な遺構は確認できなかったが、12世紀後葉～13世紀前葉を中心とした集落の一端を垣間見ることができた。試掘調査の結果も踏まえて考えると、集落の中心は今回調査した部分の西側および南側に存在するものと思われる。

最後に、ピット５出土の土師器小皿について記述しておく。この遺物は、ピットの底近くから完形で出土した。このピットを掘立柱建物の柱穴と考えた場合、柱掘形の部分出土か柱痕跡の部分出土かは判然としなかったが、柱掘形の部分に創建時、意識的に埋納したと考えるのが妥当であろう。

一方、このピットが土器を埋納するための遺構である可能性を秘めている。土坑や井戸などの遺構でも土器が多く完全な形で出土することをよく経験する。しかしこの場合、その土器が正立状態か倒立状

態か、1個体か複数かなどによって、供献か埋設か貯蔵か廃棄かなどの行為の解釈も違ってくる。このピットに関しては、皿という供膳具あるいは食膳具が1個体正立状態で底近くから出土した。

時代や地域は異なるが、この様な完形な土器がその大きさを入れるに足りるだけの規模の遺構から出土した例などを検討した長原遺跡の論考がある[④]。この論考によるとこの様な例は、条里線付近に集中することから、何らかの地鎮に係わるものと想定されている。このピットもそのような地鎮に係わって埋納された可能性も考えられる。

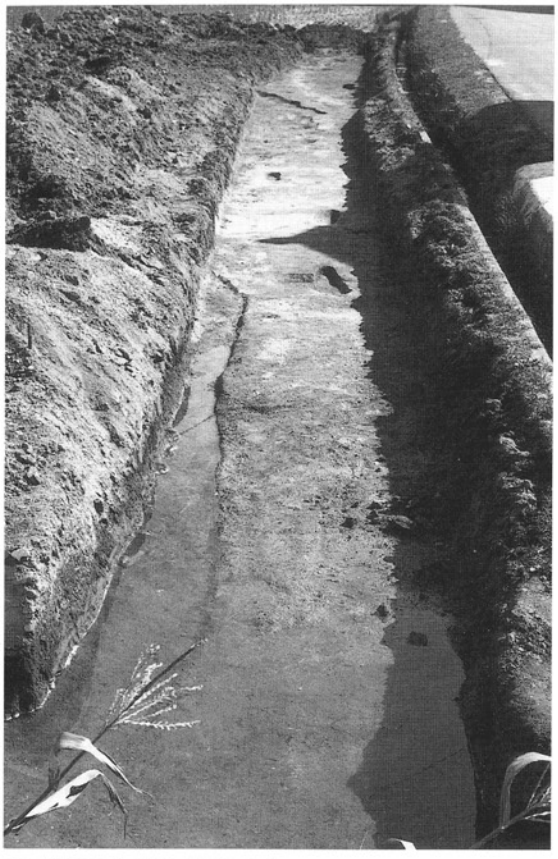
いずれにしても、調査区が狭く多くを語ることはできないが、この様な土器埋納遺構の検出にあたっては詳細な観察が必要であり、類例の増加によりさらに検討を加えなければならないであろう。

（服部芳人）

① 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報5』 1994
② 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報6』 1995
③ 山田猛「瓦器に関する若干の考察」『中世土器の基礎研究Ⅱ』中世土器研究会 1986
③ 櫻井久之 第3節「長原遺跡の土器埋納遺構」－飛鳥～平安時代－ 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ』(財)大阪市文化財協会 1995

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	計測値(cm) 口径	器高	その他	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	001-09	土師器 小皿	南北調査区 包含層	8.0	1.5	—	外面 底部指圧痕・口縁横ナデ 内面 底部指圧痕	微砂粒含む	良	灰 N4／	1/6	
2	001-01	土師器 小皿	南北調査区 Pit5	9.25	1.4	—	外面 底部指圧痕・口縁横ナデ 内面 底部ナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙10YR6/3 明赤褐 5YR5/6	完存	
3	001-02	土師器 小皿	南北調査区 SD1	10.4	1.4	—	外面 底部指圧痕・口縁横ナデ 内面 底部ナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	1/2	
4	001-03	土師器 皿	南北調査区 包含層	14.2	2.3	—	外面 底部ナデ・口縁横ナデ 内面 底部ナデ	細砂粒含む	良	にぶい橙 5YR7/4	1/16	
5	001-10	須恵器 壺	東西調査区 SK7	—	—	6.4 高台径	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰 N6／	1/4	高台が剥離
6	001-08	瓦器 椀	南北調査区 SZ1	16.0	—	—	外面 口縁横ナデ・ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	微砂粒含む	良	灰 N5／	1/10	
7	001-04	瓦器 椀	東西調査区 SK10	17.1	—	—	外面 指圧痕・口縁横ナデ・ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	微砂粒含む	良	灰 N5／	1/8	
8	001-05	瓦器 椀	東西調査区 Pit8	16.0	—	—	外面 指圧痕・口縁横ナデ・ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	微砂粒含む	良	灰 N6／	1/10	
9	001-07	瓦器 椀	東西調査区 SK7	16.0	—	—	外面 指圧痕・口縁横ナデ 内面 ヘラミガキ	微砂粒含む	良	灰黄褐 10YR6/2 灰 7.5Y5/1	1/12	
10	001-10	瓦器 椀	東西調査区 SK7	16.0	4.05	7.0 高台径	外面 指圧痕・口縁横ナデ 内面 ヘラミガキ	細砂粒含む	良	灰 N6／	1/8	

第7表 出土遺物観察表



東西調査区全景（西から）

南北調査区全景（北から）

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひやま いせき・やまのかみいせき・りょうふくじ あと・たかでらみなみ いせき
書名	火山遺跡・山神遺跡・良福寺跡・高寺南遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	133-8
編著者名	船越重伸・服部芳人・西澤裕幸
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-03　三重県多気郡明和町竹川５０３　Tel　05965(2)1732
発行年月日	西暦１９９６年　３月２９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ひやまいせき 火山遺跡	みえけん うえのし 三重県上野市 やがみあざひやま 山神字火山	24206	1196	34° 47′ 40″	136° 08′ 28″	19950606～ 19950926	2,730	県営ほ場整備事業に伴う事前調査
やまのかみいせき 山神遺跡	みえけん うえのし 三重県上野市 おきあざやまのかみ 沖字山神	24206	1213	34° 42′ 45″	136° 10′ 03″	19950518～ 19950602	300	農道整備事業に伴う事前調査
りょうふくじあと 良福寺跡	みえけん あやまぐん 三重県阿山郡 いがちょうおおあざしもつげ 伊賀町大字下柘植 あざてらのごう 字寺後	24481	129	34° 49′ 31″	136° 13′ 20″	19951018～ 19951025	165	県営ほ場整備事業に伴う事前調査
たかでらみなみいせき 高寺南遺跡	みえけん ながぐん 三重県名賀郡 あおやまちょう いせじ 青山町伊勢路 あざたかでら 字高寺	24501	235	34° 40′ 38″	136° 12′ 35″	19951011～ 19951013	130	県営ほ場整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
火山遺跡	生産遺跡	室町	鋳造土坑１基 廃棄土坑 掘立柱建物１棟 土坑、溝、井戸	鋳型、溶解炉、鉱滓 三叉状土製品、羽口 土符 土師器、瓦器、瓦 陶磁器、銅銭	県内で初めて鋳造遺構を確認した。 上野市北部でしか出土しない「土符」が同一遺跡内から６点出土した。
山神遺跡	集落跡	弥生～古墳	竪穴住居２棟	弥生土器、須恵器 古式土師器	弥生～古墳時代の集落跡。
良福寺跡	寺院跡	縄文 中世	溝２条	縄文土器、須恵器 瓦器、瓦	良福寺の寺域を画する溝の可能性あり。
高寺南遺跡	集落跡	中世	柱穴、土坑	須恵器、土師器 瓦器、山茶椀	12～13世紀を中心とした集落跡。

平成6(1994)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年6月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告１３３－８

火山遺跡・山神遺跡
良福寺跡・高寺南遺跡

１９９６（平成８）年３月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　東海印刷株式会社